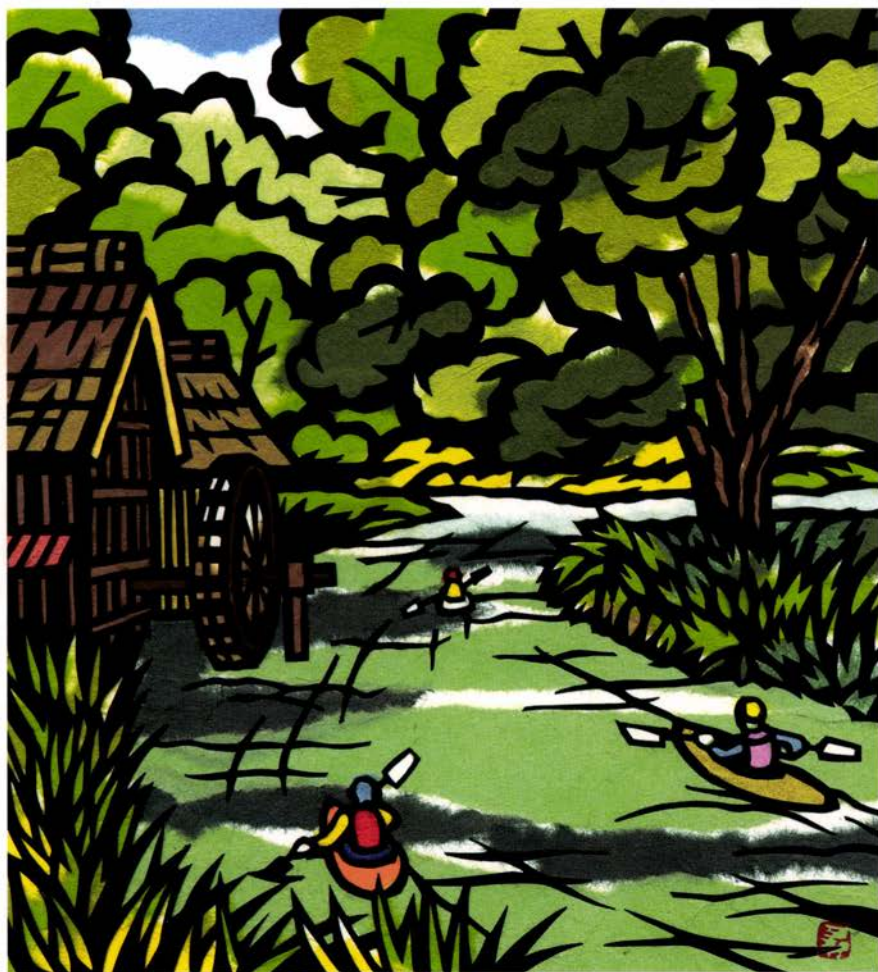


川柳塔



昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十八年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇六九号

日川協加盟

No.1069

六月号

第二十二回 川柳塔まつり

とき 十月一日(土)

ところ ホテル・アウィーナ大阪

◎ 詳細は五月号135頁をご覧下さい。恒例によって同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親会を開催します。同人総会以外はどなたでも参加できますので、ふるってご参加ください。

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は左記の通りです。巻末の綴じ込み残暑見舞広告原稿台紙に原稿を貼付(又は記入)してお申込下さい。よろしくお願い致します。

★個人

① 1/4頁 一口 二〇〇〇円
② 1/6頁 一口 三〇〇〇円

★団体

① 1/3頁 六〇〇〇円 ③ 2/3頁 一二〇〇〇円
② 1/2頁 九〇〇〇円 ④ 一頁 一八〇〇〇円

▼原稿締切 六月二十日

川柳塔社

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

番傘わかくさ創立70周年記念
油谷克己句集「大和川」発刊

全国川柳大会

小島 蘭 幸

弁天町のホームに降りると、滋賀の小梶忠雄氏に偶然お会いすることが出来ました。開場まで少し時間がありましたので、コーヒーを飲みながら川柳について語り合うことが出来ました。楽しい時間でした。

やわらかな視線にはいと言いました 忠雄

大会場は、お馴染みのホテル大阪ベイタワーです。受付を済ませると、すでに多くの方が席に着いておられました。私は、選句までの時間を利用して、新家完司川柳塔社理事長をはじめ多くの柳友の皆様と言葉を交わすことが出来ました。

宿題「親子」の選をしていると、ふっと橘高薫風先生のお顔が浮かんできました。昭和58年NHK大阪放送局からゴールデンタイムに全国放送された「よめやうたえや川柳天国」のお題が「親子」だったのです。薫風先生は森中恵美子先生と一緒に選者として出演されました。

長男の頭へ手を載せやすき背丈 薫風

記念式典は、午後一時から始まりました。私は選句が遅れて、開会のことば、挨拶、祝いのことばを聞くことが出来ませんでした。が、句集「大和川」を発刊されました油谷克己氏の花束贈呈と感謝のことばは聞くことが出来ました。句集「大和川」は、妻百句からはじまります。

何よりの幸せ妻に惚れている 克己

続いて始まった、露の団姫、露の吉次氏の落語二題は実に楽しいものでした。プロの迫力と風格がありました。

句会は、田中新一大会会長の謝選から始まりました。宿題選者は、赤松ますみ、大西泰世、尾藤一泉、森中恵美子、私の五名が務めました。憧れの川柳作家の披露を直接生で聞けることは、大会出席の醍醐味の一つです。

懇親宴は、はらはらドキドキ、豊来家大治朗氏の大神楽から始まりました。カンパイ!!、美味しいお酒と料理、カラオケ、楽しい時間はアツという間に過ぎます。フィナーレは、全員で「四季のうた」を合唱、大きな一つの輪が出来ました。出席者は、三二二名、番傘わかくさの和をはのほのと感じることが出来た一日でした。

座右の句

奈落まで燥いだ風と火とわたし

(森子)

私の句

本物になるまで笑顔崩さない

中村 恵

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「大王わさび農場の清流」

■巻頭言

香拿わかくさ創立70周年記念
油谷克己句集「大和川」発刊

全国川柳大会……小島 蘭 幸……(1)

黒川紫香先生……

山本希久子……(2)

川柳塔(同人吟)……

小島 蘭 幸選……(4)

川柳塔の川柳讃歌⁽¹⁸⁾……

木津川 計……(44)

新川柳鑑賞⁽⁵²⁾……

麻生 路 郎……(45)

自選集……

(46)

温故知新……

(49)

水煙抄……

川上大輪選……(50)

俳風柳多留一二篇研究 36……

(70)

橘高薫風句抄……

(72)

英語 de Senryu⁽⁵⁴⁾……

吉村侑久代……(73)

愛染帖……

新家完司選……(74)

檸檬抄「浴びる」……

三浦強一・長浜美籠共選……(78)

黒川紫香先生

山 本 希久子

校門を出ると一年生走る

川柳塔のおじいちゃんとして親しまれた紫香先生は川柳塔きつての御長寿、白寿でその生涯を閉じられるまで七十余年を川柳界に貢献された。

春夏秋冬古墳の謎を秘める篇

この句を刻んだ句碑は昭和六十三年尼崎市文化功労賞の受賞を記念して市の大井戸公園に建立された。他にも長年、社会的にすぐれた活動を続ける九十歳以上の高齢者に贈られる兵庫県高齢者特別賞なども、川柳家としては初めての受賞をされている。

平成元年発行の句集『むらさき』の序文に西尾葉氏は「大声をださずにユーモラスな言葉をボソボソと吐いてニコリと笑われるところは紫の衣を着た大僧正の風格がある」と書いておられる。

また橘高薫風氏は「紫香さんは大久保彦左衛門である。関西で名だたる実業家小林一三に少年の頃から身近に仕えて鍛え上げられた性根だけを取り上げても畏敬に値する。紫香さんは、人の短所を見ない、人の非を聞かない、人の過ちを

鮎のささやき

中居善信 (81)

一路集 (「振る」
「まぶしい」)

稲見則彦選 (82)

初歩教室「主役」

北村賢子選 (83)

インスピレーション・ナビ 印象吟

山口光久 (84)

川柳塔鑑賞

大西泰世 (86)

水煙抄鑑賞

小沢淳 (88)

せんりゅう飛行船 (65)

関本かつ子 (90)

『麻生路郎読本』余滴 (35)

新家完司 (91)

五月本社句会

栗原道夫 (92)

句会燦燦

岩崎眞里子 (94)

各地柳壇 (佳句地十選／堀 正和・籠島恵子)

川柳塔社 (98)

六月各地句会案内

岩崎眞里子 (99)

柳界展望

川柳塔社 (104)

主幹・理事長の選任について

川柳塔社 (115)

■編集後記 (ひとこと／富山ルイ子)

朱夏・勝弘 (116)

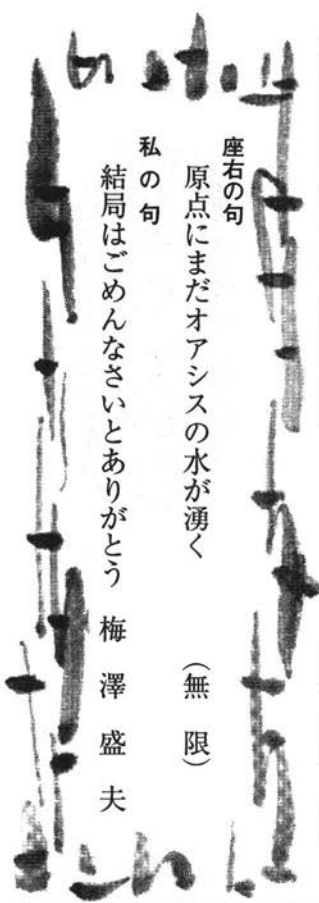
座右の句

原点にまだオアシスの水が湧く

(無限)

私の句

結局はごめんなさいとありがとう 梅澤盛夫



言わない。という戒めを骨の髄まで心得ておられる」と、その人柄を語られている。

明治四十年のお生まれ、昭和八年、正本水客、丸尾潮花と共に麻生路郎に師事、川雑時代を経て、川柳塔副主幹、相談役の任を果たされた。その間三十年間は句会部長として本社句会を一回も休まず、裏方を務められたという。

紫香先生は旅好きである。

北は北海道から南は沖縄までぶつづけ本番の旅をされ、「日本よいとこ」を実感された。

利尻富士裾野は海へ突き抜ける

以下五四七句の旅吟は海外旅行の五十句と共に「むらさき」の中に旅の句帖として納められている。

旅のプランナーでもあった紫香先生はよく地方句会や日川協大会にことよせて、その近辺の名勝地を巡る企画、切符の手配から案内までもして下さった。

九十歳を超えられた頃からは、さすがに足元が危なくなられて同行の女性たちが交替で手を引いたり、坂道では後ろから腰を押したりと賑やかな道中になった。

握手は人間だけができて、一番相手に通じ合える行動と言っておられた紫香先生はよく女性達と握手をされていた。

亡くなられて十年、先生の柔らかくて温かい手の感触は思い出と共に今も甦る。



小島蘭幸選

篠山市 酒井真由

黒猫がよぎる月下のシネマ街
ひと夏の恋サンダルをぶらさげて
押し花がはらりと君に借りた本
坂の街思い出ばかり風ばかり
俺と一緒に来ぬかとトタン屋根の猫
譲られた席だ会釈をして座る

松原市 森松まつお

A型で潔癖症でまだ独り
約束はないがいつもの店にいる
確実に豚マンの具が減っている
漬物がお美味しかったと箸を置く
ミュシランに載ったタコ焼き食べに行く
気配りを気付かさせないいい幹事

河内長野市 山岡富美子

自画像に結びがある五月闇
負の遺産ドームは雨に濡れていた
騒音のない高層の白い闇

ホットスポット乾いた街の募金箱
花疲れ珈琲館のモノローグ
淀殿の自刃の碑にも花は舞う

堺市 栞原道夫

少しよろめきながら桜に近づきぬ
桜散る無音の中で桜散る
桜散る犬は尻尾を振っている
桜散る猫は尻尾を立てている
猫の目は見ていた炎上する桜
桜から二三歩離れ離れゆく

桜井市 安土理恵

春だ春だと咲き急ぐことないのだよ
満開の春とホームのお見舞いに
くぎ煮で一杯関西人やもん
ゆきやなぎ亡母が来ている揺れている
溜めていた涙で春の絵具溶く
約束は反故にあなたはもういない

大阪市 栃尾奏子

あの時のもしもへ会いにクラス会
プロポーズ願く準備出来ていた
少し嘘少しホントの通せんぼ
手放した恋は愛だったのですね
小さじ一ほどの秘密は持っている
ねえおひさま裏切らないで下さいね

大阪市 川端一步

あげた拳下げる勇氣も備えんか
ペン持ったままで逝けたらなと思う
ニーハオに取り囲まれて真田丸
氣がつけば下流老人になっていた
予定表句会飲み会歩く会
盤寿まで夢は延長戦に入り

藤井寺市 太田扶美代

ホロロホロロ傘寿の坂へ一步二歩
一步下がって賢妻のふりをする
小さな善意見ていてくれた人がいた
入学式へ照準びつたりと桜
喜びに脆いわたくしの涙腺
少し遅れて春のプランを立てている

和歌山市 木本朱夏

空咳の2つ3つもして夜明け
おばあさんになってしまえば楽ですよ
花の下みんなやさしい声になる

諦めることも覚えて桜散る

馬鈴薯の芽にさへ悪意ある日なり

真夜中になるとカタカタ家が鳴る

弘前市 高瀬霜石

諍いは好まないけど反主流

シャーロック・ホームズ並みの妻の鼻

美しい花よ自覚をしているか

検診日イワシの群れの中にいる

炊事はきみで後片づけはぼく 平和

天気晴朗ヨッシャ休肝日が明ける

檀原市 居谷真理子

新しい春だアーモンドが咲いた

その噂見事纏ってみせましょう

吠えているいつか涙になっている

三分もあれば私に戻れます

爪を噛む癖が復活して六十路

九歳の頃から闇が棲みついた

藤井寺市 鈴木いさお

美しい破調ならいいではないか

円満の円が少うし楕円形

少食の母へ仏飯七分盛り

あの人の佳句に出会えた通り抜け

遥かなりふる里父母の墓もまた

字余りにならず字足らずにもならず

和歌山市 松原寿子

魔法かけられ童話の国を抜け出せず

野性的な素足が草によく馴染む

懐メロが私の性に合っている

家族の愛繋いで春のコンセント

ひと言が追い風になる誉め言葉

咲き切つて悔いもあろうに牡丹の朱

倉吉市 牧野芳光

ナメケモノではない歳がそうさせた

石頭も豆腐頭も花が好き

言霊と聞かされてから喋れない

人間も蜜蜂も住みにくい国

非常事態に賞味期限は考えぬ

T P P が分からないでも生きている

大阪市 若本安代

卯月にはうれし涙がよく似合う

ひとひらを髪に飾つて通り抜け

句を学ぶ楽しみありて春うらら

祝い膳ワイングラスが響き合う

想像を失くすと味気ない明日

夢語る七十年はつい昨日

唐津市 坂本蜂朗

まだ傘寿老いの兆しに蓋をする

老い二人笑み多くなり水温む

活力に沸く通学路散歩する

補聴器の手入れしながら聞く小言

夕焼けに今日の修了証もらう

初恋の人にこにことそつがない

和歌山市 古久保和子

満開の桜に呪文かけられる

花の下見知らぬ人と歩を合わせ

たんぼぼもすみれも主張譲らない

旬を頂くためなら手間は厭わない

鏡台の奥で卵を温める

生卵つると昭和なつかしい

堺市 矢倉五月

手の内を読まれたんだな処方箋

前を行く夢に息切れ酸素切れ

夕食を偶には食べにいらつしやい

お供えはいつも檸檬というお墓

たまご抱くようにいたかく誉めことば

人生の午後のおやつに絵本など

羽曳野市 三好専平

アカンよりソレデエエヤンマカシトキ

文学座出ると河豚ちり韓国語

ワンクツション置けばなんでもありません

札束のようにカードを溜めている

悠々と尻に敷かれておりにけり

逡巡が生んだ悲惨な焼野原

鳥取県 石谷 美恵子

雛箱の蓋開けせめて風入れる
美人顔時代で変わる雛の面
衝突を何辺もして無二の友
残り火を燃やして尽すボランテア
ひとときの錯覚に酔う化粧台

鳥取県 岩崎 和子

送られた句報なつかし友の顔
晴れの日も雨もいとわず句会行き
あの頃は作句に夢中花の時期
軽い足公園二人歩いたね
公園の階段登り木を抱いた

鳥取県 斉尾 くにこ

ほんとうに広い砂丘の青い空
春風に今年の抱負忘れてく
テンションが高すぎて乗り越えない
雑草は雑と思つて生きてない
花ふぶきLIVE配信しています

鳥取県 竹信 照彦

越冬の害虫若葉に喰らいつく
虫殺す薬無差別殺虫だ
終りなきジキルとハイドの世界
難民のいない世界を取り戻せ
地球上がにんげん色に染まるよう

鳥取県 西谷 悦子
春の小川の詩に元氣をもらいます
明日に延ばすな亡祖母の言葉がいつも胸

心には夫のための杖がある
物忘れ自覚をしてる惚けでない
晒すもの晒し尽して楽に生き

鳥取県 細田 裕花

称赞の一時笑い花は散る
なるようになると桜は散っていく
散り時の理想はあるがそれも欲
桜吹雪大喜びのランドセル
運不運受け取めサクラ潔し

鳥取県 松川 行男

覗き窓混浴してる渡り鳥
満開に蜂はきてない人泳ぐ
獅子舞いの口に祝儀を覗き入れ
隠し芸うまい奴が上司です
京阪神八十路の腰が曲がりすぎ

鳥取県 山下 節子

年金が狙われている孫の春
手の届くまわりに必需品を置く
ずつしりと漬物石の自己主張
家計簿のバランス主婦の見せどころ
下取りも出来ぬ断捨離採めている

鳥取市 加藤 茶人

上手い事言いはる怖い京訛
官僚が読めぬタンスのゼロ金利
のめり込む夢を語らうコップ酒
旅先の趣味も違つて老夫婦
人生に無駄などないと遍路道

鳥取市 岸 本 宏 章

若者が寸暇惜しんでするスマホ
曲がつたことがいやな友達ばかりいる
粘り勝ち狙うせつかちとの勝負
寸法がほとんど合わぬ既製服
難民を日本政府はどう捌く

鳥取市 岸 本 孝 子

順序よく並んでいつも損をする
ワンサイズ緩んだ服をまた仕舞い
訃報欄しみじみ思う長寿国
競わない馬がやさしい顔になり
およばれにベルトを少し緩めとく

鳥取市 倉 益 一 瑤

乱気流誠が見えてこなくなり
チームワーク拔群ですねおひなさま
おひなさま私も歳を取りました
丸描いただけでうん十万の軸
笑うたび生命線がのびてゆく

鳥取市 坂 本 とも湖

母となる大地他国へ根を降ろす
憲法を破ると菊の紋が泣く
細腕で我が家の領土守り抜く
前向きに生きて乱世を乗り切ろう
なでしこジャパンやつと世界の顔になり

鳥取市 田 中 憧 子

痛い痛い飛んでゆかない母の足
寝不足が母の呼ぶ声遠くする
いい出合い祈つて今日の鏡拭く
天気よいだけでやる気が湧いてくる
我が子だと思えばどなたにも愛を

鳥取市 棚 田 大

何故なんだ無気味な事件どんと増え
雪も又世に喝を入れ消えていく
両手に花求め過ぎたかやつればて
難題は先送りするくせがつき
消費税ダウンする世を作ろうよ

鳥取市 谷 口 回 春 子

先読まず想定外と自己弁護
モナリザもびっくりぼんの孫の笑み
バランスの崩れた顔に飽きは来ず
足音が心の内をしゃべり出す
金と欲バランスとれぬ五十年

鳥取市 永原昌鼓

ずっしりと体重増える冬ごもり

春来ても心に春はまだ遠い

三食を重ね自分史でき上がる

一人居へなかなか慣れぬ寒い夜

銀行へペダルも弾む年金日

鳥取市 中村金祥

妻無言今日は黙って掃除しよ

それぞれが趣味でバランス取っている

手料理に孫が心を寄せてくる

口下手も調子に乗ると恐ろしい

どん底の中で見つけた落し穴

鳥取市 夏目一粋

かたつむり真実一路10センチ

心配があると両手をあわす癖

吠えてますでも逃げ道は知っている

吸って吐くそれさえできぬ時が来る

裏切りの風にたましい攫われる

鳥取市 西川和子

野球史に残すページを黒く塗る

突然を弔う言葉見つからぬ

都合良く歪めて聞いている話

六十年夫婦の色が入れ替り

折々にメールで元気確かめる

鳥取市 春木圭一郎

脳外科へ入院ちよっとおつかない

新年度 次々夢が走り出す

役職を外れすつきりしたような

別嬪の看護士願う虫の良さ

常日頃真剣勝負忘れまい

鳥取市 福西茶子

実母の顔知らぬがきつとこんな顔

子が巣立つまでは死なぬと決めていた

どうせならひ孫の顔を見て死のう

ヨイドン二歳に全力で負けた

死ぬほどの思いしてから酒嫌い

鳥取市 前田楓花

怖いのか怒ったことのない夫

春の猫粋な噂を持ち帰り

ふるさとの私の基地が消えていた

幸せは笑顔の下にあったんだ

目の前の坂を越えたら忘れよう

鳥取市 森山盛桜

余熱ではどうにも滾らない気力

葉桜のままでしぶとく生きている

野良犬を貶めるとは理不尽な

玄関の春を見逃してはならぬ

公園の隅に純情捨てて来た

鳥取市 山下 凱 柳

今か今かやつと抜かれてホツとする

老眼が進み女房美人見え

騒ぐ妻素知らぬ顔でやりすごす

ボケ進むテンポが何か気にかかる

シヨートカット人生斜め生きて古希

鳥取市 吉田 弘 子

三猿に知らざる加え私流

孫離れ出来ぬ老婆の意気地なさ

プチ贅沢月一程度の外食

グリーン車の座席居眠りして居れぬ

今日も又幾つもあつた物忘れ

倉吉市 猪川 由美子

老人ホーム殺されないか心配だ

謝罪の仕方上手で機運アップする

政権党の昔を捨てて生き残る

貧困や下流の嵐暗い世だ

産む産まぬ産めない論議盛んです

倉吉市 山中 康 子

素晴らしい趣味が味方をしてくれる

看護師の笑むまぶしさに支えられ

点滴とリハビリ期待しています

元氣出せ山の緑に救われる

閃かぬ脳こじあげようともがく

米子市 後藤 宏 之

大奥がすべてを握るこのお城

戦争のころの話しはせぬ世代

卒業と云うて離婚を軽く言う

宅急便今度は妻があける番

遠くてもうまいものなら苦にならぬ

米子市 後藤 美恵子

句読点傘寿で打つてまた歩く

麻痺癒えて豆がつまめた時の箸

老害をおこすバワーを押さえ込む

寄り道に憩えるベンチ探してる

予定表鈍い体に発破かけ

米子市 竹村 紀の治

手に届く花の水遣り忘れてる

逃げ道は無いかネットに訊いてみる

私抜けます一億総活躍

バス停に名前を遺し消えた店

咲く花の一つ一つにある歴史

米子市 中原 章 子

元氣でも老人パワー控え目に

新聞を読んで時間を削られる

この世相笑うのにも一苦労

一工夫加え野菜を多く摂る

お膳立てよくて物事円滑だ

米子市 成田 雨奇

花びらを浮かべて飲んだワンカップ

棺に何を入れたのかと聞く女房

捨てきれぬ思いを抱いて春の雷

潮時を見逃がしてつい長居する

体調と予定を聞いてじゃあ飲むか

米子市 吉田 陽子

春の迷路で少し痛んだ花を買う

柏手は神さまよりもへたに打つ

リズム良く減る健康な米袋

麦ごはん逆転劇へ今日も炊く

バジャマ派になったベッド派になった

島根県 伊藤 寿美

軸足を変えれば違う視野が見え

朝市の魚の眼にも名残り雪

幾許の命の重さ知るカルテ

幸せの重さを知った闘病記

重病の視野にも桜咲いて散る

松江市 石橋 芳山

禁漁区ソフトな夜を渡される

雨が降る昨日と同じことをする

国家とか言ってもピンときませんね

天地無用どこまで俺を殺せるか

雨垂れは○か□に見えますが

松江市 小川 注湖

残り火を燃やす意気込み持つ八十路

夢の中千人針を紡ぐ母

戦後生まれ九条捨てる論議する

戦争を知っているから声を出す

凍てついたニュースの中に自衛隊

松江市 藤井 寿代

はんぺんの中途半端が好きだから

マ行のム何をされても不愉快だ

リベンジはおしろい花を摘みながら

すきつ歯を覗く字余り続いている

木漏れ日を浴びて天使になる私

松江市 松本 知恵子

アメリカの進化慰霊碑への献花

ケリー長官原爆ドームへと向かう

花の下むかし昔の人と会う

隣から赤子の声はいいものだ

たこ焼き器孫と焼いてるいい匂い

松江市 松本文子

食べた飲んだ生きた思い残すことはない

疲れました三十三回忌の花よ

火柱が折れそれからの仲間

ひっそりと逝きます騒がしく生きて

懷に優しい風がまだあった

出雲市 伊藤 玲子

耳打ちに私の潮が満ちてくる
祭り終え空気の抜けた父が居る
窮屈な意地を丸めてボンと放る
読み返す心平にする手紙
本心は語らぬままの柳腰

出雲市 岸 桂子

美しい春を横切る霊柩車
お葬式なんと見事な祭りだろう
平凡が好きで沸騰点がない
母逝つて鼻緒の切れたままの下駄
ダイヤルを廻しペンから遠ざかる

出雲市 小白金 房子

新学期靴ひもしかと春を踏む
移住地になれて元氣なランドセル
戦争を知らぬ若さの長い足
窓開けて春の陽氣を聞いている
近よれば牛も近よる牧の朝

出雲市 多久和 敬子

のびのびと暮らし血圧正常値
赤い靴私をおいて行かないで
おもてなし百歳の母仲間入り
昭和の声だんだん遠くなってゆく
平凡な日々もおはよう忘れない

出雲市 竹 治 ちかし

断捨離のラッパを今日も妻が吹く
生かされて生きる長い日短い日
汗かかぬ人が主役のセレモニー
忘れ物時々あつて人間味
色々なところが痛くなつて古稀

雲南市 松本 昌

世界観変える宗教テロ激し
塞翁が馬信じよう小商人
枝別れそれから主流になれぬまま
抱きぐせが付いた初孫もう二十歳
誤字当て字九〇歳の文を読む

岡山县 池田 たか子

ブチの雛飾り傘寿の薄化粧
春なのに横着虫が出ていかぬ
ブランドのメダカ小川で遊べない
いい人が犯人になるから怖い
鯉幟ライバル泳ぐ過疎じゃない

岡山县 田中 恵

菜の花の海に蝶々の仏さま
若葉風テレビの声に返事する
逢う度に同じ犬の名を尋ね
駆け引きは知らぬと顔に書いてある
鳩ポッポの歌が聞こえてくる平和

岡山市 工藤 千代子

死火山になってしまった腕と足
独りで遊んでいる風船と午後
夫の背が犬も小鳥も寄せつけぬ
ゆつくりと紅茶を啜り胃を宥め
雨あがるさてが朝からつきまとう

岡山市 丹下 凱夫

マラソンのダダダダッと草萌える
桜道ときどき野良猫がよぎる
桜雨シヨパンを一人占めにして
ウォーキング桜吹雪に出くわして
葉桜につどう高校一年生

岡山市 永見 心咲

風の彩かわる制服新しく
毛づくろい済ませた狼が位置につく
一筆箋さびを利かせた三行目
ゴルゴダの丘に忘れてきた自責
菜箸の長さ明日を掴むため

岡山市 前田 恵美子

見いつけたこんな近くに花見場所
拗ねて逃げ寄って甘える年増猫
電子音まざり混ざって宇宙人
黒衣なら花道歩く事もない
花道は遠くかすんでまだ見えぬ

笠岡市 藤井 智史

圏外の恋へと届く場所探す
モザイクを解いたら愛が生まれた日
脂身の多い五欲だよく燃える
この世への精算ツケにして生きる
世間すら知らぬジャングルジムの上

広島市 岸本 清

妻は留守昼は三分クッキング
春休み聞こえぬ子らの遊び声
散歩道匂の花見てまわり道
重大な事も決断する便座
政界の一寸先は闇のよう

竹原市 石原 淑子

桜 石南花 牡丹に紫陽花 花暦
少子化がつづく幼児の死がつづく
物産展巡って春の旅気分
誕生日溜息とける露天の湯
命の灯二ヶ月先の予定表

竹原市 岩本 笑子

ある日ポツリ化粧してほしいと夫が
さくらサクラ飲めぬ私も祭酒
遅咲きの桜を愛でている一人
約束は約束妻に付いて行く
退院の車椅子ですおめでと

府中市 藤岡 ヒデコ

松山市 古手川 光

満開の桜と今日を喜ばん

子離れをしている親に子の意見

転んだのは大震災の春でした

五七五生きた証のひとしずく

温暖化の兆し季節がずれて来る

宇部市 平田 実男

客扱いされた実家が遠くなる

一呼吸おいて人生丸く生き

党のため自分のための永田町

同居するまでは満点だった嫁

招待の客を負かして叱られる

防府市 坂本 加代

五年目の区切り目標アップする

引越してスリムになった家の中

お知らせが傲慢になるか気が引ける

反論はたてよこなめその後で

探し物三日探せと言ひ聞かす

東かがわ市 川崎 ひかり

受入れて見れば愛しい二度童子

老眼鏡拭いてやる気をかきたてる

聞き直し三度目聞いたふりをする

ポジティブに舵を切らねば生きられぬ

サイフォンが朝のリズムを奏でて

花花花花が癒してくれる春

はけた呆けた言うてる内は大丈夫

転んだのは御前と階段が嚙う

子は親を選べず辛い虐待児

亦かいな秘書が秘書がは聞き飽きた

松山市 宮尾 みのり

親を亡くした児へも容赦はしない税

温もりの言葉を幼馴染から

矢草素直だったね幼い日

スクラップしたいいい記事をすぐ忘れ

ほどほどで線を引かねば生きられぬ

大洲市 中居 善信

雑魚五匹捨てて帰れと妻が言う

Uターンこれから先も重い道

核のゴミどうするのかと聞いている

美人ではあった短命でもあった

目の先の事しか見えぬ一大事

西予市 黒田 茂代

三寒四温山の眠りが浅くなる

沈丁花の香の薄らいできて春に

鶯の声で目覚めるいい暮らし

さくら散る母の命日悼むように

いい季節心にも花咲かせよう

高知市 小川 てるみ

波高し男の舟が試される

未来図は胸にしつかり描いてある

世が世ならと作り話がうまくなる

女ですまさかの時の勝負服

未来図に迷彩色は似合わない

唐津市 山口 高明

議事堂に穀象虫の高噛い

色丹が日本地図から消えている

チエルノブイリの廃墟をあなた見ましたか

国民の義務は果たしてきた心算

信仰が足りぬと妻に貶される

熊本県 岩 切 康 子

記念写真あと一人待つハイキング

現地には旧跡知らぬ人ばかり

親睦会イタリヤ料理の物語

追伸に転ばぬようにと書いてある

加減した動きじゃ減らぬ体脂肪

熊本市 高 野 宵 草

怠惰心老いと言う名に背負わせて

快晴のドライブ誘う子と桜

呆けまいと記帳した事また忘れ

老ホーム最も若い気で笑い

爽やかな笑顔が並び朝餉出る

沖縄県 森 山 文 切

じいさんのゲンコがわたくしのルーツ

鍵穴へ殺意はありませんでした

デフォルメをされて残酷だけになる

わたくしはうなずくだけの飾り物

子の頬を包めるように手を洗う

札幌市 小 沢 淳

死んだふり知らないふりも技のうち

過労死の予備兵がいる終電車

膝ボンと言ってる内はまだヒヨコ

筋通す話の好きな官仕え

仲裁のいない地球が昏迷に

札幌市 三 浦 強 一

春のシナリオ ト書きには笑顔でと

シナリオにないどっこいしよ言って立ち

想定外も神さまのシナリオさ

温暖化神のシナリオかも知れず

終点が近い片道切符持つ

弘前市 稲 見 則 彦

溜息にわたしの出端くじかれる

背中には妻のコードが伸びている

廃校の子らの声ない桜花

無人駅運転士だけする花見

芽を出せばもう出来秋とほくそ笑む

弘前市 岡 本 花 匠

両手足今朝も動いて畑仕事
生き甲斐の出会いふれあいおかげ様
元気ですね嬉しくのばす丸い背な
生き下手な我れをくすぐる猫やなぎ
スコップで畑造成味なもの

弘前市 今 愁 女

四月馬鹿ほんとに雪が降って荒れ
桜前線番狂わせに泣かされる
野菜不足言われジュースで補充する
春の庭黄の水仙が主なり
若者は今にペンだこ死語にする

弘前市 須 郷 井 蛙

祝の字が付くとお酒も上の味
母という螺旋ねじの蓋に守られて
一日をオール方言妻という
器量より味が勝負の道の駅
人生のナビゲーターに祖父母いる

弘前市 高 橋 洋 子

無心とや花野を駈ける童たち
どなたにも歩幅を合わす苦勞人
憧れのスマホ持ったが四苦八苦
和平協定我が家になつてあるのです
しがらみを抱き続ける喉仏

弘前市 福 士 慕 情

万国旗犬葉の臭いするものも
人間はさまざま顔も生き方も
さまざまな処方で僕が試される
おでんグツグツ彝めき合つて自己主張
酒おんなバクチ昔の話です

青森県 松 山 芳 生

もう二度と戻らぬ過去にある汚点
やんわりと新芽に座る核のゴミ
ロダンのポーズで夕陽を見届ける
存在を確かめている郷の味
まだ風読めません妥協できません

さいたま市 星 野 育 子

春風に体内時計ゆつたりと
墓参して初対面のお隣さん
ハイキング歩き回つて寝転んで
軽く見た権力分立の原理
不祥事で補選費用の無駄使い

東京都 川 本 真理子

お花見をしている人を眺めてる
寒がりです春の言葉信じない
ありふれた言葉を並べ礼を言う
眼の奥にテロリストの目焼きついて
月の砂漠紛争の種こぼれ落ち

横浜市 菊地政勝

幸せは今かも知れぬペアルック

曖昧に笑う私の良い噂

幸せな顔できあがる笑い皺

言い訳はしない男が軽くなる

純なところ見せてやりたい処世術

富山市 島 ひかる

豊漁を夢見山野に木を植える

過ぎし日を語り合つて共白髪

相槌を打って涙腺また緩む

ジंकスを破る御幣を信じ切る

難関を突破ステップ踏んで居る

可見市 板山 まみ子

振り向けばもう忘れてるその名前

まだ欲があるは良いのか悪いのか

チーズより一足す一の笑顔撮る

幸せは娘のそばで暮らすこと

花よりも期待されてるバーベキュー

愛知県 早川 遯行

いつ迄も若い気持で山を見る

ホースから水迸る春の庭

もう会えぬかも知れないがまた会おう

飼付けて小鳥との距離楽しまん

柳川の春まだ朝き吊し雛

犬山市 金子 美千代

花吹雪ふと「西行」が乗り移る

嫌われる勇気を出して義理を欠く

迷つてた財布くすぐるキャンベーン

金庫買う心配いらぬありがたさ

自家製の匂が体に行きわたる

犬山市 関本 かつ子

雑談の中でにつこりする句材

身の丈の暮らしも変わる子の未来

ほつとした気分で古い時代劇

栄転も左遷もあつた花の下

爆買いは日本人もしてた過去

京都市 清水 英旺

碁将棋の腕前上げたコンピュータ

悔恨が修正テープに透けて見え

数力国語で祇園あたりがかしましい

一周忌まで亡犬の家捨てられぬ

金字塔残し康介陸に上がる

京都市 藤井 文代

株価よりゆっくり落ちる砂時計

分別無理花粉に黄砂もて余す

忘れちゃったあちこちで嘘ついたこと

知らないと言えば簡単とはいふが

首と背中歳隠せぬと自覚する

京都市 榎 本 宏 子

目鼻立ち似てぬ姉妹の似てる声
全没に頭リセット初期化する
よろめく四季予報士いじめ春の花
上司の罵詈雑言ボクの為だつて
全部ばらし小細工なしのおつき合い

京都市 三 宅 満 子

二年ぶり待っていたよと笑む桜
愛しい人見つけた気持八重桜
丹田をたまに意識し褒めてやる
願わくば子の足枷にならぬよう
コンビニない母のいびつなにぎり飯

長岡京市 山 田 葉 子

聞いてない言うた些細なすれ違い
いつのまにか財布は小銭でパンパン
二キロ増えただけで坂道こたえてる
足枷がとれて何だか頼りない
遠距離の二人で仰ぐおぼろ月

八幡市 今 井 万 紗 子

独り居の淋しさ埋めるちらし寿司
呆けられへんホームの冊子よく届く
いい人と言われた仮面はずせない
子煩悩な父の足音すぐわかる
花見酒無口な人もよく喋る

大阪府 桑 田 ゆきの

満開の桜へ鴉二羽遊ぶ
人力車花満開の大社
花筏杭一本に右左
木ノ芽和え嫁に教えて今日の無事
花吹雪読経の堂に畏まる

大阪府 野 田 栄 呼

春陽受け久しぶりねと長話
坂道に命を終えた落椿
憧れた花の都より実家
花言葉心豊かな香気持つ
意地張っていても老化が先んじる

大阪府 米 澤 俣 子

心機一転残り時間を練り直す
今の世の風が読めない老眼鏡
棒グラフのように競つてノッポビル
お上手が言えぬ血筋を引いている
影法師今年はどうな夏にする

大阪府 池 上 清 治

函館へ動き始める旅心
新幹線雪祭りより喜ばれ
天神祭り花火はビルで横に見る
新幹線切符の売れも秒速で
時代祭りのんびり進む姫の輿

大阪市 井 丸 昌 紀

とりあえずとりあえず生き還曆に
ダイエットができぬ言い訳用意する
日本男児座って用を足すなかれ
楽やけど辛いもんやな一句出し
初旬集水増ししてるのは内緒

大阪市 内 田 志津子

入学の扉開いてえびす顔
要領よく生きられなくて廻り道
水割りに夢を浮かばせ一気呑み
豊かな海時に試練の母となる
保育園争奪かけてママの乱

大阪市 宇 都 満知子

さよならじゃなく私はまたねが大好き
いつだって心配係母と祖母
川柳に鍛えられてる我が海馬
季節感薄くいつでもある母
転ばない自己防衛にスクワット

大阪市 江島谷 勝 弘

あの人の牙はとつてもチャージミグ
薄くても私もほしい茶封筒
うらやましまだヘソクリがあるらしい
インフルに効かなかったよ玉子酒
眉間に指立てれば昔甦る

大阪市 榎 本 日の出

老いても恋をします五七五
長生きも子に嫌われる前が良い
人間が真ん中にいる過去未来
ライバルに負けて気持が軽くなり
質素でも愛がちょっぴり上機嫌

大阪市 榎 本 舞 夢

老二人虫干し替り雛飾る
孫達の多忙に合わすスケジュール
久しぶり電話に出ると死の知らせ
御彼岸は一家総出の墓参り
老人会サクラまつりも盛り上がり

大阪市 大 川 桃 花

レジェンドがブルに御辞儀深ぶかと
坂道は行きも帰りも辛くなる
目白が庭に何か良い日になる予感
ホームドラマ昭和を醸すこけし棚
忙中閑山田洋次に浸ってる

大阪市 奥 村 五 月

定年に遊びも知らず握る鉄
議員でも地獄へ落とす週刊誌
政治屋に負けぬ嘘つく四月馬鹿
機関銃打つか黙秘の怖い妻
里帰り一度泣きたい母の膝

大阪市 笠嶋 惠美

大阪市 近藤 正

持てなくてスーパ―二回足運ぶ
写経する部屋は音無き太融寺
久し振りの写経自分を取り戻す
おまいりと露店ひやかし天王寺
带状疱疹勲章ごとく右胸に

大阪市 熊代 菜月

大阪市 坂 裕之

家中の手すり亡夫の置き土産
最終の旅の荷物は川柳誌
連休に豆台風の孫が来る
ライバルにまた癒される夢の中
日向ほこ米寿の母の老い上手

大阪市 古今堂 蕉子

大阪市 佐藤 忠昭

言い淀む言葉察してうなずいて
順に生まれ順には死なぬ兄妹
孫二十歳我が初恋を思い出す
時々は当たる私のおもいつき
探してるエスカレーターエレベーター

大阪市 小谷 集一

大阪市 田浦 實

清貧へ夢も財布もコンバクト
春一番と上昇気流連れてくる
忘却という人生にある余白
労りと感謝で守る終の家
焦るまいまだ糊代のある余生

フクシマは置き去り基地におもいやり
T P P 黒づくめです報告書
つつがなく急ぎ立てられて喜寿の坂
日銀の打つ手打つ手が裏目です
一票の格差縮める策が無い
はつきりと聞こえないから穏やかに
イエスノーはつきり言えた頃もある
悔やむより笑ってミスのカバーする
無駄なもの焼き払ってもまた溜まる
負けんよう悔やまんように走り出す
川柳で家庭を詠むと妻怒る
子供から花束プラス清酒樽
先輩はメモと鉛筆五十年
無愛想な先輩居るが暖かい
知らぬ間に作句しながら自己反省

八百万の神も待つてる首脳陣
家事能力ゼロでは越せぬ老いの坂
夫婦喧嘩できる幸せ噛み締める
年波はきつと仏のお使いだ
生駒山の顔色見れば明日は晴れ

大阪市 谷口 義

おばあさんになるとスタコラサッサです
恥も外聞もちよつと横に置いてます
不本意ながら颯爽と立上がれない
まあええかそれもそうやで日が暮れる
山桜一本母のようだった

大阪市 津村 志華子

お散歩はぶらり点滴ぶら下げて
病院で安静と言うひと仕事
退院をしたら春着を買いにゆこ
蒼い空青い風にも逢いたいし
花菖蒲に習うて凜と生さんかな

大阪市 津守 なぎさ

夢でしよういつも走っている私
雑草も開花を競う散歩道
見舞客少し遠慮の旅ばなし
猫屋敷日向ぼこする数が増え
出不精を誘う陽気の美術館

大阪市 寺井 弘子

元氣付ける菜の花づくし春の皿
底抜けに笑いまぶしい車椅子
しとやかに振舞う前に深呼吸
スポットが当たり雲行まで変わる
格差社会それでも明日の米を研ぐ

大阪市 寺本 実

不機嫌な別れの後に聞く赴報
低金利金庫を買えと誘われる
食べたいがお店の前の長い列
好きだよと朝帰りの日に言われても
支払いの時だけ数に入れられる

大阪市 原田 すみ子

あと何枚増えるか花見する写真
孫クルルばあばの思い空回り
じいちゃんのやさしさ時間差で気付く
ママのがんばりに負んぶし過ぎ日本
目視して夫の居ない部屋へ行く

大阪市 板東 倫子

清貧と言うても貧乏と違わない
大阪はエエとこやけどアホも居る
何でやろガス屋が電気売りに来た
老いの坂昇れば今度は崩れ出す
親は職子は託児所の無い不況

大阪市 平嶋 美智子

善悪を排し大地に育てられ
しっかりと大地を踏んで来たつもり
マイナス金利皆騒ぐので金庫買う
どうであれ金庫に入れる財は無い
誰だっけとつさに会釈返したが

大阪市 藤田武人

止まっていた針動き出すスクリーン
均等に配って愛の整理券
おねだりのチャンス陽気なコップ酒
ゆつくりと歩くと決めた定年日
村中が縛られている言い伝え

大阪市 伏見雅明

一合でムードを上げる他愛なさ
天声人語でいのちを洗い直す
掴んだら離すものかと福の神
荒れた手が証人亡父の苦心談
放たれて命をつなぐコウノトリ

大阪市 藤原千恵子

教室を離れ友らの個性みる
日日夫の痛い所がずれてゆく
深夜二時枝雀の落語笑い声
少しずつ震災五年胸開ける
外人が自撮り自撮りの花見宴

大阪市 升成好

夕焼けに祈りを置いて明日を待つ
ほろ酔いにとどめて酒の旨さ知る
真つさらな自分に戻す削除キー
惨事などのぞんでいない非常口
逆転のパネを縮めてチャンス待つ

大阪市 吉内タカ子

満開のさくらに心燃やされる
柳友の厚い心で今日が有る
初咲きのシヤガの花には気が弾む
春一氣に孫三人の幸貰う
錆びた脳かぜに当てましょ歩き抜く

堺市 奥時雄

バス降りて胸いっぱいになる故郷
上高地空気いっぱい吸っておく
新社長花に囲まれ笑み止まず
この春もまた病室で花を見る
不幸せだけは突然やつてくる

堺市 柿花和夫

句ができぬ度に繙く柳多留
うやむやが夫婦の極意とも思う
私もムードに弱い日本人
行き先は行き着くところ万歩計
タクシーに聞けば世の中よくわかる

堺市 加島由一

いい日です足に痛みのない起床
春うらら犬のつついた花筏
幸せになろう健康にもいいよ
震度七アナウンサーのヘルメット
幸せになれと北上する桜

堺市源田 八千代

様変わりした行き先の下見する
三婆観る従姉妹どうしの寡婦同士
寡婦になり余計な出費控えねば
句会にもお一人様が増えて来た
俄雨に傘差し掛けて呉れる人

堺市齋藤 さくら

足腰が動けるうちと無理して
座ってるだけで疲れるミーティング
お隣に住んで欲しいと嬉しいな
来年の約束しない通り抜け
かくれんぼ孫としている今が春

堺市澤井 敏治

復興税届いたろうか被災地に
しみじみと私見つめている鏡
万人が納得「運命」の出だし
サンゴ礁の悲鳴マゲマを呼び起こす
伝統と革新にみる大ギャップ

堺市遠山 唯教

念ずれば通じて霧が晴れる富士
町内の役をほどかれ春がきた
敗戦の夾竹桃を忘れない
ああ孫よいつか離れる日をおもう
春彼岸母さんばくが見えますか

堺市内藤 憲彦

ほろんちよん言ってた娘から感謝状
後期高齢いつもの色で咲く桜
新人が脚光浴びる老人会
万病もビールが治す若いころ
ライバルがちゃんと見ている無礼講

堺市村上 玄也

雨音を聞いて棋譜読む春の午後
蹠いた僕を起こしてくれた風
ピッチャーで四番打ってたガキ大将
寝言でも五七五が口をつく
アベノミクス金のある人だけにグー

堺市山本 半錢

ポケットの鈴も言い度い事を抱く
公園に子供の声があるのどか
冗談の軽さいよいよビールの季
枝振りに庭師は石を思案する
メ切りが追いかけてくる午前二時

池田市栗田 久子

筍の旬です逃がしてはならぬ
花吹雪初夏を迎える事始め
初夏に向け風通しよくする整理
定まらぬ気温新茶の予約する
うなずいて下さい同意待ってます

和泉市 横山捷也

生き方は何があつても変えぬ意地

封じ込め出来ぬ原発汚染水

敬礼の祖父の遺影にある威厳

ペンを持つよりメールを打つ手先

桜満開母が生家を語り出す

茨木市 島田誠一

ロボットに職を追われるのも間近

難題がまた裏口の木戸叩く

友人という日溜まりに寄る笑い

助走距離とつて最後の男坂

淋しくは無い焦がれてるだけの春

茨木市 藤井正雄

もうちょっと待つ氣にさせる花時計

盲導犬ピタリ呼吸の合う絆

カラフルな街で自分を見失う

先の事知らぬもりもり食べる豚

退院日決まるお喋りはしゃぎ過ぎ

大阪狭山市 矢野梓

亡き人を慕うが如く散る桜

汗をかく事を忘れるネット株

国訛混せてまあるくなる会話

カロリーに食の醍醐味奪われる

限界を想う私の予定表

河内長野市 植村喜代

夕陽受け葬儀帰りの辛さかな

平和が一番強いばかりはかしこない

武器作るから戦いをしたくなる

世話もしてやれず逝った娘を思う

お仏壇に歩けないからお茶はここ

河内長野市 大島ともこ

揺りかごから墓までラッシュの団塊

終着駅は無いのか妻の懷疑心

置き去りにしてきた私探す旅

喜怒哀楽全ての君に首ったけ

人生を二つ生きたい迷い道

河内長野市 梶原弘光

手ほどきをしてる将棋で待ったする

ゆるやかに景気回復ピンと来ず

膠着の口火を切ろうにも痺れ

豪勢なデイナーの仕上げお茶づけで

慌てないここまで来たら自然体

河内長野市 木見谷孝代

手描きする桜は淡墨が似合う

ひと奮発ここできくじていられない

気落ちする夫へ奮発する夕餉

強引に似合うと決めて赤を着る

はけとつつこみ噛み合わせぬ日もある夫婦

河内長野市 黒岩 靖博

入学祝大奮発で祖父威厳

手塩かけ育てた息子フリーター

マイナンバーつけられ資産管理され

近代化する程レトロなつかしい

一日を真つ向勝負甲子園

河内長野市 坂上 淳司

相部屋は往復軒で著名人

大本営気取りでしようか総務相

次次に辞退長命のキャスター

戦前へ直線回帰する総理

政治家の話は止そう花の下

河内長野市 谷 久美子

終電に急いで行けぬ千鳥足

深呼吸して靴を脱ぐ午前様

一呼吸置いて拳を和らげる

穏やかな夫の寝息安堵する

無事退社明日は感謝の靴磨く

河内長野市 辻村 ヒロ

年金にウインクひとつエステ行く

雑草と競争してる夏野菜

年毎に歩幅が変わるウォーキング

無理するな老いた体に教えられ

カラオケが和む昭和を集めてる

河内長野市 藤塚 克三

一呼吸おくと決意がまた揺れる

のほほんと暮らしコロリが筋書きだ

今日もまた好日なりと嘘を書く

身の丈に合った贅沢いいもんだ

欲深い気持ちが強くまだ生きる

(嗚呼新幹線) 河内長野市 松岡 篤

着席後先ずはパソコンONにして

ケータイで席に着いたり離れたり

あつしには関わり合いの無い隣

駅弁を広げ一日振り返り

新幹線延びて出張日帰りに

河内長野市 村上 直樹

管2本心臓に埋め超元氣

車座が似合う万朶の花見酒

おじいちゃんお嫁にしてと円らな目

日に一粒梅干しと云う常備薬

慌てない腹を立てない無理しない

河内長野市 山室 光弘

腕自慢釘煮の味が自己主張

無念ですいじめ虐待はびこる世

おいしいね手抜き料理を誉める人

天性に鍛える努力アスリート

スマホ繰る孫の手先は匠です

貝塚市 石田 ひろ子

吹田市 太田 昭

単線の古刹桜のおもてなし

甘酒を掛けられ照れる御釈迦様

寂しさも口惜しさも消す臘月

まだやれる自負をカルテが袖を引く

パンジーの小人が踊る春の窓

岸和田市 岩佐 ダン吉

損得を少し離れて見ませんか

ひと呼吸おいて私を眺めよう

偶然の勝利でないと汗が言う

おふくろの味はふる里だけでよい

試されているんだ容赦ない嵐

岸和田市 雪本 珠子

潮騒のバラード聞いている夕日

寂聴の法話でどころ洗われる

揺るがない心の軸をしかと持つ

褒め言葉ひとつで走る縄電車

雑草のように育って医者いらす

四條畷市 吉岡 修

やるといふ鼻息だけはよくわかる

閃きも気力も奪い去る月日

消去法で残った椅子にいるラッキ―

未熟でしたチャンスに仮面脱げません

マンションのチラシ格差をつきつける

南無阿弥陀仏唱える老妻の背の丸さ

入れ歯はずし久方ぶりに亡父に会う

退屈をただ平凡と片付ける

棺にも格差があつた死に化粧

シャッターを誰も開けなくなった町

吹田市 木下 敏子

それなりの夢抱いてます八十路坂

ほっとする話の好きな友囲む

今日もまた歳を忘れてした背伸び

それぞれの人に合わせて来た歩幅

ゆっくりと老いのリズムで春の坂

吹田市 須磨 活恵

ウグイスの啼き声長閑荒神まつり

呆けまいぞまだまだ燃える好奇心

花宴今日は仮面をはずしましょう

心とは不思議決心がすぐにぶる

八十路です私まだまだ未完です

吹田市 野下 之男

新聞の慶弔欄をまず見てる

新幹線函館の夜思い出し

ノンアルとテレビで済ますお花見だ

走ったなあ駅の階段なつかしい

猫好きと犬好き家族まあ平和

吹田市 山本 希久子

結局は飛べぬアヒルのままでした

八十歳だと背中に書いてある

年金暮らし増税の波高し

ストレス溜まり間食に手が伸びる

私をリセット遠出の春の靴

高石市 浅野 房子

ブーツ2足磨いて冬を送り出す

腹八分以上に食べてむせている

マイナンプー覚えましたよ九十三

デイサービス桜を見せてくれました

金の亡者近くに住んでいて困る

高槻市 井上 照子

咲き出すと鉢植表飾られる

片べりの靴しか履けぬ足が言う

ひ孫入学祝儀袋にありがとう

戦中を思い出す焼きいもの昼

他人さまを褒めることばのむつかしさ

高槻市 片山 かずお

歳とった証拠若いと言われたす

図書館の席に常連さんばかり

戦争は嫌だと鶴を折っている

つつがない暮らしへ欲が顔を出す

眠りなさいと電車が揺れる昼下がりに

高槻市 島田 千鶴子

ひらりひらりミステリアスにさくら散る

笑い声響く参道桜舞う

世は情け意外な人の助け船

若返る手間を女は惜しまない

参観日真面目な顔の子と出合う

高槻市 初代 正彦

カップ麺目から鱗の深い味

老木も八重の桜の華やかさ

こてんぱんに批判されても北の国

桜さくらいいよいよ栄える姫路城

ど忘れにおでこをポンと叩いとく

高槻市 杉本 義昭

青春のビートとび出すジャズ喫茶

隠し芸妻にも見せたことがない

淋しさの指ひたすらに鶴を折る

記号で呼ばれ檣山行きのバスに乗る

人生の余白に残す恋一つ

高槻市 富田 美義

喜寿過ぎりやどんな病も適齢期

喜寿祝い既に二ツの癌を越え

オレの喜寿富士で言ったら何合目

喜寿うたげ次は米寿と力む孫

喜寿迎え今後の花をどう咲かす

高槻市 富田 保子

歌詞カードなしで歌える歌唱力

甲子園流した汗は宝物

ぎりぎりを抜けて言葉が丸くなる

ナース来て笑顔で開ける花の窓

里帰り炊いた御飯に味がある

高槻市 原 洋志

春一番画鋏だらけの掲示板

何にでももたれて生きて軟着陸

筆順を誤記したままで歳をとる

泣き笑いあつという間のエピローグ

転んでも影は苦もなく立ち上がり

高槻市 安田 忠子

うきうきと春のお誘い旅プラン

満開の桜並木と旨い酒

目眩して米寿の人に助けられ

救急車に手厚くされて涙する

何をするのもめんどくさくて今日に幕

豊中市 江見 清

人脈がまた減りましたお葬式

愚痴ひとつ風呂に浮かべて吹きとばす

未知数が真面目に並ぶ入社式

親類縁者皆もういない父母の里

別れ際に聞かされたのが本音かも

豊中市 藤井 則彦

感心だ鉢をちゃんと差し出す子

生かされていると気付かず世間の目

独奏のハーブに滲む片想い

メリハリのバイオリズムに日日頼る

土踏めば分かる地球の温かさ

豊中市 松尾 美智代

身が軽くなればスムーズ家事その他

丸一日かけて頑張る衣更え

着ない服まとめてあるが捨てられず

久し振り孫と花見と昼ご飯

夫の喜寿家族で祝う春の膳

豊中市 松村 里江

ピカピカのスーツ姿に託す夢

厄除けに五百羅漢に会いに行く

年相応予定削除もやむを得ず

張り合ってもアカンと鏡二べもない

まず一献全員無事に宿ゆかた

豊中市 水野 黒兎

四月バカ騙されるのは爺の役

ふる里は貝の化石の出る山地

三日月に突き差しておく今日の鬱

カーテンにねこのあくびの映る春

凹の字の書き順知らぬままに喜寿

富田林市 片岡 智恵子

晩年の手相は良いがあとが無い
ことという時君の目配りありがたい
石橋を叩いて人のあとにつき
見え透いた嘘も今宵は許せそう
ゆずり合う好物を知る夫婦箸

富田林市 関 よしみ

瘡蓋が剥がれ緑の風に乗る
朝掘りの光を放つ筈をむく
天心にゆらぎ垂れてる房の藤
山吹の谷に仏と遊ぶ石
沙羅の花捨て身で落ちる潔さ

富田林市 肥山 一文

問いつめて男の中身見てしまふ
選ぶのは金にきれいな男達
いつからか頭の中がからっぽに
へそくりを隠した所すぐ忘れ
ビデオ見てスマートな頃思い出す

富田林市 山野 寿之

柱の傷子にも孫にも抜かれ古稀
おばちゃんの鮎が取りもつ潤滑油
不器用な僕は昭和のパネ仕掛け
パソコンの奥に隠してあるドラマ
生き生きと妻の元気はおせっかい

寝屋川市 富山 ルイ子

なつかしい友から声を掛けられる
なつかしい古里思ふ花曇り
おだやかな老後独りをうらやんで
古里の友から今も届く品
削っても削っても無理交際費

寝屋川市 平松 かすみ

他人には涙の訳はわかるまい
皆勤が消えると夫に叱咤され
こんな時趣味のおかげで切り換える
淋しい留守電の声消した悔い
達筆の文を読んでまた涙

寝屋川市 森 茜

花吹雪生きてることつてなつかしい
スケールはともかく地道な君がいい
原点に養生訓をおく世過ぎ
まだ余力立ち上ろうと食いしぼる
モノ展にひとりが好きと言う人と

羽曳野市 安芸田 泰子

旅立ちへ朝の茶柱味方する
駄菓子屋が昔話を語り継ぐ
桜前線に取り残されて春炬燵
親の愛家族を包む豆の莢
花片を踊らせている緩い風

羽曳野市 宇都宮 ちづる

長旅の前に八句を捻り出す
ランドセルが歩いているよ重そうに
パンジーとビオラ姉妹のように咲き揃う
豹柄は着ないが飴持つてます
名簿順幹事するなら回らない

羽曳野市 徳山 みつこ

桜の美学か散り際も蝶の舞
歩数計のコースに小さな花屋
隣三軒春の嵐を掃き寄せる
陽を浴びて体幹補修しています
被災者の声は地球の共通語

羽曳野市 永田 章 司

メディアにも抹殺力をもつ驕り
下手な鉄砲数が足らぬか当たらない
希望とは付いているけど肩たたき
いっぱいの人並に酔う通り抜け
アベノミクス賞味期限が切れている

羽曳野市 藤原 大子

菜の花が呼んでくれている途中下車
これでいいと声に出したら落ち着いた
ありがとう言つて言われてはっこりと
一呼吸すればしなくて済んだミス
便り一つ書けずに重い日を過ごす

羽曳野市 吉村 久仁雄

熱くても冷めてもうまい妻の燭
生き方に一人一人が持つ極意
好きだとは言えない人と旅をする
まだ少し寄り道したい場所がある
ちよいワルを知つて生き方深み増す

東大阪市 北村 賢子

七十五の春も桜に会えました
爛漫のさくらと共に来たツバメ
久し振り姉妹でツイン温い宿
晴れやかに口笛を吹くおんな旅
一日の笑顔約束する鏡

東大阪市 佐々木 満 作

バイキング元はとれない術後の身
冬イチゴ愛おしそうに食べる孫
枯葉散る勤め果たして晴れやかに
ポケットの小銭が唄う反戦歌
年金の暮らしを憂う子の未来

枚方市 海老池 洋

咲いて散る出会いと別れあるように
肩の荷を下ろしさばさば風と旅
饒幸の重なり過ぎて気味悪い
不精髭ではない僕の縁起物
風止んでばかんとする風見鶏

仏さま桜満開見えますか

枚方市 小林 わこ

懸命に生きて今年の桜見る

桜湯の一服今日も力湧く

追憶の中の桜は今見頃

今度こそ予感信じて待つサクラ

枚方市 伊達 郁夫

お互いに微罪を残しまだ夫婦

誤解まだ解けぬか爛がぬるすぎる

真つ黒な影だ私はまだ元氣

目立つため目立たないため黒を着る

故郷の川僕の抜け殻浮いている

枚方市 丹後屋 肇

緩和ケア夕陽が頬を染めている

秒読みに誰憚らず名を叫ぶ

箸の先灰に塗れる妻の骨

パートナーこの星空のどのあたり

古里のふたりに戻る蜃気楼

枚方市 寺川 弘一

平均寿命越えて世間が狭くなる

平均寿命伸びて煩惱また増える

煩惱元氣五七五がまだ出来る

百まで生きてレベルクリアと申します

文化生活ゴミの仕分けが増えてくる

手弁当持つて出かける春うらら

枚方市 二宮 山久

満開の桜にたくす老いの夢

こだわりを捨てて老後を楽しまん

桜舞うおニュー靴はくりフレッシユ

残り火を灯し続けて趣味多忙

枚方市 二宮 紫鳳

こだわりをシュレッターしてジャンプする

ごほうびを送る幸せかみしめる

合格へ笑顔が集う春の饅

生き様を桜に重ね六十路坂

愛犬が仲を取り持つ嫁姑

藤井寺市 伊藤 アヤ子

外国の人も交えて桜道

春めいた町行く人も桜色

ピカピカの制服気合入れてゆく

桜なら今が盛りを撮っておく

此の世では私の味方してくれた

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

もう後に引けない自動ドア開く

油断は出来ぬわたしに似てるひとだから

簡単に済ませぬ事が多くなる

揺れていた分だけ遅く来たあなた

レントゲン人指し指は写らない

藤井寺市 高田 美代子

心なし青い風吹く新年度
ほうじ茶が美味しと思う昼の膳
幸せ太りほんとに私そう思う
ボウリングで優勝もした若かった
校長になった甥っ子にもエール

藤井寺市 田付 絹枝

去年よりも重いひとひら肩に舞う
歴史秘め万人和む大桜樹
プライバシー突発事故に戸を立てる
崖に寺日本建築技光る
鈴鳴らし花のトンネル馬車が行く

藤井寺市 津田 シルク

気をもます開花遅れの娘が二人
長生きに怯える話ここかしこ
胃を切除人生ちよつと途中下車
やさしさが奥の手だったあまかった
脳の皺拒否をしだしたハイテクに

藤井寺市 増井 ヨシ枝

無人の家守っています桜咲く
桜より出でて桜の中に座す
愛しくて少し少うし憎い人
こぶし散りもう忘れよう君のこと
春風に恋したらしい風邪をひく

藤井寺市 吉田 喜代子

春風にわくわく歩数増えている
若いねえ御世辞と知るが弾む足
狂い出す隣の国の若旦那
亡き夫に呼ばれた気がし春の闇
エンディングノート作ろう生きるため

藤井寺市 若松 雅枝

出来る子の親も一目置かれてる
面倒な手続き僕はもう無理だ
仕舞湯でゆっくり聞こう好きな歌
株分けで五つも咲いた君子蘭
独り居で毎日チンで済ましてる

箕面市 酒井 紀華

女ひとりりんご一個をもてあます
よく働いたピカピカの汗ひかてる
三食をきっちり作る水の音
写経千枚煩惱さえぬ墨をする
少しずつ許し許され開く窓

箕面市 出口 セツ子

子が巣立ち自由気ままも味気無い
会席も食事制限ある主人
私だけ太り主人はダイエット
働かぬ若者周りで増えてくる
爆買いとネコノミクスに期待する

箕面市 広島 巴子

万華鏡の中にいるよな花吹雪
鉄斎展前期後期と魅了する

新学期リュック背負ってシニア塾

登頂の拍手にさつとVサイン

見事さに友と合唱チューリップ

八尾市 高杉 千歩

英霊の命貰うて卒寿越え

健康で惚けずになんて桜散る

連鎖反応みなしんどの後期高齢

年金が目減り大正の節約も限界

いっそ惚けたらなんて勿体ないことを

八尾市 寺川 はじむ

ひと匙の美味しい策につい溺れ

梅の香へ微風そつと春を告げ

改憲へ緑地の鳩もとほとほと

つい忘れてる傾いてる地球

朗らかに振る舞い過ぎる今朝の妻

八尾市 宮崎 シマ子

とぼけ上手な友から千円戻らない

送られた挑戦状は逃げておく

いろいろあつて親しいけれど他人です

髪でも脳はしっかり守ってる

標準語も故郷のトーンで喋ってる

八尾市 村上 ミツ子

闇カジノにおぼれた代償怖い
後悔先に立たずだという真理

さらさらと流れる親と子のパイプ

娘にもときどきごまをすつておく

うれしいと声が大きくなっている

八尾市 山根 妙子

満開の蔭で頑張る桜守り

花見終え皆無口になる車内

芳潤なフルーツトマトは野菜なの

貧乏性家の^{うち}空氣が身丈です

年重ねやつと手加減解りかけ

兵庫県 福原 悦子

満開の桜を待つてる正念場

褒められたこれから先が怖くなる

医学部だ孫の甘さにリング剥く

赤飯だ自慢話を止めて居る

思い出と遊ぶ時間を止めている

神戸市 井上 じろう

過去も歳も忘れて生きる信天翁

家族の席今も臉の奥にあり

一つだけ誰にも言えぬエピソード

たちねの自由放任感謝する

核家族みんな未婚ですなかじり

神戸市 上田 和宏

昼は春夜は真冬と言う四月
なにか嫌素朴素直でないものは
納税し米もリンゴも産地から
嫌ですが昔のおじんと同意見
価値観の断と捨離から始めよう

神戸市 奥澤 洋次郎

二十年前に寄つてみる喫茶店
六十五になつて自分を歩き出す
報道の画面の歪みひどくなる
そんな事決めて守れと言われても
雨男雨の恵みを受けている

神戸市 白川 淑子

生きたいと憶うキラキラ春の水
春の海電車大きくカーブして
愛情のすきまに母のにぎり飯
ガス燈がけむる昭和の窓あかり
人生の醍醐味階を降りてから

神戸市 富永 恭子

野に咲いていたかつたらうナズナ摘む
老いていく親に夢持てなどと言う
山菜の芽吹きこごと散らし寿司
練習を積んでウグイス声を張る
肩張らずぶらさがること知るいちご

神戸市 能勢 利子

時時は覗いてみたくなるスマホ
そのうちにスマホデビューしようかな
屋敷跡かわいい家が三戸建つ
老母と孫優先順位日日変わる
会社より家族優先する息子

神戸市 松井 文香

憧れて諦めるのも老いの恋
逆境もプラス思考のマイペース
土壇場でやつと気付いて出す本気
度忘れを隠す笑顔も二度三度
親越えた子に従つて楕円形

神戸市 山口 美穂

不自由の中で工夫の自分褒め
背の丸さも亡母そっくりと名を呼ばれ
今日のノルマへもう少しだよ万歩計
団子虫の知恵に勝つ時負けるとき
もうひとりのわたし日暮れて鬱目覚め

神戸市 山崎 武彦

故山へと流れる雲に亡母の影
顔じゃない心なんだと顔洗う
美らの海ジュゴンの泪誰が知る
汚染土の山そのままに再稼働
くたびれた靴が重たい棒グラフ

明石市 梶谷和郎
晴れの日はいろんな色の笑みにあう

歳月の正体鏡みて分かる
どの人も寝るとやさしい顔になる
同じ顔みせたく月は自転する
やっと子ができて川の字楽しまん

芦屋市 黒田能子

体感がかすかな揺れも忘れない
勢いのついた若さが止まらない
これからの私わたしも分からない
甘口の助言ピリツと効いてくる
有頂天天狗の鼻はまだ折れぬ

尼崎市 市坪武臣

着メロが明るく響く通夜の席
たかが番号されど気になるマイナンバー
趣味一途家族の支えありがとう
推敲へ声を出さずに指を折る
投稿へポスト撫でては手を合わせ

尼崎市 加川靖鬼

泣くことも笑うことにも疎くなる
包み込む弥勒菩薩の掌
柊の枯れても刺は緩めない
でこぼこの道を歩いてきた踵
三分粥始めて知った深い味

尼崎市 長浜美籠

メールより手に取る手紙あたたかい
ちちははと向き合う菩提寺のさくら
平凡が何よりですと握手する
初芽したさあどうするか好奇心
油断召さるなばあちゃんは地獄耳

尼崎市 藤井宏造

先がしれてる中国産をムシヤムシヤと
先がしれてるぶれない僕はサユリスト
先がしれてるでも再婚もあるかもネ
先がしれてる遭わないだろう大地震
先がしれてる言ってはおれぬ安保法

尼崎市 藤岡りこ

動かないねずみに猫は飛びつかず
土俵より気になる美人砂かぶり
タフな胃だ期限切れでも妻平気
ちぐはぐな話も平気老夫婦
別別に遊んでいるが仲良い児

尼崎市 山田耕治

夕方の桜お疲れ様でした
先生より大きくなって卒業す
亡き妻の夢ですパピー・ウオーカー
寒がりの墓は日当たりよいところ
母の電話今日はおまえの誕生日

加西市 金川宣子

華が去り老いの翳りが見えはじめ
乗せられた振りして和む四月馬鹿
宝くじ吐息のおまけついでくる
痩せるツボあちこち押すが見つからず
こっそりと自分を笑う物忘れ

川西市 大坪一徳

百均に行けば売るほど買つて来る
皮剥きも出来ぬ夫の先案ず
好き勝手してきた夫も要介護
決めてから彼女を連れて来る息子
母手術離れ離れの子も集う

川西市 山口不動

驚の声見上げてる杖二本
主催者の願いこもった六分咲き
あの桜遠回りする散歩道
高齢化主人も犬もヨタヨタと
妻に聞くデイサービスの泣き笑い

篠山市 北澤稠民

道徳に背いてまでも子を庇う
ギブスとれ私の春はこの日から
ありし日の表札残す友の家
生きている漏れなく老いが付いてくる
遊ぶ田に遊ぶ人来る花ざかり

篠山市 酒井健二

孫来ると前夜に作るカレールー
若い医者ちよつとビントがかみ合わず
この運の九分は平和で有ればこそ
世の中を丸ごと映す喫茶店
私にも有るか思案の熟年期

三田市 足立つな子

突つ張りも厳しさもなく丸なつて
心配な連絡もなし午前様
どきどきも偶にはいいが身に悪い
例年のくぎ煮みやげに墓参り
若かつた赴任地めぐり友と逢う

三田市 石原歳子

窓越しに川柳のねた探してる
曇り空なので急いで弁当だ
低く飛ぶ燕に明日の天気知る
満開のサクラに風が遠慮する
気品あるピンク保っている桜

三田市 上垣キヨミ

探し物ついでに出来た模様替え
片付けて気づく投句の期限切れ
いかなごの香り漂う浜の街
ばあさんも人並みに買う日焼け止め
薫風に流れて届く里便り

三田市 上田 ひとみ

ユートピア消えてしまったみたいです
好きになる権利もあつて生きられる

誕生日母に感謝の花添えて

強引に答を奪う大きな手

判断はあなたに任せ眠ります

三田市 尾崎 一子

春の陽がやさしく包む子の門出

子の部屋に孫が下宿で二人居る

孫が来た一氣に主婦に逆戻り

ばあちゃんも孫の青春見守ろう

にっこりの心に福が舞い降りる

三田市 北野 哲男

母の居る故郷の天気聞く独り

初孫に無敵の妻も使われる

古里の川も表情消えている

婆ちゃんも一人スマホの窓のぞく

朝一は茶柱多い番茶です

三田市 久保田 千代

冬物に未練を残す花の冷え

ステップを踏めば足元春の風

前向きに歩き平凡なのが好き

お守りを沢山持ってまだ不安

末広がらないまま老いてくる

三田市 野口 晶子

夜なべして雛衣縫う母昏々と
起きようか寝てよかなごり雪の朝

スリッパに重いといわれダイエツト

重い心開けば終わる反抗期

追い越してみたら小さな母の影

三田市 福田 好文

読唇術ちよつと覚えて不眠症

心貧しい自分に気付く自己嫌悪

片意地を張って親父と同じ轍

褒められたことはなかなか忘れない

開けっ放し付けっ放しで叱られる

三田市 堀 正和

入学に就職ついに二人きり

いい話らしいが眠くなってきた

今は亡きスターに会える時代劇

緞帳へ社名をのせた三代目

パソコンに今日も一日遊ばれる

宝塚市 田中 章子

いまわたし仏女になってウォーキング

十一面観音しびれをきらすまで

何度でも会いに行きます中宮寺

人間力はすごい仏師の指先に

まっすぐ歩く妻よそ見をする夫

西宮市 秋元 てる

難聴へ春の囁き降りそそぎ
付き添えのママもピカピカ一年生
戦ない七十年を生きて来て
取り敢えず感謝の言葉から始め
落味噌を忘れず亡友が現れる

西宮市 足立 茂

エリートが決めた施策に目立つ穴
外人が何か私に聞く恐怖
遠慮なく食べろと言うてラーメン屋
賞味期限やっぱり母の鼻と舌
みんなの歳足せば五百の大家族

西宮市 梅澤 盛夫

幸せが見えなくなってきた地球
父のこと弔辞で知った仕事ぶり
原発村去って行く人戻る人
弁当の隙間彩るミニトマト
今年こそ狙えそうだよタイガース

西宮市 緒方 美津子

日に三度向き合う人がいてくれる
デコとボコ意外に持ちのいい夫婦
青空に竿に遊ばせてる家族
松園展甘い女は見当たらず
証言台立っても使う二枚舌

西宮市 亀岡 哲子

林檎の花咲くを想いて林檎食む
花巡り疲れた頃がなつかしい
メルヘンの森へ帰って行く長寿
どなたにも言えぬ痛みが胸にある
断捨離の結果思案のホーム入り

西宮市 西口 いわゑ

一期一会すてきな余韻くれたひと
春の雨ひっそり思い深くする
咲いて散る花と幾年出会いしか
ひっそりとバランスをとるカスミ草
花筏いい思い出をありがとう

西宮市 福島 弘子

花の宴雨何のその橋の下
「又来いよ」敗者に眩し甲子園
入学式希望の肩へ花吹雪
失敗も笑い話になる齢に
趣味の会いつの間にやら長老に

西脇市 七反田 順子

前線も分水嶺に散る桜
種蒔いて爺のとりこになった孫
顔みたださ入学祝二度もやり
右脳だけ初期化できたら弾むのに
諭吉さまたった一枚SOS

入院中食事指導か薄味だ

姫路市 古川 奮 水

生水も氷浮かすと味がある

退院日聞いて病院食うまい

フオーマルなよそおい花へ誘い出す

ジャンプ傘パツと開いて空晴れる

奈良県 安 福 和 夫

織田作の詩碑に往時の浪速見る

なみだあり愛と笑いの法善寺

若き日に過ぎした商都再発見

大阪弁喋ってなにわからず恥ず

道頓堀賑わいまるでカーニバル

奈良県 谷 川 憲

鶯の初鳴きを聞く余寒の日

戦禍逃れ海原に出るゴムボート

鈍行に乘ろう日暮れはまだ遠い

路地裏に昔をさがすひとり旅

瀬戸内の橋から偲ぶ渡し舟

奈良県 中 原 比呂志

ゴシックにしても気付かぬ警告書

達筆でなくて勤まる住民課

たこ焼きへ行列句碑が囲まれて

尖った鉛筆で書く申し入れ

片減りの靴で正論吐くつもり

生き生きて終章埋める花吹雪

奈良県 渡 辺 富 子

子に還る母と乗りたや花いかだ

錆びていく詩のうふくらむ花明かり

ニュータウン老いの荒野になり果てる

どの国の人にもおじぎ奈良の鹿

奈良市 阿 部 紀 子

平山画伯神祕の熊野深緑

軻の浦竜馬も見たか常夜燈

郷愁の幕末のまま軻の浦

瀬戸の町いずこの女も穏やかで

鳥人間孫が参加で倍楽し

奈良市 大久保 眞 澄

女は度胸その腰がある限り

潔癖症こちらが病んでしまいそう

号令はこれひとつだけ右向け右

スポーツを汚す元気になるクスリ

空き巣クンうちにタンスはありません

奈良市 加 門 萌 子

旦那さまと未だに言った事が無い

なんとなんと金婚終えて早五年

平凡に生きよ私達のように

義父よりも老けがひどいと息子言う

子ばなれが進む息子の愛が寄る

奈良市 辻内 げんえい

京の老舗さすが本場のおもてなし

シルバーシート遠慮がちでも座る古稀

住む人が高齢となり街変える

礼服の一番を無くす家族葬

高級店ガッツ食べて妻の喝

奈良市 山本 昌代

夕焼けに染まる明日を夢みつつ

涙っぱに溺れています悲しい日

子の前で強がりと言う尾軀骨

陽を浴びてゴトンと回り出すところ

着地まで心置きなくはばたこう

奈良市 米田 恭昌

ライバルの測り知れない肚の奥

自治会長三顧の礼に断れず

親と住む子の魂胆はわかつてる

ハニートラップにはまり胸やけなおらない

思ひ出は「希望します」と亡き陛下

生駒市 飛永 ふりこ

菜の花もすみれもお日様とダンス

朝ぼらけ女磨いて恋もよし

引き摺るとあかん仏もにらんでる

花水木しゃきしゃきの笑み変わらない

トンネルを抜けて視界は花盛り

香芝市 大内 朝子

老い脱いでおめかしすればばつと春

ヘップバーンのファッション真似た春だった

わたくしの履歴は亡母に瓜二つ

迷わずにわたくし色に咲く謳歌

その先は言わぬが花とおぼる月

大和郡山市 坊農 柳弘

身の程を悟る男にあるケジメ

ひと時の戯れに酔う花見酒

愛された記憶の中にある笑顔

人間の脆さを包み込む大地

ともすれば独り善がりのニューフェイス

和歌山市 磯部 義雄

虫眼鏡で探しても無い入選句

聞いてやるその物腰が気にいらぬ

正直に言えず冷戦無言劇

認知症が近づいてきた名が出ない

藪の中バドミントンの羽消える

和歌山市 上田 紀子

バランスの違う翼でまだ翔ぶ気

寝違えたまんまで夢の続き追う

青春切符あの日があつて今がある

華やかな過去を引きずる名女優

ワンランク下げて私の席守る

和歌山市 喜田 准一

異動だと聞けばなつかし宮仕え
さし出した手にも苦勞の皺がある
子の未来よりも不安な明日のめし
八十路まで何して来たか問われても
メロドラマ口説き文句の美しさ

和歌山市 楠見 章子

肝心なことも忘れている気楽
他人とは思えぬラフランスのかたち
白い雲今日は私のパートナー
通行人Aなら私にも出来る
銀髪を女に変える春帽子

和歌山市 坂部 紀久子

息づかい聞こえる古木花吹雪
今年もまた亡夫を偲んで花の下
母の歳越えてわかった母の愚痴
後悔を流す熱めのシャワー浴び
人事だから理想の答え言っておく

和歌山市 武本 碧

見栄捨てて生きればこの世パラダイス
かと言ってやっぱり猿になり切れず
砂時計横になりたい時もある
信じれば神も仏も居てくれる
さわやかに生きたし限りある余生

和歌山市 玉置 当代

眉引いて今日も戦う顔になる
オムライスに機嫌直したランドセル
山菜に今年もこころ浮かれたす
遠い子を思い今宵の豆ごはん
よく動く五体感謝の日々送る

和歌山市 土屋 起世子

ありがとう素直に言える有り難さ
御陰様今年も花見出来ました
嘘のない会話が弾む花筵
笑い褒め家庭円満老いの知恵
暇な時間あつて慌てる締切日

和歌山市 福井 菜摘

ハードルを上げて挑戦する勇氣
風さやか一期一会の楽茶碗
いい風を掴んで帰る回り道
行間の空気が読めて凡夫婦
お互いに耐えてここまで来た阿吽

和歌山市 福本 英子

いさぎよく落ちる椿を羨んで
打診したばかりにのし袋
貴方の写真いつも私を持ち歩く
三十三回忌すぎても胸を出て行かぬ
天国の貴方は返事さえくれず

和歌山市 堀

富美子

海南省 堂上泰女

父譲りかも滑らかにジョーク出る

春の使者子の吉報の茶が旨い

ちよびりの仮面を付けて人となる

様ざまな病氣見まわす身のゆとり

老木の桜に勇氣湧いて来る

和歌山市 松尾和香

雪残る高野詣でに孫と行く

奥の院へ善男善女列続く

山の風寒く感じるお中日

早起きの気合いやる氣が湧きでてる

受験の子待っていましたさくら咲く

岩出市 藤原ほか

あの時の出会いがあつて今がある

ポケットに握り拳を仕舞い込む

たまご抱きかけがえのない愛注いでる

売り言葉買つて自分を立て直す

動き止め道筋確と見極める

海南省 小谷小雪

リラックスできているね大あくび

大切にしまつておこう母の杖

平凡な胸にもリボン付けておく

私にも自販機ちゃんと出すおつり

鰯煮る時のあなたは得意顔

流れ雲君の自由が羨まし

子を育て母の苦勞も理解され

良運を呼ぶポジティブな男の子

画集観てピカソの偉大さが分かる

陽光を浴び燥いでるトラクター

紀の川市 宇野幹子

機が熟すやつと冬眠から抜ける

差し引きは何一つ無し塩むすび

原点に今軸足をおきかえる

一夜干し焼けば聞こえる波の音

寂しさを肴に徳利かたむける

紀の川市 北山絹子

筍が旬を知らせてくれている

頂点を狙う男が病んでいる

急がねば時代の風が通り抜け

烙印を押されたような顔に会う

空の色見上げて今日の計を立て

紀の川市 楠原富香

階段を登る大人になる為に

ハンドルを持つと危険な勇み足

巣立つ子に愛のパンチが乱れ飛ぶ

生きる為たくわえている知恵袋

混迷の地球に足跡を残す

紀の川市 辻内次根

私を急かす桜が咲いている
軽石で踵を削り低くなる

雨の日は雨に打たれる雨の道
辛さには出ない涙のでる言葉
焼酎によく合う鯛の兜焼き

田辺市 岡本昇

ボス猿に三猿極意習うてます
じれったい足踏みしてる春の音
天窓の明かり苦学のみかん箱
宝くじ抱いてお百度神頼み
自転車で桜前線追いかける

橋本市 石田隆彦

ささやかに記念日祝う古い二人
円周を信念曲げず生きてきた
野暮用を増やす自縄自縛の舌
人間を理へと導く大自然
砂被りで一度は見たい大相撲

(前月分) 篠山市 北澤稠民

春風に心の窓も開けはなす
生きるにも死ぬにも人の世話になる
この人も酒の匂ばかり詠んでいる
春そこに田んぼの臭い一番や
七十年端役ばかりで生きてきた

第47回 奈良新聞川柳大会

日時 7月24日(日) 10時開場(受付開始)
会場 奈良県文化会館 小ホール(奈良市登大路町) TEL 0742-23-8921
バス(市内循環・ほか)「県庁前」下車北へ3分
講演 「文芸にも詠まれた蟹の面白いおはなし」
国立大学法人 奈良女子大学 名誉教授 和田恵次氏
宿題 「ニュース川柳」
「光る」 大西将文氏
「いそいそ」 居谷真紀子氏
「耳」 大松本紀子氏
「詭弁」 藤原志士氏
「幸せ」 阪本高順氏
「油断」 山田新啓氏
「助ける」 田中啓一氏
各題二句(席題なし) 出句締切 11時30分
会費 3000円(昼食・発表誌含む) 出席申し込み 7月10日まで左記へ
〒630-8686 奈良市法華寺町2番地4
奈良新聞社文化事業部「川柳大会事務局」係
TEL 0742-32-2115 FAX 0742-32-2774
欠席投句 1000円(小為替(無記名)等)同封下記へ(発表誌呈)(切手拝辞)
〒639-1101 奈良県大和郡山市下三橋町323-61 阪口 幸一 宛
締切 7月10日(当日消印有効)
主催 奈良新聞社
後援 奈良県教育委員会・奈良市教育委員会・奈良県川柳連盟

消費税の漲る怒り鎮めてよ
茶柱は立たぬが入試合格だ
溺愛で育て反抗期が恐い
線香の香罪一つを許そうか
造詣深いはずがニセ物つかまされ

(前月分) 鳥取市 坂本とも湖

川柳塔の

川柳讃歌

(138)

木津川 計

「老衰」は理想だが名が無粋

秋 元 てる

病気の呼び方が妥当な表現に変わっていく。言語障害は言語症、病気ではないが性同一性障害は性別違和。「自殺」は遺族や周りをも複雑な気持ちにさせるから「自死」に。「孤独死」「無縁死」も「ひとり死」になってよかった。人権はどこまでも守っていききたい。

てるさんの異議申し立てにも頷く。川上哲治は93歳、加藤治子氏は92歳、陳舜臣は90歳でいずれも老衰と伝えられた。そこで提案。老衰に代え、「充分死」だったらどうだろう。

老夫婦小さな嘘を許し合う

横 山 捷 也

若い頃、僕は漫才作家の秋田実先生から「人の為になる嘘はついてもええと祖母から言われた」と聞いた。のちに、口にして虚ろの「嘘」があり、人の為になる「偽り」との区別に気が付いた。捷也さん夫婦も小さな嘘を生活の彩

りと許容して凭れ合っている。次に挙げる今号のお二人も互いに気遣っている。深夜ふと妻の寝息に安堵する（遠山唯敦）。父ちゃんの軒聞いたらホッとする（齋藤さくら）。寝息と軒に安心する老夫婦の老後に安心する。

空がいい行方不明になるのなら

居 谷 真理子

「海ゆかば水漬く屍山行かば草むす屍」との大作家は「空ゆかば」とは詠わなかったというより詠えなかった。屍は宙に漂えながら。死して消え去るに、かつて足摺岬が有名で自殺の名所になった。身を投げれば大海原は一切を呑み込むと言いつた。

行方不明になるなら空がいい真理子さんだ。が、さて、どうやって行くのか、はたまた、落ちてきはせぬかと思うのは非文学的鑑賞か。

物欲もすべて無くさず生きている

栗 田 久 子

永井荷風は金銭に執着して吝嗇だった。血のつながった家族をすべて義絶して父の遺産を独占した。陋屋にただ独り住み、ストリップ劇場の楽屋へ歩ける間は通った。「ふらんす物語」「あめりか物語」でかつて文壇で光り輝いた文化勲章受章者は今の金額で五億円の金を残して火鉢に吐血、79歳で死んだ。

久子さんではなからうが、物欲を「すべて無くさず生きている」ひともおれば何も無い暮らしを求めた宮澤賢治のような人もいる。

休日には若者に街譲ります

藤 岡 り こ

戎橋のほとりに松竹座が出来たのは大正の中頃だった。白い外観は「大阪の若いインテリ層にひどく新鮮で私は文学仲間とともにほとんど毎週、松竹座へ通った」と大阪文学を司馬遼太郎以前に牽引した作家・藤沢桓夫は大阪のいわば「カルチュエ・ラタン」だったミナミを自叙伝で書いている。いつの時代も盛り場は年中若者のために在った。りこさんはそんな街へ平日に出る。だから若い、筈だ。

これからは自分のためと世のためと

板 山 まみ子

この6月26日（日）道後温泉で開かれる「全日本川柳16年愛媛大会」で不肖私が記念講演「道楽の真の価値」を務めさせていただく。そこで語るに格好の句をいただいたのである。とかく自分のためになりがちな人の世にあつて、まみ子さんは世のためにも尽くしたいと願われる。多くの人がこのひとに做つたら、世の中は過ごしやすくなっていくのだ

（「土方芸能」発行人）

新川柳鑑賞 (52)

麻生 路郎

忘れてはいないが借りたまま五年

(十九平)

すぐにも返すように云つて借りるのが金である。その時はたしかに、そう思つて借りたのであるが、そうすぐに返済出来ないのも金である。月日はグングン流れるが、金の方は返えせそうにもない。別に返えすのを忘れてゐるわけではないが、借りたまま、もう五年になる。金なんか借りるものではないと今頃になつて気がついて、もう遅い。返えすものを返さねば、何んともなくユウウツである。斯うした心境をとらえたのがこの句である。

あきまへんやろかと借金気が弱し

(淡 舟)

この句の借金が、大金でないことは云うまでもなからう。相手方はソレと察して、ポツポツ予防線を張つてゐることも想像に難くない。漸くにして切り出したところ、「こつちが借りたい位だ」

と二倍もなくことわられた。

「あきまへんやろか」

と、上眼ずかいですがりつく。「お気の毒だが……」と云つたきりである。

善人であつた証拠の借りが出る

(牛 耕)

頼まれたら、イヤと云えない性格だったのか、借りてまで貸してやると云う人の好さがあつたのである。さて一生の幕を閉じた時には人のために借りた借金がその人の好さを証拠立てたと云うのである。こんな人間が、うっかりすると、選挙の世話をして選挙違反にかかるのである。人間ははじめから悪人ではない。

家出して来た妹へ借りが出来

(虹 要)

早くから都会へ出てゐる兄夫婦を頼つて、妹が家出して来た。しかし、頼られてゐる兄の都会での生活は決してラクではない。僅かばかりの妹の小遣をちよいちよい立替えさせることを詠んだもの、曾ては兄も都会にあこがれて家出して来たことが想像されるが、都会生活と云うものがそう甘いものではないことをうなずかせられる句である。

光陰遅々として月賦はまだすまず

(多久志)

「光陰遅々として」と大げさな云い方をしているが、それが月賦に対して云つてゐるところにユーモラスを感じる。

光陰矢の如しと云う成句があるが、それは速いのと、行つたら戻らぬのを云つたものであるが、月賦の場合にはいつまでもいづつまでも月賦を取立てに来るようで、なかなか月日が経たない。そこで光陰遅々としてと詠んだのである。

くじ一枚で投資したよな気にもなり

(月 都)

いつかは当るかもしれない——と云う、はかないのぞみをいだいて、毎月毎月一枚ずつ、くじを買つてゐると、投資してゐるような気がして来たと言ふのである。なるほど、そんな気がするであらうとうなずけるとところに、この句の面白さがある。

鼻糞の株で見ている相場欄

(草 右)

僅かばかりの株をもつていても、夕刊を眺めて上つたの下つたのと云つて人種はかなり居るものである。

上つたからと云つて売ろうともしない。売つたところで家が建つ訳でもない端した金。儲かった、損をしたと云うスリルだけはそれでも味わつてゐるのである。この句「鼻糞の」の措字がよく利いてゐる。

自選集

小島蘭幸

溜まつてるものを水平線に吐く
隙だらけでしたやさしい父でした
朝寝坊を喜ぶ歳になりました
お迎えに行ったら泣くのです一歳
ソーダ水本屋大賞二回読む

土橋螢

おふくろの味が元氣を出せという
数の子を食べたらひとつ若くなり
惜しまれて死ぬ武士道を知っている
昭和史を伝承させる寺の鐘
窒素燐酸加里というエネルギー

西出楓楽

五欲まだ元氣な今を袋とじ
口軽い代わりに腰の重い人
引き際の美学を思う昨日今日
てにをはにこだわり畏縮してしまふ
パソコンに拘ねられ無為の小半日

仁部四郎

六月や暦も少し疲れだす
祝日のない水無月に雨が来る
六月の旅に近くの最上川
父の日はあります六月某日に
沖縄へ二十三日の手を合わす

前 たもつ

七回り生きて揃って通り抜け
七分咲き凜と迎える八重桜
人々 僕の短冊かくれんぼ
花の下みんない顔地球人
大川に映える花愛で食事会

政岡 日枝子

風鈴が富山の音で鳴りだした
川柳と妹が待つ道後へと
遅れとるまい宿だけは確保した
一泊へお供が二人ついて来る
五七五は頭の中で準備中

三宅保州

どんな雨だろうとやまぬ雨はない
予報士のファッションばかり気をとられ

飲んでいるはずが忘れている薬

日曜のテンポのままに月曜日

一步踏み出せば続けて歩けます

宮西弥生

青春は走れ走れだけでよい

勿体ない心が闇にして弾まない

美しい涙に脆い魔の時刻

ころころと予定の変わるエアポート

少年のパワー炎になる公園

川柳系

八木千代

隣家にも秘してうさを飼っている

ビクビクする耳は償い持つ家系

遺伝子は月の泪を知っている

好奇心旺盛たぶん川柳系

哲学めいた雲にも興味ある様子

両川洋々

先導の蟻にカーナビ持たせとく

東電の性善説が信じれぬ

ドナーなら無理だお酒の気が抜けぬ

秘密みな吐けとマイナンバー届く

求婚もスマホ別れるのもスマホ

板尾岳人

長生きがしたくて草鞋編んでいる
白寿まで蒔蘿草を植えてみる

長生きの秘訣メダカを飼っている

軍艦に竹槍積んで平和論

三叉路で逢ったのは宿敵だった

奥田みつ子

夕日まぶし可愛メルヘン生まれそう

いちご大福日の丸からの連想か

仏壇の文旦ころび一さわぎ

さびしい日いちごを買って景気づけ

花吹雪桜元気に散りました

川上大輪

迷うのは迷路を抜けてからですよ

絶対にゴミにならないのがお金

三十分以内に買えというテレビ

叩いたら映る昭和は凄かった

運命線のだ真ん中にある正誤表

小西雄々

星の降る音へ油断をするでない

すれちがうわが子きずかず老い進む

車椅子足は駄目でもよく喋る

喧噪の昔話へ年をとり

押し入れの奥の軍服忘れられ

齊藤 姦

天と地に祈り続けて来た道だ
葉桜の頃だったなあ三周忌
追想の森で小鳥が唄い出す
片栗の花に出逢えた日の至福
子の個性すすくく伸びる春の画布

新家 完司

小雀が師匠飛ぶのも歌うのも
脳天に刺さるおまわりさんの笛
踏まれたら忘れぬうちに踏み返す
来年も桜の下で飲みたいね
ボタンキユー爆睡をして再起動

津守 柳伸

桜便り昭和一行同窓会
サクラ桜加茂川堤寂として
カップルで顔見せに来るウサギ小屋
颯爽と出掛けた春着戻り寒
ゆき届く警備嬉しい通り抜け

遠山 可住

御近所へあげる西瓜の苗も植え
新聞のおくやみ頁念入りに
健康を支えてくれた冷蔵庫
みんないい奴で金持ちにもならず
日本に富士山があり天高し

都倉 求芽

手のひらとお喋りしてる仕舞風呂
お互いの意地損なわぬ三つ巴
ざっくりと青首大根太い白
冷蔵庫のドアで座禅する卵
春風がピンポン神戸からくぎ煮

第67回 玉野市民川柳大会ご案内

とき 平成28年7月3日(日) 午前10時開場
ところ サンライフ玉野(玉野市総合文化センター前)

玉野市宇野2-2-20 ☎0863-221-5111

JR宇野駅より徒歩10分

JR岡山駅より渋川行き特急バス約1時間

玉野市役所前下車徒歩3分

バス宇野・渋川・児島(NTT玉野下車徒歩2分)

兼題と選者(男女選者による二人選) 各題2句

【姿 勢】 新家 完司(鳥取) 酒井かがり(大阪)

【化 石】 石田 柊馬(京都) 草地 豊子(津山)

【太 陽】 きゆういち(茨木) 長谷川博子(松江)

【潜 む】 古谷 恭一(高知) 榊 陽子(川西)

席 題 当日発表 前田 一石(玉野)

読み込み可 欠席投句拝辞

投句締切 11時30分

賞 費 県知事賞・玉野市長賞・他

会 費 2000円(軽食・発表誌)

お問い合わせ・連絡先

〒706-0132 玉野市用吉651

前田 一石 ☎0863-71-1781

主催 川柳玉野社

2016年 第9回 松江市川柳大会

日 時 7月18日 (月曜日・祝日)

10時30分開場

会 場 島根県民会館 3階 大会議室
(TEL 0852-22-5506)

事前投句 (締切 6月30日・当日消印有効)
当日参加者のみ投句)

宿 題 「裸」 藤井 寿代 選
各2句詠 (出句締切 13時)
「狂 う」 平井美智子 選
「祭 り」 野島 全 選
「うさぎ」 福西 茶子 選
「鬼 」 石橋 芳山 選
共 選 「岸 」 内田 久枝 選
田中 堂太 選

欠席投句 1000円 (切手不可)

締 切 7月5日 (当日消印有効) 厳守

投句先 〒690-0866 松江市下佐陀町336-1
松尾芳恵 宛 (事前投句・欠席投句とも)

投句方法 便箋大の紙に各題2句・郵便番号
住所・氏名(ふりがな)記入。共選は無記名
清記のため2句で結構です

主 催 松江川柳会

'16 尼崎川柳大会

と き 平成28年8月27日 (土曜日)

場 所 兵庫県立・ピッコロシアター
尼崎市南塚口町3丁目17-18

開 場 12時 出句締切 13時

会 費 2000円 (大会誌・粗品呈)

兼 題 *各題2句・席題なし・欠席投句拝辞

「突 く」 竹村 穂夫 選
「水 」 宮本 喜明 選
「ふわり」 赤松ますみ 選
「一 人」 三宅 保州 選
「酔 う」 井上 一筒 選
「苦 い」 長浜 美龍 選

懇親宴 4000円

連絡先 尼崎川柳大会実行委員

藤井 宏造 TEL 06-6494-5187

◇交通機関の連休以外は開催いたします

主 催 尼崎川柳協会

後 援 尼崎市・兵庫県川柳協会

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

百点の妻に疲れるキリギリス
質屋から市場へ寄つて来る詩人
父の留守まず長男が風呂に入り
妻でないおんなと食べるふぐ料理
天下盗る夢を見ているふところ手
宴会で莫迦にならないのがひとり
警察の前で走らぬ方がよい
子供には継がしたくない漫才師
大根の値打ちを知っているさんま
屑籠に未完の直木賞ばかり
追うことも追われることもない夫婦
革命に遠く漫画とヘッドホン
味方まで騙す見事な落し穴
会社ではユダと仲良くしておこう
戦争を知らぬひよこが酒を飲み
キタよりもミナミが好きな河内弁
ひれ酒の別れがづらいぼたん雪



川上大輪選

西予市 西田 美恵子

君の花を咲かす優しい土になる

十二桁これが私と言う証

あの人が言うた言わんとややこしい

程々の幸せお茶は沸いてます

折れてばかり母は増々小さくなり

本物も偽物もある遺産分け

府中市 岸田 武

今日の僕ジョーク一つが流せない

真相はうやむや黒いものうごく

顔ぶれも話も同じ同期会

聞きとれぬままに相槌して笑う

やはり大物スケールの違う嘘

ウォーキング同級生の墓の前

瀬戸内市 東 楨 ますみ

欠けた月しっかり胸に抱いてやる

挑戦はしないがあきらめもしない

春風の誘いに乗ったスニーカー

路地裏にボツン昭和の影法師

点打って今日のわたしを咀嚼する

ふっ切れたようだ背中が笑ってる

岡山市 藤成 操 江

振り向けば十年前がすぐそこに

手応えがなくて鉛筆休ませる

あきらめた時から加速する亀裂

辛抱の幅がだんだん狭くなる

ストレスが嫌で安易に妥協する

連れ添った人が横切る夜の枕

紀の川市 山東 日出男

絵の中に迷ったような並木道

バーチャルの世界で軽くなる命

文明の狭間で森も泣いている

水槽の鯨ソワソワし始める

スプリンター夢に向かって風になる

命まで預けたくない医者もいる

弘前市 吉川 ひとし

トンネルを抜けたら消えた加齢臭
無報酬なのに張り切るエキストラ
御自由にどうぞと粗大ゴミ置かれ
ずり落ちたメガネで暗いニュース見る
心臓音しつかり保存するカルテ
一歩二歩なら歩きますナマケモノ

大阪府 小栢 こずえ

定位置で家族の話聞いている
何気ない顔して見てる胸のうち
言いなりに良い子してます八十路坂
何もする事がなかった日の不眠
去年見た花を今年も見れた幸
種袋振れば春恋う音がする

松山市 柳田 かおる

菜の花の黄色へチョウが溶けていく
踏まれるとなお雑草はへばりつく
わたしだとわかる程度にメッキする
ストローの中をふたりがかけ上がる
日記帳へ話して今日を整える
いちにちのドラマが重い終電車

堺市 羽田野 洋介

若かった一直線を我武者羅に
百均のラベルはすぐに取り外す
いのちがけなんて言うなよ大げさな

うなずきが納得だとは限らない
迷信だと分っているが運試し
新しい風を掴んで前を向く

大阪府 神野 千恵子

宝くじ夢の続きを見たいだけ
好き嫌いあつて楽しい目鼻口
人好き好きクサヤを食べる人もいる
心臓に一番わるい菌科の椅子
いつからかペタペタペタと歩いてる
委員会鳴物入りの無駄使い

松山市 神野 きつこ

桜さくら新入生の白い靴
一夜明け水路を覆う花筏
平成の年貢収める蟻の列
春眠がコーヒーたてる音で覚め
不安など吹き飛ばします子の笑顔
わたくしの背骨支えるのは昭和

香芝市 山下 純子

誘われた旅で世話役なぜわたし
暇つぶし見てはならないテレシヨップ
作物の獣害嘆く電話口

気に入らぬ内容だから生返事
化けの皮古くなりすぎはがれない
他人事だからいい知恵湧いてくる

鳥取県 橋谷 静江

一日を明るく暮す知恵探す
度忘れが私一日暗くする
早合点思い込みへと進みだす
誉められて料理の腕もあがりだす
予定外時間かかった立話

鳥取市 近藤 秋星

新天地未知の世界が待っている
お花見は今年限りで見納め
姉妹よ許せ罪亡ぼしの癌
死ぬまでには非われの句を整理して
余命半年せねばならない事多く

倉吉市 堀 かずこ

星あかり心の闇を照らしてよ
私にも妄想だけど彼はいる
強がりも弱虫には勝てません
誠実で気は小さいがウソつかぬ
悩んでる優しい笑顔救われる

米子市 生田 和之

ダメ虎の超変革が春を呼ぶ
強豪も雑魚も一勝まず目指す
大山の余徳水道水が美味
燈明を灯すホルモン屋のマツチ
毛繕いできぬヒト科のおべんちゃら

米子市 永井 三津子

言い訳が孤独の鎧厚くする
百円のゲームに札も食べられる
菜の花の揺れて愛犬隠れんぼ
澄んだ目に首横へなど振られない
眠くなると母恋しがる孫あやす

米子市 野川 宣子

お祝いに激励も入れ熨斗袋
お陽様が動きなさいと肩たたく
弱い所見せて仲間にしてもらう
船賃の六文銭を亡母の手に
どろ船に乗るのはたぬきお年寄り

岡山市 伊藤 寿子

趣味ひとつ生きる力になっている
頼られていると思えば出る勇氣
ほがらかに生きよと額の亡夫が言う
花の雨さびしさ募るひとりの灯
本心を少し控えて同居の和

岡山県 高岡 茂子

ライバルより先に呆けたくないスズメ
失敗もお互いさまと気が軽い
この友がいて彩りふえた人生図
円満のかくし味にも嘘をまぜ
まだ夢を抱えたままできた傘寿

岡山県 山 縣 のぶ子

菜の花のそつばを向きたがる花瓶
ばあさんの話はいつもエンドレス
百点へ鼻高だかのランドセル
高熱の夢は仏とかけめぐる
怒られて平氣装う腹の虫

瀬戸内市 宮 宅 比佐恵

美術展どうも掴めぬ美の世界
図太さも覚え流れに添ってゆく
口も手も出さず私はカスミ草
裏口を走れば白い眼が並ぶ
きれいごと並べて裏のふくみ針

三次市 伊 藤 寿 子

鏡みる回数減ったしわの数
若返る為と誘いの風に乗る
つき合いへこんな増えた保険金
すねかじる昔は子供いまは孫
最高の笑顔宗教売りにくる

三原市 鴨 田 昭 紀

豊かさの中で育った非常識
朝市に飛び交う普段着の言葉
にんげんが並ぶと出来てくる段差
乱暴な言葉に秘めている温み
遠近をつけ人柄を見極める

府中市 田 辺 和 子

とがめなく今存分の朝寝坊
偶然が偶然を呼ぶ蜘蛛の網
身勝手に誌上の友を決めている
老の語に親しむ覚悟出来ました
明日の計なくて深夜に本開く

山口市 中 前 幸 子

時刻表からはみ出している夢列車
夢工房少しファジーな虹を描く
つむじ風こころの隙を突いてくる
濁流にひろう一欠片の愛よ
火の海を漂う偽善者の仮面

今治市 渡 邊 伊 津 志

九十と言えば電話がすぐ切れる
九十歳無欲の振りをして見せる
聴き流す事を勇氣と卒寿耳
プライドを捨てた卒寿の軽い足
苦の坂を幾つと越えた卒寿坂

大洲市 花 岡 順 子

これからも一緒に生きる介護4
ゆらゆらは僕の持ち味ヤジロベエ
蝶はもう自分を虫と思わない
挫折した身内に少し距離を置く
病院を自宅介護と追い出され

松山市 栗田忠士

山鹿市 中山好打

捨て惜しみして人生を狭く住む

一両電車迎える花の無人駅

植えすぎた杉の花粉が謀反する

型破りと言われ大物とも言われ

簡単な漢字浮かばぬことがある

松山市 郷田みや

想い出を掻き集めてるバラ一輪

春色のやさしさに甘えてしまう

泣いた後声をかけたくなるスミレ

ぎりぎりを楽しんでる二十四時

仕上がりは何とかなると粒コシヨー

松江市 山根邦代

独り言自分に聞かす事もある

挨拶に歩きスマホで気づかれず

野草摘みいい運動と欲を出し

陽光に誘われ庭の花という

料理にはみんな笑顔にする魔法

佐賀県 門井孝

病です頭廻らず句も出来ず

孫連れて桜吹雪のウォーキング

わらび生え想い出す兄一周忌

ツバメ来る衣替えする古い二人

プロ野球昼寝終えてもまだ続く

甲子園トコトン見せる球児たち

ノンステップ打法で魅せる心意気

キャプテンのデッドボールも男意気

アルプスに響きわたる声の波

薬箱横に鎮座の氷あめ

シドニー 坂上のり子

さあコーヒー飲んで一句に取り掛かる

何時か要る杖だ好きな絵描いておこ

満開の桜に逢って触りたい

いちご大福決め手は白い練りあんこ

ジェイムスジョイス読んで磨いている英語

札幌市 富永恵子

もれてくる輪唱風とたわむれる

五欲みな全開にして旅に出る

みてみてとステンドグラスお出迎え

アマナ咲く耐えた寒さを褒めてやる

早春賦今日の寒波にうらざられ

登別市 小林碧水

金持ちへ私の金も移動中

歳一つ積んでも春が嬉しくて

春満開旅のプランのせめぎあい

監視カメラここだけはまだ冬ですか

兵隊の一行よりも水仙の

塩竈市 木田 比呂朗

横浜市 川島 良子

終活のスタート断捨離は牛歩
出来ぬこと断り切れず眠れない
はじめから泣き上戸とは言わぬ酒
銀行で外すマスクとサングラス
保険証生きてる価値を問うてくる

男鹿市 伊藤 のぶよし

野仏の笑顔にひらり舞う桜
反骨を纏い我慢はしない質
元氣だな青い主張を繰り返す
ぜいたくだろうか甘い思い出だけ食べて
恙なし何はともあれ回る独楽

東京都 高岡 弥生

受験生やる気スイッチ探してる
痩せたいとお菓子を断って頑張る子
ママの顔じつと見ている新生児
社会人頑張りますと子のメール
アンテナを張れば何かが引つかかる

八王子市 川名 洋子

異議なし異議なしに消える蟻の声
孤食に飽きてパートナー欲しくなる
巻き爪に祖父が住んでる父もいる
私んちママは男でパパおんな
ドア一つ遠い都会の隅に住む

逢うまでのワクワク感がたまらない
幸せごっこ想い出詰める旅カバン
食欲にならねば腕は上がるまい
ジェネリック躊躇するのはなぜだろう
ガラケーで充分事は足りている

横浜市 巖田 かず枝

限定と言われ手が出て足が出る
絵心はないけど好きな美術館
不自由な手でも動くよありがとう
狭い庭紅白の桃笑ってる
公園を嬉しがらせる子等の声

横浜市 長島 亜希子

シルバー割引歳をとるのも悪くない
表と裏あつて政治家向きな方
一億総活躍わたしも期待されている
マンモグラフィ言われなくてもSサイズ
忘れもの気づいてるからまアいいか

佐渡市 高野 不二

小銭入れだけで出掛ける宮参り
有難い家の前でも止まるバス
部屋毎にあつて頼りにせぬ時計
ネクタイは黒しか出掛ける用がない
着ない服ばかり着て出る服がない

豊橋市 藤田千休

潤滑油減つて五体も軋む春

包装が中身にまさる土産物

二の腕の白さが夏に恥ずかしげ

質問へカメラ目線の議員たち

両の手にタネも仕掛けもある政治

大阪府 高木道子

有るがままの服でお誘いバスイー

新校舎に金次郎さんが雲隠れ

一寸来て鳴くうぐいすの舌足らず

同い歳のび寄る老い確かめる

超変革を誓い退院したそうなる

大阪市 柴本ばつは

母百歳大黒柱演じきる

その母はいつも静かに奥座敷

母の一言葉のように効きました

気心が通じあつてた生さぬ仲

ここだけの話もやがて風にのる

大阪市 高杉力

居酒屋のバイトで決めた進む路

標準語混じりで娘帰省する

人生をなぞるワンオンフーパーツ

床の間に褒めて欲しそな軸がある

海に来て海とおなじ色になる

大阪市 中島栄子

救急車とても親切癖になる

主治医大好きマスクの下が気にかかる

点滴のポトポトポトが命綱

二か月でもう名付け無事の出産を

案外と考え抜いた句が没に

大阪市 平井美智子

食べてるか元気でいるか金あるか

立ちどまることを教えてくれた風

母逝きし日も蛇口から水が出る

針千本飲んでつきたい嘘がある

仏壇の林檎黙って聞いている

堺市 梅木澄空

家庭菜園虫がお毒見してくれる

花粉症よもやまさかの庭の花

検問に疚しくないが気が焦る

精一杯言い訳をしてボロを出す

注射器もにつこりします筋浮く手

堺市 近藤治子

喋りたい聞いて欲しいと友が来る

昆虫記親子二代の愛読書

今さらを今からに変え若返る

経験を役に立てます危機管理

休刊日物忘れした心地して

富田林市 小出修三

リハビリのお陰杖にも礼を述べ
髪形を変えて見直す春の妻
弱そうに見える女に支えられ
遣り取りのメールで脳が若返り
長命も妻のお陰と日々感謝

寝屋川市 岡本 勲

回転の止まった脳に水をやる
時々酸素足りなくなる二人
老いてなお皺のうつらぬ鏡ほし
別れても微熱のようにある未練
当てにして当てにならぬとケチをつけ

寝屋川市 大同美江

好きな事皆やりつくし逝った姉
老い二人クロスワードで知恵比べ
鑑定に出品名器傘立てに
車窓からお花見してる老い二人
九十路でも花見カラオケ誘われて

箕面市 中山春代

教科書のインクが匂う新学期
偏頭痛が始まる雨の来る予感
がら空きの海遊館に鮫という
注意書はまったく読めぬコマージュル
溶けてゆく老母へうたう子守唄

神戸市 山根弘子

無い袖を振ってほそぼそ生きてます
招かざる客が愛想振りまくる
春うらら心の中も衣がえ
八十路すぎ自由自在に生きる幸
つんどくの辞書が出番の五七五

三田市 今西廣子

私だけ生き残っても困るがな
老いの友お節介にも愛がある
老春にこっそりサブリ飲んできます
私の鮮度は何時も好奇心
へそくりはへそくりなりの使命感

三田市 九村義徳

白塀に映った影が先を行く
納車待ち心大空走ってる
歯痛でもコーヒー煙草欠かせない
肩書きが増えて給料減りました
昭和には金の卵がいたらしい

三田市 谷口修平

右左無いスリッパのだからさ
折り入って話があると嚇す妻
パトカーに条件反射隠れ癖
桜並木ゆっくり走る霊柩車
ミツバチは糖尿病を恐がらぬ

宝塚市 太田としお

和歌山市 北原昭枝

やっぱりね大事なものは人でっせ

生きてる間人の値打ちは分らない

誰にでもほんま潮時ありまっせ

前へ前へこれしかないぞ生きる術

脳ミソも鍛えていきます本の虫

宝塚市 丸山孔一

あなたにはちょっと早いと断られ

三十分待っていや今来たところ

おばちゃんのお喋り話題は何やのん

一発のノドン何人分の飯

手探りで進む我が道迷い道

奈良市 高橋敬子

文明を頼る私も汚染源

胸の内いろんな私棲んでいる

ピアガーデン女子会負けずぐいとやり

ひらひらと個人情報風に乗る

化粧したエピソード聞く阿呆らしさ

和歌山県 森下よりこ

月一のお喋り楽し句会場

行きつ戻りつ慎重に進みます

一人分だが三度三度の後始末

菜の花もいいなお墓賑やかす

仏様も待っているだろ黄水仙

デッサンを描くエンピツが夢をみる

ふる里に続く線路にある慕情

波たてず寄り添うてきた影ふたつ

つつがない暮しの中で今生きる

今はただ動けることがありがたい

和歌山市 倉橋悦子

マイセンを見たくて箱根ひとまわり

ご無沙汰と富士に挨拶して夕餉

自由って使い切れないことと知る

玉の汗かいて物足りなさを埋め

ふる里で貰い一お宮お出迎え

和歌山市 鍋嶋澄子

満面の笑み嬉々として花の宴

めじろ来て花がきわだつ春うらら

れんげ草花冠にくび飾り

御見舞いの果物かごは高級品

青い空飛行機雲が旅さそう

和歌山市 平田元三

お返しに頭痛める貰い物

汚染川清める程の雨が良い

大病を逃れ命に湧く自信

口論で勝てど手柄になりはせず

孫自慢するな結果は先の先

鳥取県 飯野 菖子

文化祭私の一句飾ります
弱る足朝の空気に一万歩
誕生日知っていたのは暦だけ
残念だ今日は二度ない老いの日々

鳥取県 児玉 規雄

アメーバーの様に襲つて来た津波
復興はまず被災者の心から
国だけが太鼓判捺す再稼働
地震国安全神話絵空事

鳥取県 下田 茂登子

両隣り老々介護で顔も見ぬ
過去ばかり追つて悲しい一人いて
ボケて来た言つてる内はボケてない
三回忌息子夫婦とする供養

鳥取県 田口 清帆

物忘れあつて人間取り戻す
ゆつくりと行こう時間を味わつて
好き勝手生きて家族の恩を知る
年金で生かされている有難い

鳥取市 大前 安子

晩学へ飛んではねてる赤い靴
犬掻きも夢があるから息づく
これで良い納得をする手の汗よ
花吹雪母さんの声したような

鳥取市 奥田 由美

朝九時に年金貰う列にいる
ねえ貴方の声で両手に荷物くる
人が居ぬ隣家で桜吹雪まう
渋谷ほど人と出会つた高尾山

鳥取市 田中 天翔

行儀よく並んで卵主張せず
島流し着いた孤島は風いでいた
ホップステップ歩幅なかなか合いません
自分のほどを知るのとっても難しい

鳥取市 津村 律子

ふれあいの行つて見たいな街歩き
桜散るバトンタッチの緑風
連続三度尻もちつけば不安来る
尻もちも笑い事では終らない

倉吉市 大羽 雄大

人込みにリュック背負つて自爆テロ
迷つたら明日があると寝てしまふ
梓の中ボクはいつでも右の端
知らぬ間に妻に脱色されている

倉吉市 岡崎 美知江

絵本から学ぶ歴史を子と語る
たつぷりと絵筆に夢の彩のせる
解決は成りゆきまかせ人まかせ
肩書をアピールしても錯びている

倉吉市 田 中 紀美恵

宿だ宿浴衣に着替えゆつたりと
ベルト外しゆつたり腹の肉ゆるめ
無職ですゆつたり雲と語ります
恋破れ髪型変えて憂さ晴らし

倉吉市 中 村 毅

椿ボタリ桜ヒラヒラ落ちてくる
空模様気になる春の幹事さん
今日もまた酒の誘いを断れず
夢いっぱい持って伸びろよ新入児

境港市 中 井 虎 尾

十二桁数字で民をつなぐ国
北島は記録と記憶残し去る
早寝ぐせ夜の酒場は遠い過去
誤作動で私にほえるうちの犬

米子市 田 村 周 子

よい仲間いるから今日も笑われる
ふきのとうやとめざまし春の味
ボケ防止弁当作り励んでる
桜咲き公園あるき主想う

米子市 見 山 温 子

立ち読みで夜の献立決めている
納骨の溜息漏れる一区切り
雪が消え元気をもらう土いじり
気がつけば的是がはずれてピエロかな

米子市 森 脇 麗

どのうちもしあわせそうに春の花
花冷えや夫はしみじみ湯割飲む
「あさ」が終り未だ感動の中にいる
嫁という名の娘に包む姑の味

島根県 福 間 左 余

チューリップ覗くわたしに笑み返す
乱気流潜り抜けるぞ生きる道
耐え抜いた苦勞の昔杖とつく
作戦を練ってる脚がうずき出す

松江市 相 見 柳 歩

恩返し全部与える愛にする
優しいねスーブのような恋さなか
山頭火まねて短詩の鬼となる
欠けた皿なんだか自分みたいです

松江市 中 筋 弘 充

B型の良い所取りで生きている
圭君に言われノドグロ売れている
義母を看る親孝行のつもりです
あの方にまた会えるかも散歩する

出雲市 黒 目 英 男

捨て石と思えば気楽わが縁
リスタート処世訓決め歩き出す
風いろいろ吹いて変らぬ花がある
アクセルを踏んでテンション上げている

雲南市 菅田 かつ子

尾道市 日谷 寛

ときめいてちよっぴり紅を差して行く
曾孫から幸せもらう疲労感
杖ついて心はスキップして出かけ
試着室どれ着て見ても今一つ

安来市 原 煩惱児

ダイヤ婚施設に独居福祉医者
大関が本気になった春場所
自爆テロ嘗ての日本特攻隊
選挙より市民は喘ぐ消費税

瀬戸内市 片島 秀月

明るくて優しい孫は婆さん似
滑り台大きな尻が乗っている
父さんと言わなくなった婆と棲む
姉さんと呼ばれ振り向く吾が女房

玉野市 片岡 富子

憧れの目標ゆるまず持つている
小悪魔と正反對の席に居る
パswードそんなのあったこのカード
慶弔が遠慮しないでやって来る

尾道市 小畑 宣之

美男美女マスクに隠す花粉症
辛抱の棒にはいつか花が咲く
金婚の夫婦の干支は犬と猿
我が家には仏様より山の神

傘寿の身いまでも忘れぬ師のことば
いつまでも師の眼差しがあたたかい
父親の齢を越えて恩返し
子と孫に昭和の気骨見せつける

竹原市 土井 輝恵

黙もくと喫煙室で束になる
妻でなく母でない日を下さいな
家庭訪問の頃に満開チューリップ
正月も盆も休めぬ職に就く

竹原市 若年 幸子

バーゲンへ脱ぎ棄ててある淑女
安くても主婦の目力妥協せぬ
何時だろう核無き地球輝く日
断捨離へ結構お金かかります

竹原市 六田 半徳

マヒの手で紙飛行機を折る元気
味見する妻の笑顔にある自信
酒の量減らして鍋の味うれし
若鯉よ五月の滝を攀じ登れ

山口市 増田 めだか

春のリズム梅に桜につくしんぼ
噂好き他人の事は良くわかる
ステキな家住んで淋しい一人鍋
顔色で母の体調感じとる

山口市 青木隆子

来客の椅子の目線に埃浮く
仏壇の掃除忘れた日の重く
父の遺影私の心見透かすか
捨てる筈だった花瓶が活躍す

宇部市 高山清子

それとなく匂わせ老いのほかす語尾
冗談の節々本音さりげなく
椅子少しずらし回りの空気読む
言いかけて止めた本音を見破られ

下松市 有海静枝

一言が余分に滑り過ぎる口
アドバイス要らぬ聞いては欲しい愚痴
ぼろぼろり辛さの潮が引いてから
老けました天で妻だと分かるかな

松山市 近藤修二

人の中でもまれる命強くなる
行間に愛する思い垣間見る
節くれた手にある歴史嘘がない
乳酸菌黒子に徹し物言わぬ

高知市 三谷松太郎

老い先もきつと見果てぬ夢続き
待っていた夢とつおいつ以下次号
夢の道懐手して虫のよさ
子の心親とは違う夢ザクラ

福岡県 本田さくら

心に火燃やし必死に古希の坂
断捨離にもったいないがしゃやり出る
四家族わが家に集う祝い事
誕生祝タマは二階で不満顔

北九州市 小松紀子

生き方に共感出来る友という
ちゃんづけで顔ほころびる同窓会
自問自答して生きざまを振り返る
落の皮むいて夕餉は母の味

佐賀県 真島久美子

昨日より悪い私になってみる
マンガ本今日は私を甘やかす
追伸の言葉がちよつと規格外
はんやりとただぼんやりと虹になる

唐津市 岩崎 實

抱き上げて花の匂いの中に置き
若冲展一番好きになりました
とこしえに平和な国であつてほし
四十年俺の句ものせ川柳塔

唐津市 吉富節子

言い訳も上手になって二年生
免許証タクシー代に泣いている
旅したい相手居なくて許可出ない
年とともに薬の種類増えている

熊本市 杉野羅天

友達になると悪さしないカラス
てっちりへ自腹と思えぬ背広族
働かぬ身分セレブになりました
下向きの花にもあつた花の意地

山鹿市 前田幸子

温暖化経費節約できました
チューリップ夜明けを待ってごあいさつ
杉や竹手入れ価値なく無惨です
春ですネー腰が少々のびました

札幌市 斉藤宏子

姑壊れ口ずさんでる子守唄
続々と新芽はじけて入社式
沢山の手に守られる介護の身
歩道橋登りあぐねてじつと見る

弘前市 工藤京子

死別後はゆっくりゆったりあるがまま
恐れない天を見上げて恐れない
第一歩踏み出した日の軽やかさ
喜びの涙に戻る五月晴

弘前市 高森一呑

カルガモの色とりどりのランドセル
外国人も御土産に買うランドセル
もう一度背負うてみたいランドセル
熟練の老婆編んでるワラ草履

つくば市 嶋本喬

いなし方横綱よりも総理上
産む機械総活躍で忙しい
ダウントンアビーストリーより調度品
孫が来て寿命縮んでまた伸びた

上尾市 中村伸子

優しくて時にいけずになるあなた
焦点が他の誰かに合っている
半音の違いが分る不幸せ
責めたとてラ抜き言葉は生き残る

松戸市 山下明子

おばあちゃん気楽ね私幼稚園
馬車のゆく港ヨコハマ異国の香
屋久杉を幾度訪ねし紀行本
トレッキング仕上げは夢の屋久島へ

伊勢原市 小田幸子

振り上げた拳自分にむすぶ口
類越えて枕並べて母と犬
どう見ても保護者は犬で母はナニ
あき箱に寒いと母が書きなぐる

静岡市 渡辺芳子

はける前やりたい事が多すぎる
幸せは多くを望みすぎぬ事
散歩犬近寄って来て仲良しに
この命もやし続けて行ける幸

江南市 脇田雅美

先の事思わず今を大切に
幸せはいつまで続くことはない
首回す固まる脳を柔らかく
ストレスを溜めると病寄ってくる

京都市 櫻崎篤子

桜降るまた来年を夢見るか
ひらひらと酒の匂いへ散る桜
蛙一匹見つけた孫のときの声
田植唄姉さんかぶりもなつかしい

大阪府 畑中節子

宿浴衣心も口も軽くなり
倅せは人並で良し五感研ぐ
日が見る山もすがしく衣替え
ゆったりと倅せ感じ八十路活く

大阪市 磯島福貴子

生命線一寸書き足し卒寿まで
クチコミにつられ出かけるラーメン屋
本音吐き失言ですと軽い口
ガラス越しどちら似だろと姦しい

大阪市 梅里南天

地下鉄の窓から外を見る少女
健康のために電車で散歩する
どこからか金よ出て来い春の宵
クイズ見て早く答えて反り返る

大阪市 大治重信

母いれたお茶ほんのりと里帰り
先生と呼ばれにつこり恐れ入り
釣れ過ぎて自慢話のおすそ分け
これだけで治まらぬのが腹の虫

大阪市 田中廣子

花の下亀の可愛い甲羅干し
目覚しを止めてまた寝る春の朝
ゲーム負け涙堪えてる可愛い児
トランプ氏世界混乱させるかな

大阪市 田中ゆみ子

腹時計狂わずに鳴る元氣です
私にも出るのだろうか馬鹿力
なぜなぜを突き止めたくて走ってる
妻だけが頼り優しく力持ち

大阪市 橋本典子

淡淡と母淡淡と生きている
花吹雪母と見上げる散歩道
会う度に母の笑顔が満開に
母さんの過去への扉おじやまする

大阪市 平賀国和

生き抜いて花を楽しむ幸せよ
子がくれた定年慰勞伊勢の旅
我もまたお陰様でと伊勢参り
職退いて川柳塾の門に入る

大阪市 前川善之

新幹線日本の北から南まで
春が来た桜咲いたと城が呼ぶ
幸せも健康あれば風が言う
妻よりは恐さ思わす娘の笑顔

大阪市 松田聰

失言を懲りず重ねる偉いさん
戦争を嫌ってるのは皆同じ
テロの根は歴史が示す深い傷
新聞の一紙だけでは偏る眼

大阪市 宮村満寿恵

毎日を笑顔でいれば心はれ
老いを知る足の重さが伝えくる
初夏の陽を知らぬ野菜のハウスもの
単純に嘘も信じるお人よし

大阪市 横山里子

跡取りができて自慢の鯉幟
旅の夜身の上話興に入り
試供品頂きました紙オムツ
イケメンの軽い男に惚れた過去

大阪市 吉田知之

小事でも面倒がると大事に
頑張れば努力だんだん生きてくる
防犯ヘカメラが強い味方する
専用車知らぬふりして二人連れ

堺市 大和峯二

古希からは柳のようにしなやかに
寄り道も無駄とは言えぬ人の道
多数派が正義の声と言いきれず
挫折してはじめてわかる人の恩

堺市 山崎早苗

顔上げて一歩踏み出す雨上がり
テレシヨップおまけはいらん安くして
公園のベンチがひとり空を見る
ここからの夕日が好きと聞いたから

池田市 上山堅坊

急ぐほど謀反を起こすボクの脳
オープンカフェ旅行気分を盛り上げる
吟社の枠越えて楽しくする句会
趣味だけに的を絞って生きる日日

泉大津市 助川和美

相槌を打って笑顔の介護の手
また来てね別れを惜しむもみじの手
天まで上がればくが削った竹とんぼ
塩加減替めていただく豆ごはん

交野市 田岡久幸

あれかこれか行きつく先はまあいいか
妻安堵五十二円の道楽に
児の入試今は何でも待つばかり
掃除して一日生存権を得る

河内長野市 森田旅人

お似合いのカップルとなる金婚式

ありがとうの言葉がしこりほぐす鍵

悩み解く鍵はいつでも母の膝

制服のボタンはずして背伸びして

河内長野市 穂口正子

縫代の浅い男を持て余す

欲張りで掴んだものが逃げてゆく

来し方が輝いてくる要注意

咲く前に散るを悲しむ老いて今

岸和田市 宮野みつ江

明日は雨桜にカメラ飛び出した

一眼レフ掛けるとマヒの足忘れ

筍に蕨と灰汁も春の味

桜さくら私もサクラ色に染め

高槻市 三谷白黒

人様に注意する程偉くない

勝負より大事なものあり選手達

ぜいたくに独りの為に風呂沸かし

今の世は質素儉約死に言葉

豊中市 荒木郁子

世の中の便利さに慣れ不感症

春からは孫と一緒に英会話

川柳で艶出し脳の活性化

地に堕ちたヒーローやがて忘れられ

豊中市 荒巻夢

母想いつまみ葉洗う春浅し

若人の感謝の濫用ひっかかる

冬物の喪服の襟に春の風

サスペンスややこしすぎて興そがれ

豊中市 貝塚正子

引き分けがママの軍配思いやり

丁寧にあいさつされた人違い

塀の上睨みあつて猫二匹

花時計いつも三時で止まってる

豊中市 源田啓生

トランプの波に揺れそう帆掛け舟

朝夕は千手観音手を貸して

我が家にも俵に座るお人なら

夕陽さん明日も背中を押しとくれ

寝屋川市 荒川鈍甲

桜散る親父が逝った日も近い

自分の色でいま連翹や雪やなぎ

野党協力潮目変るに違いない

倫理に追われふらつく核の抑止論

羽曳野市 磯本洋一

飼犬に何故か似てくる愛犬家

墓参り紋白蝶も御供する

サブリ飲む小遣い全部使い切る

花粉症同士が何故か山ガール

羽曳野市 安本美喜

菜種梅雨神經痛に泣かされる
看護師と身を伏す廊下梅雨の雷
指笛で猫を呼べどもそっけなく
部屋全てバリアフリーのよしとする

羽曳野市 中川ひろ介

世を去った友の気持で見る桜
舊時代あったのですよ梅干しも
自撮り棒笑顔の壁で通れない
淀川に稚鮎が遡上堰数多

枚方市 坂本ミヨノ

夢を見た頬にチューです四月馬鹿
裏山の筍競い頭出す

玉子ゆで皿につぶして菜の花に
メンバーに憎まれ役で気にしない

箕面市 大浦初音

諍いを忘れて食べる古い二人
勝った試合テレビニュースでもう一度
新聞で知っておどろく別の顔
むなしくて空見上げれば昼の月

箕面市 寺井柳童

初登板連打を浴びるニューフェイス
碁敵に半目勝負眠られず

決心がつかず見送る目の手術
少子化に旧き学び舎廃校に

八尾市 田邊浩三

羨ましい立ってパンツの履ける人
身体中修繕したい所ばかり
爆買いが日本の魅力示してる
縄のれん目指すはママのあの笑顔

八尾市 前田紀雄

スケジュール無い日は家の掃除する
花冷えて衣替えして風邪を引く
兄亡くし突っ支い棒を外される
冷え込んだ財布なかなか開かない

神戸市 井上忠貞

歳月が夫婦の仲も丸くする
鏡見てこんなの俺の顔じゃない
俺とお前お互い様の人生さ
なんとなく歩きだしたい陽気です

神戸市 輿水弘

あきらめたとたんに安ど元気で
ドジだけどやさしいパパがデンと居る
老いの恋妄想だけが遊んでる
ホラ吹き祖父がいるよな慕撫ぜる

神戸市 細川花門

濁り酒はこころの疵の塗り薬
酔眼を花粉症かと疑われ
五七五すっきりさせる血のめぐり
外灯をたどる家路の千鳥足

尼崎市 清水 久美子

つまらないギャグがおもしろい風呂上がり
カエルぴよこ2ぴよこ3ぴよこする植田

健診を終えて丸ごとピザを食む
悲しげに第2ボタンが落ちている

尼崎市 藤田 雪菜

煮くずれた山菜母の味がある
献立のきまらぬままに宵迫る
思いつくと怖いもの無し空の旅
前へ前へ脱皮が続く青春期

伊丹市 平井 富夫

新社員挨拶いいよ乾杯だ
いつも先あの世へ行くのピリでよい
オーバーな虎の威を借る議員秘書
ビールはねジョッキでないと味気ない

小野市 田中 辰夫

幸せを配るピエロの顔の下
はんなりと桜トネル老い二人
一年生あいうえおから春が見え
幕引きは母が一喝子のけんか

川西市 日野岡 和之

ギリギリもセーフはセーフ残り福
歩くだけ生命を拾う万歩計
天地人繋がりをつ大地震
駄菓子から昭和を拾う村祭り

篠山市 藤井 美智子

一年の美を蓄えて桜咲く
褒め言葉笑顔セットで気持ちいい
終活へ一歩踏み入る老いの侘び
今のままこのまま元氣保ちたい

三田市 宗福 清司

へそくりの置き場所忘れネコに聞く
ハイポーズどうすりゃいいの分からない
その言葉今は要らぬとずばり言う
向き不向きずばり言うべきお互いに

三田市 多田 雅尚

花見客見るより長いお弁当
イタチでも毎日来たらお客さん
新聞の小さな記事にある事実
飲み会に病気の話題無しと決め

三田市 辻 開子

車窓から桜が見える旅ができ
御所に行く元気な足があるあいだ
もともとれぬ野菜の苗を植えました
古希越えてペーパードライバーゴールドよ

三田市 東内 美智子

学童の見守り隊指図され
上げ膳据え膳時にはそんな日もほしい
パスポート十年取って一度だけ
感じた視線辿れば若いあなた居た

西宮市 株元玲子

優しさの色合い加減むつかしい

このままであるがままでと言いつく

弱虫の小さな叫び届かない

凛と立つ老樹を見上げ背を伸ばす

三木市 山口久子

世の中を九十すぎても渡りたい

秋風にさそわれわれも歩きたい

秋風がおいでおいでと六甲へ

苦労した戦中戦後夢みたい

南あわじ市 萩原狸月

あれしきへお礼の品が大きすぎ

頂上は修業するほど遠くなる

ばてた身に土産が重い旅帰り

カーナビにお任せをして迷う地理

奈良市 尾畑なを江

気まぐれの風のいうまま散るさくら

懸命に走って来たが悔いだらけ

老眼が進み近視は回復し

このごろは未知の遭遇ふえてきた

奈良市 高橋仁志

胸のふくらみ花の蕾と競いあう

入社式希望ふくらむ雛の胸

宝石のような花芽を鳥が摘む

春うらら猫がきらりと僕を見る

和歌山市 福呂秀子

老いてからつくづく思う父母の恩

お花見が暫しこの世の極楽に

体調の悪さ心も大人しく

雑草も明日を夢見て花咲かせ

岩出市 村中悦男

いいことを見たくてしかとめがね拭く

花盛りめがねを拭いて出る散歩

連れそうて六十年の日々新たな

同病とはずむ話で楽になり

(前月分) 鳥取市 近藤秋星

異動の季節変わってほしい奴がいる

異動の季節君は変わらぬよう祈る

驚も練習をしてホーホケキョ

松葉ガニ小指食わせた栄養士

(前月分) 瀬戸内市 片島秀月

酒なしで花を楽しむ歳となり

善人の車が止まる白い線

老いゆくもひと日ひと夜の飯茶碗

妻が病みまず包丁が錆びてくる

第154回 大阪川柳の会

日時 6月8日(水) 午後1時開場・午後2時締切
会場 大阪市北区梅田 駅前第二ビル5階
大阪府立総合生涯学習センター 第一研修室
宿題と選者(各題2句・席題なし)
△△「甘」正和 △△「人」生 △△「味」確水 祥昭
会費 1000円 欠席投句(切手82円5枚同封) 森中恵美子
千 532-0025 6月7日到着分まで 会員に限る
大阪府淀川区新北野1-3-4-706 本田 智彦 宛

俳風柳多留一二篇研究 36

細井龍夫・伊吹和男

山田昭夫・石川道子

小栗清吾

清博美

287 けいせいハはねられるだけはねる也

細井 傾城は「ありんす」「ありんせん」「ありんしょう」「しんす」「おざんす」「おざんせん」「そうざんす」「来なんした」「来なんせ」「お座りんす」等々、吉原以外では耳にすることの出来ない独特の語尾のはねる言葉遣いをするので、客は別天地に居るように楽しめる。

りんすしいすは北くてきのことばなり

一五4

傾城の疵はことばの尻上り

宝12信2

おいらは六町と出ぬ言葉なり

一七22

山田 礎引二句目のようにありんす言葉では語尾を「尻上り」とする事はあるでしょう。

でも、「はねられるだけはねる」ということではないでしょう。小生は、

またはねるく〜と三浦そばてい、

明五礼1

と同じく、仙台高尾の身請の時の計量の秤と
 思います。

小栗 百姓もきみんとはねる国言葉 宝11義2

馬て来ルのでよめん女とはねるなり

明五天1

の句から見て「はねる」が「ありんす」の「ん」を指すことは確か(但し、「語尾のはねる」ではない)。しかし、「はねられるだけはねる」という言い方は、単にありんす言葉だけを詠んだ句とは思えぬ。「はねる」という別の言葉を、ありんすの「はねる」に掛けて表現した句だろうと思うのだが、肝心の「はね

る」方がわからない。柳雨氏は「吉原志」で「飛跳る」と掛けてあると頭註されるが、「傾城が飛び跳る」とはどういうことかよくわからない。「羽振りをかきせる」というようなことだろうか。

辞書には「吉原語。歓待される。もてる。転じて一般に人気を博す。喝采される。当りをとる」(『江戸語の辞典』)とあるが、どうも客側に使う語らしく、「傾城がはねる」わけでもなさそう。「拒絶する」は、一応つじつまは合いそうだが、「拒絶ではるだけ拒絶」しては、商売にはなるまい。不明句である。

よしハラハやねてもたがのはねる所

安七宮2

清 「刎ねる」を「かすめ取る」としてはどうか、と考えてみたが、やはりうまい説明が出来ない。辞書に解説されている以外の意味があるのかも知れない。兎も角も不明の句である。

288 三界むあんののはつたにニタ世帯

細井 『妙法蓮華経譬喻品』第三に「三界無安猶如火宅」(この世は苦しみが多く、あたかも火に包まれた家にいるように、しばしも

心が安まらない。三界に家なし) (日国)とあるのに、この坊主、自坊には大黒、そして別宅には聞いと二世帯も構えている、とんでも無い生臭だ。

経文の「無安」を「無庵」と同音異字でまとめた。

三界無庵内証ハ二タ世帯

四一 20甲

小栗 賛。女ッ気がなくても坊主である以上、一世帯であるから、無理に大黒を設定する必要はないと思われる。外妾だけで十分ではないか。

清 同右。つまり聞だけ。

289 かへり八御一所とむす子こまらせる

細井 かこつけの遊所行きに生息子を無理矢理引つ張って行こうとしているところ。行先は弔いか向島か。

道をかへ帰ルものだと引つられ

六26

木むす子のしやうことむらいやとい、

明六智3

小栗 この句も情況がよくわからぬ。

①まず、礎説が「かこつけの遊所行きに生息子を無理矢理」といつておられる意味がわからぬ。「生息子」とは書いてないし、「かこつけ」なら、「吉原行き」とは思わぬ生息子は

気楽に付いてくる筈。「息子」を川柳の定義通りに解釈すれば、帰りに必ず吉原へ行くわけだから、まずそういう設定は無理ではなからうか。

②「イ」「息子」が「誰れか」を困らせるのか「ロ」「誰れか」が「息子」を困らせるのかよくわからぬ。

もし、①の如く、「道楽息子」と決めれば、一緒に吉原へ行こうと、連れを困らせる「イ」のなら、辻つまが合う。或は「ロ」とすれば、仲間からはずれて吉原へ行こうと思っている息子が「一緒に帰ろう」と言われて困っているということか。

清 まず、何処からの帰りがわからぬ。これがわかれば「息子が」か「息子を」がわかると思うのだが。

290 大やからてつぼう玉が十五来る

細井 八月十五夜の月は中秋の名月。家々では月見団子を作って、柿・栗・葡萄・枝豆・里芋の衣かつぎ等と三方盆にうず高く盛り上げた。団子には尾花・女郎花等を添えた。御供えとは別に、家族の一人に十五個ずつ渡すように小団子を作って柿・栗等を添えて配った。御供え用の団子は径が六センチから一〇

センチ位あったが、小団子の方はくるくるつと丸めた真ん丸のもので径も一〜二センチくらいで当時の鉄砲玉にさも似たり。大屋が独り者の店子に小団子を配ったのを鉄砲玉と叫んだ。

店中へてつぼう玉が十五つ、

三24

お月見をていしゆに十五丸メさせ

四6

伊吹 大屋の儉約ぶりを言いたいのだろう。

小栗 月見の句の「十五」は、単に十五夜の暗示と思っていたが、礎説のいわれる如き記述が「絵本風俗往来」にあるので少々悩ましい。この記述に従えば「十五」は実数ということになり、鉄砲玉位が普通だったとすれば、伊吹兄のいわれるようなケチな大屋というパターン句ではなくなってしまう、単に事実を述べただけという何が面白いかわからない句になる。

『絵本風俗往来』は幕末の風俗ということになっていたので、主題句(安永期)の時代にも妥当するものかどうか、私の知識では礎説に賛とする自信がない。

清 大家に何人の店子がいるかわからないが、一人あて十五づつとなると、これは大屋のかんりの散財になる。十五は十五夜を暗示しただけの語と考えないと、いろいろ辻褄があわなくなるようだ。

橘高薫風句抄

〔橘高薫風川柳句集〕平成十三年発刊

いつまでも力頂く師の手紙

天城峠のフライドチキン缶コーラ

怖いもの知らず五十八になり

夢も理想も音も失いつつ老ゆる

極楽と地獄見分けぬしゃれこうべ

証明書お辞儀の数をわびしがる

古切手失恋の日も遠くなり

金に嫁せしか人形抱く如し

七十と言う青春はネクタイに

死を願う氷の解けて行くような

田植歌田植えのどかなものならず

サラリーマンの靴靴下にある番地

親の目に先生は皆若すぎる

夏祭り過ぎて悲しい原爆忌

滝の前自転車帰る方を向け

自転車を押して恩師の影踏まず

抽斗に転がるものが一つある

抽斗の亡父の眼鏡は捨てられず

第一番大吉とあり初みくじ

裸の煙草が散らばっている父の苦悩に

お見合いに手の静脈が目立つなり

よう喋り女満腹して帰る

山頭火放哉寒い旅をせり

付き添いが戻り表の寒さ言う

うどんすき仲居というもなくなりぬ

食うものに限り天才型である

争いはない地球儀の海の青

栄枯盛衰暴力団の表札も

通り抜け昨日誘われ今日誘う

年とってペタンシップのモデルで居

英語 de Senryu ⑤④

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

だまつて呑むは惚れているなり

*drinking
in silence,
Love*

ではここでなどと別れて飲み直し

*here's to goodbye
he says to me
and drinks again*

drink 酒を飲む *in silence* 黙って *here's* ここで *say* 言う *again* 再び

〜リバーウィローのため息〜 R.H.ブライスによる川柳の解釈と英訳⑱

今回は猫の川柳です。猫と少女の微妙な関係を詠んでいます。

緋鹿の子の扱帯で猫の戀をせき かほ丸

(Damming up / The cat's love / With her scarlet under-sash.)

「ある春の夜のこと、猫は庭で待っている恋の相手に会いたくて外へ出たがっています。でも女の子は緋色のしごきで猫を柱に結わえました。ここには、“女の子と猫”、“恋と緋のしごき”とのハーモニー（調和）があります。」とブライスは解説しています。「恋をせき」とは、相思の仲を妨げて逢わせないようにすることです。ブライスは感情を抑える語句、*dam up* を使っています。作者の平山かほ丸は、大正13年に「都川柳会」から創刊された前田雀郎主宰の柳誌「みやこ」の中心メンバーとして活躍しました。「みやこ」は一時期、東京で「きやり」と並称されましたが続きませんでした。しかし、東京柳界に“都調”といわれる一派の句風を生む契機となりました。“都調”、“都ぶり”は雀郎によると、「柳多留の非情から武玉川の有情を志向した、いわば原点である俳諧を向こうに見ようとする創作態度である」でした。今回の句は恋への憧れから、猫の恋を邪魔する女の子が登場します。緋色のしごきで結わえられる猫にしてみれば、少女の感情で猫の本能を阻止されては、たまったものではありません。人の恋も猫の恋も、その情熱を色で例えば緋色でしょうか。人間と猫の微妙なせめぎ合いを感じます。

参考文献：R.H.Blyth, *SENRYU*（北星堂書店 1949）p.145.

尾藤三柳編『川柳総合事典』（雄山閣 1984）p.300.

愛染帖

新家 完司 選

(投句 282名)

花吹雪浴びて最後のクラス会

海南省 堂上 泰女

(評)同級生もほとんど減って、残っている人も病気がちで、「今年限りにしましうか」。丸い背を慰めるように、見事な花吹雪。

尼崎市 市坪 武臣

年寄りが立ち年寄りを座らせる

(評)高齢化社会を象徴するヒトコマ漫画。

老化現象には個人差があり、弱った古稀を元氣な傘寿が労わることもアリだろう。

大阪市 宇都満知子

「ぶさかわいい」貶しているの褒めているの

(評)「ぶさいく」と「かわいい」の合体語。

もつと縮めてブサカワ。言われた当人は複雑だろうが、近付き難い美人よりもモテる。

姫路市 古川 奮水

ミュンヘンで飲んできました写真です

(評)孫自慢の次に多いのが旅自慢。他人が飲んでいる写真など見たくもない。「そんなものより、土産をくれよ!」と言いたい。

飾らない人だ言葉も服までも

松原市

(評)自分を飾らず、誰にも自然体で接するのは達人。だが、「服装まで」となると、修行の成果ではなく単なる「ずばら」だろう。

京都市

ホーム行くお金なかなか貯まらない

三宅 満子

(評)ホームも様々だが、介護付きでは数百万から数千万円の入所一時金。毎月二十万円ほどの経費。目標があれば元気に過こせる。

米子市

和式しか空いてないのでヨツコラシヨ

竹村紀の治

(評)洋式が空くまで待てない状況だったのだ。高齢化社会に向けて「全国のトイレを洋式に!」運動を展開しなければならぬ。

海南省

浅い夢得したような二本立て

小谷 小雪

(評)二本とも楽しい夢だったのだ。夢の内容は体調と繋がっている。「悪夢の二本立て」など見えないように、元氣澁刺を維持しよう。

寝屋川市

食材が今日も泣いてる妻の腕

岡本 勲

(評)女性のプライドを傷つける言葉の一つが、手間をかけた料理に対する「イマイチ」。奥さまの目に触れると波乱必定の一句。

松江市

鳥取に負けてはならぬ根拠

中筋 弘充

(評)関東以北の人からは区別のつきにくい

両県。意識して頑張り合うのもいいが、「どんじり競争」の感、無きにしもあらず。

倉吉市

さくらさく財布の口も咲きました

和歌山市

我慢などもう止めました花の宴

大坂市

一万歩越えた傘寿の桜見会

京都市

お互いに昔話になる花見

藤井寺市

花の宴野点琴の音溶けて暮れ

大坂市

手前味噌くぎ煮持ち寄り花見酒

鳥取県

花見酒酔いがさめたら花も散り

川西市

逝った人話に入る花見会

寝屋川市

八十五桜花爛漫見届ける

三田市

平和だな日本列島さくら呆け

大坂市

咲いた日と散る日の桜見れば良い

三田市

お花見の会が減ったぞまたひとつ

府中市

花吹雪わが足跡を消してゆく

田辺 和子

西宮市 福岡 弘子
頑張つて海を目指すとは花筏

東大阪市 北村 賢子
一抹の寂しさ目立つさくらの葉

富田林市 山野 寿之
本音まで少し足りない酒二合

広島市 岸本 清
非常食カンパン偶に酒のアテ

河内長野市 村上 直樹
もう一杯そこで我慢という極意

大阪府 奥村 五月
酒好きの友の供養に二日酔い

長野県 丸山 健三
反論が出来ずさくらの下にいる

佐賀県 真島久美子
冷や酒でいい日焼けの顔だから

松山市 郷田 みや
蝶結びして女子力は無限大

奈良市 大久保眞澄
雑草に開花宣言などはない

下流老人妙に納得してしまふ
飲めるとき飲んでおくこれぞ終活

堺市 村上 玄也
外来語氾濫日本語混乱

防犯のカメラ盗撮しているな

河内長野市 藤塚 克三
串カツは二度づけ駄目よ外人さん
キタミナミ外人客に道譲り

シドニー 坂上 のり子
ハーブ色々植えて戸惑う使い道

豊中市 藤井 則彦
知らん振りしつつ空気を読める猫

鳥取県 細田 裕花
犬よりも恩を知らない人がいる

松戸市 山下 明子
世慣れた人も童話に目が潤む

和歌山市 喜田 准一
しゆくしゆくセルフうどんの列ながれ

大阪府 谷口 義
神様がとても身近に居る祭り

空腹は茶腹で凌ぐダイエツト
落ち込んだ夜は演歌を聞いてます

大阪府 谷口 義
拍手するタイミングまでずれたした

八幡市 今井万紗子
おばあさんはアカン言うたらアカンねん

尼崎市 清水久美子
箸二膳みそ米足りて充分や

奈良県 渡辺 富子
しめしめと思える話落ちてない

ハネムーンに便乗をしてフルムーン
どっさりの薬を持ってフルムーン

紀の川市 北山 絹子
健康に感謝しながら口喧嘩

堺市 奥 時雄
負けなないと止まぬ妻との口喧嘩

神戸市 上田 和宏
負けておく妻は宝と思うから

山口市 青木 隆子
エレベーター探して巡る母子旅

札幌市 三浦 強一
エレベーター・エスカレーター探す足

青森市 守田 啓子
所詮他人未だくつつかないパン粉

笠岡市 藤井 智史
ペラペラな存在価値で生きている

神戸市 細川 花門
人の子のバイバイ見てるパンダの子

鳥取県 斉尾くにこ
花の名を言いたがる人言わぬ人

枚方市 伊達 郁夫
神様に近づくように窓を拭く

橿原市 居谷真理子
新鮮な葱だ私を浄化する

枚方市 寺川 弘一
煩惱はお寺さんには飯の種

防府市 坂本 加代
防風林粘り腰かな六十度

紀の川市 辻内 次根
箆を買う時に力を入れ過ぎる

瀬戸内市 宮宅比佐恵

老いらくの恋はそのまま五七五

池田市 上山 堅坊

私の新芽を探す五七五

神戸市 奥澤洋次郎

マンネリの句が恐ろしい一人者

唐津市 山口 高明

機関車の役する柳友いて安堵

堺市 大和 峯二

川柳はボケの防止の一級品

大阪市 藤原千恵子

全没でも土産に何か得て帰る

大阪市 佐藤 忠昭

句会日は雨が多くて傘失せる

箕面市 中山 春代

丸文字を真似てちよつぱり若返る

鳥取市 谷口回春子

ストレスに特効薬の句集読む

高槻市 安田 忠子

句集読むお茶の香りのする和室

和歌山市 松原 寿子

カラオケへ胸の小骨を抜きに行く

奈良市 米田 恭昌

カラオケへ義理の拍手は義理の音

京都市 榎本 宏子

せめて極特上頼む家族葬

鳥取市 福西 茶子

家族葬是非にと言われても困る

松江市 石橋 芳山

ぐじゅぐじゅに沈んで浮上する気なし

岡山市 永見 心咲

崩れない範囲で揺れているプリン

篠屋川市 森 茜

キャリアバッグななめに胡座かく通路

沖縄県 森山 文切

申し訳ないとは思えない顔だ

鳥取市 前田 楓花

「お大事に」とスマホで愛がすぐ届く

西宮市 緒方美津子

メールでは父のくせ字が届かない

交野市 田岡 久幸

言葉とはひとたび出るとはや固体

八尾市 高杉 千歩

いとこ会七名後期高齢者

河内長野市 梶原 弘光

爪に火を点しどかんと見栄を張る

羽曳野市 徳山みつこ

ミス多いわたし他人を責めません

唐津市 坂本 蜂朗

肝腎の数値に覚悟迫られる

河内長野市 穂口 正子

なに着ても付いてる顔は替わらへん

高槻市 富田 美義

新人の医師を診ている老患者

高知市 小川でるみ

戻る家ある幸せを子は知らず

唐津市 仁部 四郎

ノンポリに染まるか十八選挙権

河内長野市 山岡富美子

手も足も頭も第二反抗期

枚方市 海老池 洋

トイレから急げば電話切れている

東かがわ市 川崎ひかり

ストレスが溜まるとはいいチヨコレイト

宝塚市 太田としお

生きてます人に迷惑かけながら

岡山市 藤成 操江

反省とまあいいかとがせめぎ合う

倉吉市 牧野 芳光

いつ死ぬか分からないからよく笑う

鳥取市 夏目 一粋

飢えて死ぬことは死んでも死に切れぬ

宝塚市 田中 章子

猫ねこネコわたしはやはり犬が好き

大阪市 柴本ばつは

超むかつくシャネルのベスト着て犬

大阪市 平井美智子

タマまでがいそいそとする年金日

大阪市 井丸 昌紀

正月から腹に脂肪が居候

堺市 矢倉 五月

図書館の帰りにチャチャと買う夕餉

大阪市 高杉 力

酔っててもしつかり貰う領収書

塩竈市 木田比呂朗
まだまだと妻をおだてるコーシヤル

豊中市 松尾美智代
ウエストがらしくなつてのストレッチ

大阪市 江島谷勝弘
充電がいらぬケータイできぬのか

和歌山市 古久保和子
噴火口は一つと限らないワタシ

三原市 鴨田 昭紀
根回しを済ませ余裕の多数決

香芝市 大内 朝子
春風のいたずら煩惱を煽る

池田市 栗田 久子
さつくりと荀春は心地よい

鳥取市 土橋 螢
邪な心なおせとホーホケキヨ

和歌山市 平田 元三
古日記今は欠かせぬ備忘録

松山市 柳田かおる
正確なわたしを知って自然体

河内長野市 坂上 淳司
レシビより美味いワイフの目分量

鳥取市 田中 天翔
一列に並ぶ卵がいらしい

羽曳野市 中川ひろ介
顔よりも艶が出てきた足の裏

豊中市 貝塚 正子
アルバムの父は七三丸メガネ

高槻市 片山かずお
葬式と聞き仏式と思い込む

熊本市 杉野 羅天
相撲の所作に人柄が表れる

大阪府 米澤 俣子
キャッシュカード何と便利な無駄づかい

弘前市 吉川ひとし
鬼嫁ときつと呼ばれてます 娘

鳥取市 奥田 由美
天下り女史を阻止した主婦バワー

三田市 福田 好文
激安ツアー欠伸よくする運転手

岡山県 田中 恵
うらうらと喧嘩の種を売りに行く

東大阪市 佐々木満作
目覚ましは味噌の香りと刻む音

三田市 東内美智子
丸い背に装着下着効き目なし

鳥取市 岸本 宏章
まだ生きる気かと社保庁問うてくる

岡山県 池田たか子
老いたなと口に出せない夫の背な

宇部市 平田 実男
あのどこがいいのでしょうか鼻ピアス

寝屋川市 平松かすみ
命大事にママチャリに乗せている

男鹿市 伊藤のぶよし
名水と言われた途端うまみ増す

長岡京市 山田 葉子
集中力三分間は保てそう

西子市 黒田 茂代
アンケートまさか手口と思わずに

奈良県 安福 和夫
IH型無炎の愛を燃やします

大阪市 榎本日の出
子だくさん楽しい愚痴が続いてる

橋本市 石田 隆彦
体調は酒とタバコの味で知る

倉吉市 岡崎美知江
三代目なればつきあいほどほどに

高槻市 初代 正彦
だるくてもちんたらすまい孫の前

高槻市 島田千鶴子
好奇心ありすぎ膝が笑い出す

和歌山市 磯部 義雄
お隣のピアノ合図に行く散歩

奈良市 加門 萌子
優先席でメールしてます高齢者

河内長野市 森田 旅人
母親も新人生の顔をして

大洲市 中居 善信
がらくたを捨てるどころか拾いこむ

岡山県 山縣のぶ子
自分流まだまだいける箸使い

鳥取市 山下 凱柳
脳と筋どちらが先にガタくるか

共選欄

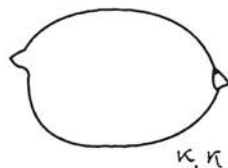
檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 384名)



「浴びる」三浦強一選

太陽を浴びて笑っている新芽
太陽を浴びたキャベツの自慢話聞く
太陽を浴びたトマトのナポリタン
浴びる程言って欲しいな愛してる
焼夷弾浴びたあの日を語りつぐ
往生します嫉妬を浴びる鼻目立ち
叱声を浴びても奮起した昔
春の陽を浴びて少女も羽化をする
見送りの父の視線を背に浴びる
試歩の杖陽の喝采を浴びながら
天下国家論じて浴びる大ジョッキ
十八歳注目浴びる初選挙
ムヒカさん賞賛浴びる人間味
ありがたさ全身浴びる御開帳
朝日浴び霊峰まさに畏敬なり

和歌山市	上田	紀子
岡山県	山縣のぶ子	
鳥取市	奥田	由美
神戸市	能勢	利子
岡山県	池田たか子	
男鹿市	伊藤のぶよし	
高槻市	片山かずお	
和歌山市	古久保和子	
和歌山市	土屋起世子	
島根県	伊藤	寿美
奈良県	渡辺	富子
大阪市	宇都満知子	
八尾市	前田	紀雄
東大阪市	北村	賢子
河内長野市	藤塚	克三

「浴びる」長浜美籠選

陽光を浴びて千年の大樹
新緑のシャワーを浴びて妖精に
はつらつと朝日を浴びる新社員
森林浴空気の旨さ知りました
はしたない野次が闘志に火をつける
大喝采琴パウアーに日本沸く
新緑を浴びると背筋伸びてくる
骨密度上がると信じ陽を浴びる
浴びている夕陽に溶かす今日の鬱
浴びる程受けた慈愛を子等にまた
幻かも知れぬフラッシュ浴びてみる
シーベルト浴びて廃炉の道遠く
栄転へ浴びる拍手にある嫉妬
娘のシャワー長すぎる音聞いている
日向はこ猫も私も丸くなる

東大阪市	佐々木満作
三田市	上田ひとみ
伊丹市	平井
三田市	福田
鳥取市	岸本
豊中市	上出
藤井寺市	鴨谷瑠美子
京都市	三宅
神戸市	山崎
堺市	大隅
藤井寺市	太田扶美代
西宮市	梅澤
茨木市	島田
大阪市	古今堂
紀の川市	楠原

脚光を浴びると背伸びしてしまふ	松山市	柳田かおる
静かな悲鳴浴びてきました無言館	大阪市	柴本ばっは
ほめ言葉一杯浴びて子がのびる	大阪府	神野千恵子
声援を浴びて孤独なアスリート	三原市	鴨田 昭紀
称賛を皆から浴びて身を縮め	寝屋川市	富山ルイ子
露天風呂大きな月が浴びに来る	富田林市	関 よしみ
酒好きの僕には出来ぬビールかけ	広島市	岸本 清
記者会見フラッシュ浴びて自己弁護	大阪市	藤原千恵子
議員秘書火の粉を浴びる役どころ	茨木市	藤井 正雄
正論を通す火の粉を浴びようが	鳥取市	岸本 宏章
喝采を浴びてバージンロード踏み	大阪市	大西 晴雄
火も水も浴びてどん底から抜ける	弘前市	福士 慕情
温もりを浴びて心の鎧脱ぐ	鳥取市	谷口回春子
シーベルト浴びた美田のすすり泣き	富田林市	山野 寿之
セシウムをかぶる原発など要らぬ	枚方市	海老池 洋
冷や水を浴びせるようなガン告知	塩竈市	木田比呂朗
日本死ね罵声浴びても応えない	泉大津市	助川 和美
スポットライトわたしを避けてばかりいる	弘前市	稲見 則彦
心地よい方言浴びる里帰り	高槻市	富田 保子
里の陽を浴びて貰って来た元気	出雲市	竹治ちかし
横綱の取り手に浴びたブーイング	高知市	小川てるみ
花吹雪浴びながら行く乳母車	鳥取県	児玉 規雄
花吹雪浴びるブランコすべり台	松戸市	山下 明子

口出してもろに火の粉を浴びる羽目	大阪府	米澤 俣子
百歳を目ざし日光浴をする	鳥取県	山下 節子
ひやかしを浴びて精出す英会話	高槻市	初代 正彦
誉め言葉浴びて女は脱皮する	枚方市	伊達 郁夫
ルーキーにきつい歓迎めった打ち	河内長野市	梶原 弘光
返り血を浴びるほどでもない相手	京都市	都倉 求芽
土砂降りを浴びてストレス流し切る	河内長野市	村上 直樹
ゼブラゾーンで日本の平和浴びている	松江市	石橋 芳山
千本ノック浴びて明日を掴み取る	堺市	澤井 敏治
我が家で入浴出来るありがたさ	倉吉市	山中 康子
喝采を浴びて取れない肩の凝り	大阪市	平井美智子
喝采を浴びて妖精舞うリンク	三田市	上垣キヨミ
脚光を浴びて世間が変わりだす	豊中市	水野 黒兎
叱声を浴びても奮起した昔	高槻市	片山かずお
非難浴びても崩さぬわたくしのかたち	明石市	桃谷 和郎
祝福を浴びて単身赴任です	姫路市	古川 奮水
浴びる程飲んで一人を自覚する	生駒市	飛永ふりこ
陽を浴びて前頭葉をふくらます	羽曳野市	徳山みつこ
シーベルト浴びた美田のすすり泣き	富田林市	山野 寿之
喝采を浴びた仮面が外せない	松山市	栗田 忠士
出る杭は罵声浴びても屈しない	大阪市	津守 柳伸
グリーンシャワー浴びて十歳若返る	松江市	藤井 寿代
はんやりとしていて返り血を浴びる	寝屋川市	富山ルイ子

花吹雪鬼も仏も浴びている

岡山県 田中 恵

花吹雪この国のこと子等のこと

登別市 小林 碧水

散り際も称賛浴びている桜

高槻市 島田千鶴子

栄転へ浴びる拍手にある嫉妬

茨木市 島田 誠一

初めての拍手を浴びて退職す

神戸市 奥澤洋次郎

称賛も罵声も浴びてきたいのち

松江市 相見 柳歩

川柳で脚光浴びる夢の中

堺市 大和 峯二

悔しくて浴びるほど飲むウーロン茶

奈良市 大久保眞澄

浴びるほど飲んで泣いても癒えぬ恋

鳥取市 加藤 茶人

浴びるほど飲んだドブクロク焼け野原

羽曳野市 三好 専平

浴びる程飲んで手にした診断書

八王子市 川名 洋子

浴びる程飲んでた父の胃半分

札幌市 小沢 淳

喝采を浴びた仮面が外せない

松山市 栗田 忠士

荒波を浴びて男の顔になる

東かがわ市 川崎ひかり

ボランテア感謝のシャワー浴びている

和歌山市 武本 碧

喝采を浴びて妖精舞うリンク

三田市 上垣キヨミ

脇役の私も浴びた花吹雪

藤井寺市 太田扶美代

千本ノック浴びて明日を掴み取る

堺市 澤井 敏治

愛燦燦浴びた子いじめなどしな

神戸市 松井 文香

秀 句

返り血を浴びる覚悟で向かい合う

弘前市 高瀬 霜石

びしょ濡れになって言葉の森を出る

佐賀県 真島久美子

九条のシャワーを浴びている平和

香芝市 大内 朝子

猫だまし罵声を浴びている土俵

松原市 森松まつお

シャワー浴び今日をリセットしてねむる

松山市 柳田かおる

CDで浴びるほど聞くひばり節

東かがわ市 川崎ひかり

スポットを浴びて歯車狂い出す

三田市 村田 博

喝采を浴びることなど無いピエロ

藤井寺市 鈴木いさお

夕陽浴び今日一日を感謝する

神戸市 能勢 利子

シャッター街無情の風を浴びている

尼崎市 藤井 宏造

心地よい方言浴びる里帰り

高槻市 富田 保子

朝日浴び昨日の事はやらにする

犬山市 金子美千代

来年も会えるでしょうか花吹雪

橿原市 居谷真理子

滝行と思えば軽い妻の愚痴

枚方市 寺川 弘一

陽を浴びたキャベツの自慢話聞く

岡山県 山縣のぶ子

スポットライトわたしを避けてばかりいる

弘前市 稲見 則彦

定退の拍手を浴びたときが華

大阪市 川端 一步

賞賛を浴びて花咲き散るさくら

鳥取県 竹信 照彦

式服の出番が来たぞ春ですな

三田市 堀 正和

火も水も浴びてどん底から抜ける

弘前市 福士 慕情

入浴剤今日は湯河原あす熱海

米子市 成田 雨奇

初登板連打を浴びるプロの道

箕面市 寺井 柳童

秀 句

デカンシヨからさくらへ酒のうまい町

篠山市 遠山 可住

光生と呼べる人あり五月晴

弘前市 高瀬 霜石

天下国家論じて浴びる大ジョッキ

奈良県 渡辺 富子

主幹・理事長の選任について

川 柳 塔 社

今年は主幹・理事長の改選年に当たります。

立候補者は下記の「主幹・理事長の選任に関する規則」に基づき
期間内に事務所（06-6779-3490）へ申し出て下さい。

総 務 部

主幹・理事長の選任に関する規則

- 1 主幹・理事長を選任するための投票は、すべての代表役員・執行役員と相談役および参与によって行う。ただし、会計監査は投票に参加せず、選挙を管理して投票結果を常任理事会に報告する。なお、主幹・理事長の選任に関する事務は総務部で担当する。
- 2 主幹・理事長を選任するための投票は2年ごとを原則とする。ただし立候補者が一人の場合には選挙は行わず無投票にて選任する。
- 3 主幹・理事長が退任（定年を含む）する場合において後任の立候補者がいない場合には、主幹、理事長、副主幹、副理事長が協議の上、次期候補者を推薦する。
- 4 複数の立候補者がある場合には選挙により決定することとし、最高得票者を当選者とする。
- 5 主幹・理事長の立候補資格は、同人歴10年以上の者とし、同人15名以上の推薦を得た者、または現任主幹、理事長、副主幹、副理事長協議の上推薦を得た者とする。
- 6 立候補の受付は、**7月1日から10日までに川柳塔社事務所総務部宛て**必着とし、投票は7月中に所定の用紙によって行う。
- 7 この規則は、平成23年7月7日から実施する。
この規則の改廃は、常任理事会の決定によらなければならない。

「振る」

稲見 則彦 選

(投句 231名)



振り向いて欲しくなかったバックシャン
庶民です大盤振る舞いいたしません
振り逃げでサードまで行く草野球
四番の一振りを待つ外野席
少年の夢は場外ホームラン
くよくよはよそう振り向くのもよそう
逃げ足の早い男が旗を振る
旗振った男が乗ってこない船
振り返った先に無念が干してある
やっぱりとあなたの背中遠くなる
手を振ってしあわせ感の別れ方
妻や子に見せぬ白旗振る姿
ありがとう踏み切り番の白い旗
反骨に頷く首はそぐわない
うなずくが心の中は首を振る
いい親でいようこぶしは見せてない
振り上げた拳が宙に浮いている
振りあげた父の拳に見た涙
見てみたい言い寄る女振る夢を
二次会はアカンと首を振る財布

神戸市 近藤 勝正
岡山県 紫 しめの
池田市 奥園 敏昭
札幌市 三浦 強一
唐津市 岩崎 實
今治市 渡邊伊津志
長岡京市 山田 葉子
茨木市 藤井 正雄
高槻市 原 洋志
三田市 上田ひとみ
弘前市 今 愁女
堺市 矢倉 五月
海南市 小谷 小雪
豊橋市 藤田 千休
大阪市 板東 倫子
大阪市 榎本日の出
札幌市 小沢 淳
大阪市 柴本ばつは
羽曳野市 永田 章司
堺市 澤井 敏治

横に振る首はつぶてを覚悟する
人生を棒に振らせたのはアナタ
頂点で未来を振った出来心
尻尾振るヒトの誘いに咲くサクラ
勘違い振った尻尾の置き所
も一人のわたしにいつも振る尻尾
相愛の夫婦は首を縦に振る
試験場振り分けられてからの運
担任が横に首振る志望校
青春を拉致され二年棒に振る
塩振って緩んだ箍を絞め直す
無限大になる応援旗の軌跡

佳句

首縦に振るまで四島あきらめぬ
ヒトケタが宴会芸に振る手旗
反対の旗を心の中で振る
尻尾は無いが尾骶骨が揺れている
客席を大海原にするタクト

人

振り出しに戻って明日を組立てる

地

振る方が辛いと自慢されている

天

キラキラネーム一生ルビがつきまとう

軸

体温計振って戻した日の記憶

松山市 栗田 忠士
鳥取市 福西 茶子
犬山市 関本かつ子
弘前市 吉川ひとし
和歌山市 福井 菜摘
青森県 松山 芳生
鳥取市 夏目 一粋
南あわじ市 萩原 狸月
大阪市 奥村 五月
河内長野市 黒岩 靖博
西予市 黒田 茂代
沖縄県 森山 文切
豊中市 水野 黒兎
唐津市 仁部 四郎
鳥取県 石谷美恵子
枚方市 寺川 弘一
橿原市 居谷真理子
和歌山市 武本 碧
佐賀県 真島久美子
弘前市 高瀬 霜石

「まぶしい」

(投句 229名)

北村 賢子 選



見て見ると羽搏きしきり燕の子
真白な地図がまぶしい子の門出
未熟さがまぶしい十代の若さ
正論は逆光の中構えてる
まぶしくていつも素通りするチャンス
漁火のまぶし過ぎると深海魚
社長さんまぶしく見えると作業服
病床へ成人の娘が晴れ姿
前歩く人もまぶしい花遍路
ごまかしの弁解まぶし妻の笑み
一生涯まぶしい人を見て習う
後ろめたいことがあるのか目を逸らす
火星から見ると地球も光る星
まぶしさに触れる幸せ日向ほこ
クチャクチャの顔だが産湯まぶしいね
誇らしくまぶしく写るマタニティ
寝過ぎた目に太陽が突き刺さる
猫一匹まぶしい値段付いている
イルミネーションまぶしい平和惚け
新幹線のまぶしさ北へぐんと延び

大阪市 柴本ばつは
和歌山市 福井 業摘
藤井寺市 太田扶美代
枚方市 寺井 弘一
四條畷市 吉岡 修
高槻市 初代 正彦
茨木市 藤井 正雄
三田市 北野 哲男
海南市 小谷 小雪
池田市 上山 堅坊
倉吉市 山中 康子
堺市 村上 玄也
シドニー 坂上のり子
大阪市 津村志華子
鳥取市 福西 茶子
大阪市 若本 安代
高槻市 片山かずお
橿原市 居谷真理子
八尾市 高杉 千歩
河内長野市 松岡 篤

好きだから無口になってしまします

太陽のまぶしさ心貧しい日

日の出見て脳も五体も始動する

晴れやかに原石並ぶ入社式

カタツムリ雲の切れ目をじっと待つ

まぶしい人少しも努力惜しまない

渋皮が剥けてまぶしい跳ね返り

左遷地に星のまぶしい夜がある

太陽に顔向け出来ぬ二日酔い

終章の海へのちをきらめかす

入学式たった一人の胸にバラ

ライトアップしなくていいよ金閣寺

佳

お陽さまと目の合った日よ逆上がり

夕焼けがやたら眩しい今日の恥

フィナーレの校舎まぶしい春日さす

白無垢の娘がまぶしくておしくなる

そこにあるすべてが君の味方です

人

狭い庭で自給自足の陽を弾く

地

ここだけのネジがまぶしい町工場

天

授乳する妻は菩薩の顔になる

軸

産卵終えしずかに鮭は横たわる

大阪市 江島谷勝弘

出雲市 竹治かし

箕面市 出口セツ子

堺市 梶原 弘光

河内長野市 高瀬 霜石

八幡市 今井万紗子

尼崎市 清水久美子

豊中市 水野 黒兎

三田市 福田 好文

奈良県 渡辺 富子

紀の川市 宇野 幹子

高槻市 原 洋志

大阪市 米澤 徹子

藤井寺市 高田美代子

大阪府 高木 道子

大阪市 大内 朝子

香芝市 上田ひとみ

三田市 上田ひとみ

和歌山市 松原 寿子

堺市 矢倉 五月

弘前市 福士 慕情

初歩教室

題 — 主役

山口 光久

太陽は無駄に光れり無人島

この句に三人の句主が表れたのです。剣花坊派の錚々たる方だったそうです。三人の句が全く一致した、一字も違わない句だったのです。これを暗合句と称しています。

暗合句に出くわすのは本当に希なことですが、兼題によつては範圍が狭められるから、しかたのない事かも知れません。

これに対して類句、同想句があります。発想や着想が似ている句です。

古里に飾る錦はまだ織れぬ

ふる里へ帰る錦はまだ織れず

美人の湯妻がなかなか戻らない

美人の湯妻はなかなか出てこない

錦の句は同じ句会で投句された句ですが、表現の仕方が違います。美人の句は別々の所で発表された句で、発表された時期にも三年ほどの隔たりがあります。

【添削】

原 伊勢志摩を主役の総理期待する 律子

伊勢志摩サミットは世界の注目の的。ホスト国として総理の手腕が試される。十分力を發揮して欲しいものです。

添 伊勢志摩で力を發揮して欲しい

原 学歴は高くなくても花形に (東)美智子

主役に求められるのは演技力だと思えます。演技力は学歴の高い低いにあまり関係はないと思われます。人気先行の花形スタ—はいますけど。

添 学歴は問わず演技の主役の座

原 血の涙はプリマドンナを光らせる (前)洋子

「血の涙」が気になるところです。血を吐くような努力を重ねて勝ち取ったプリマドンナの座だと思えます。

添 血を吐く努力プリマドンナを光らせる

原 夫を介護肩に主役が伸び掛かる 開子

添 今日でもまた夫の介護のしかかる

原 主婦の座を降りても口はまた主婦だ 風露

「主婦」「主婦」と句の中で二度使うのは良くありません。リフレインで繰り返すことはありますが、それは強調したい時です。この句の場合は不要です。

添 主婦の座を降りても口はまた達者

原 才能がないから主役ちと無理だ 秋星

添 才能がないから主役無理だろう

原 介護され認知の人が主役です こずえ

認知の人の病名は認知症ですが、介護する方は大変な仕事です。

添 認知症支えています縁の下

原 主役よりわき役目立つ私です (山)久子

添 主役より脇役いっつもしゃしゃり出る

原 新人生さくらさくらに君主役 澄子

添 新人生君が主役と応援歌

原 黙々と主役で磨くコンサート ミヨノ

上五「黙々と」が気になる表現です。

添 汗びっしょりタクト振ってるコンサート

原 ロングラン主役の花の色が褪せ (高)敬子

ロングランをやっているのですから、色が褪せるのも事実でしょうが、それでは少し寂しくはありませんか。

添 ロングラン主役の花がまだ凛と

原 主役より脇役させりやシャシャリ出る 喬

添 主役にはなれぬ脇役しゃしゃり出る

原 顔の皺どうどう主役誕生日 (大)安子

「どうどう主役」がちよっと気になります。皺がどうどうとしている様子は良く理解できませんが。

添 顔の皺主役演じる誕生日

原脇役が主役の出来を左右する

忠貞

添万年の幹事が逝つて会とする

添子

九条は平和の主役宝物

紀雄

脇役が主役の出来を左右するとは思われ
ません。脇役がその場を盛り上げる事はあ
るでしょうが。

添脇役が主役を支え盛り上げる

里子

TTP主役がかけてから騒ぎ
諦めず主役務める夢を追う

勝治

主役にはなれぬバセリも意地がある

義徳

添お互いに主役演じて悲無い

国和

父さんが主役でぶれぬ子が育ち
年金がつづく限りは主役の座

旅人

子が巣立ち妻が主役に返り咲く

ひとし

原人生の主役は自分いま悟る

国和

観光の主役であつた木が倒れ
逝くまでに座つてみたい主役の座

雄大

ベテランが若い主役をひきたてる

亜希子

原毎日の主役はいつも子供達

高弥生

妻主役助演男優古稀の今
主役にも脇にもなれぬ縁の下

清司

花束を抱いて主役の顔になる

雪菜

【少しの添削で佳くなる句】

原今日もまたテロのニュースが主役取る

和之

絵手紙の主役はさくらフォルテシモ

高道子

今日からは僕が主役と呟々の声

萩原 狸月

原キツチンの主役はわたし星一つ

治子

手作りりのハムが主役のオードブル

富恵子

呟々の声を上げた時から、主役として重

添キツチンの主役はわたし一つ星

勝正

人間を卒業する日主役です

天翔

宝がられ大切にされるでしょう。

添主役には一度もなれず老いてゆく

勝正

主役よりママの装い派手になる

温子

初めての主役結婚式でした 神野きこ

原しこかれて輝くのです主役でも

ゆかり

送別会主役一人が元氣無い

修平

生涯の中でたった一度の結婚という行事、
当人にとって感慨無量の面持ちでしょう。

添しこかれて輝くのです主役として

孔一

発表会孫が主役でご満悦

廣子

世なおしの主役は私音頭とる 黒目 英男

原我が人生主役を張れた時あるか

孔一

定年後妻を主役にして平和

忠士

世の中を少しでも良くしようとするれば、

添我が人生主役を張れた時もある

紀美恵

赤ちゃんは良いな主役にいつもなれ

敏昭

誰かが音頭を取らねばなりません。その主

添主役だと言われ張り切り足挫く

紀美恵

海老一本料理の主役として豪華

純子

役を私が買つて出る意気込みは立派。

原万年の幹事が逝つて会さびれ

まさる

ランドセル主役の席でかしこまる

山弘子

どう見ても主役の器ではないな

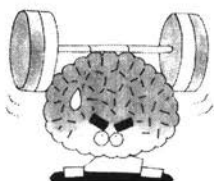
【私の句】



(投句222名)

最長で十連休と言われる今年のゴールデンウィーク、人も、季節も大きく動いています。

しかし、四月に起こった熊本の大震災で川柳家も多く被災されたこと、地震はまだまだ沈静化する様子はありません。



そんな中で、やはり川柳という文芸が支えになっているというお話を聞く度、身が引き締まる思いがするのです。

新緑の海へ吐き出す片頭痛

(評) 少々の片頭痛も、この新緑の中では消えてしまいうそう。まさに「吐き出す」という表現がピッタリ来ました。

豊中市 松尾美智代

ブロッコリーこんな力があつたんだ

(評) あの見るからに元気を貰えそうな

緑色のモコモコ、世間に知られている効果以外にも秘めた力がありそうです。

西宮市 足立 茂

鬼退治ひとつ余ったキビ団子

(評) うーん、この一個どうしますか。新しい家来を見つけるのに取っておくべきか、こっそり食べてしまおうべきか。

貝塚市 石田ひろ子

ヘッドフォン僕の宇宙を華にする

(評) 「華にする」がステキですね。自分ひとりの至福のひとときが思いっきり拡がっていくのがよく分かります。

弘前市 高森 一香

句読点改札口を出たばかり

(評) さあ、改札口を出て、どちらへ行くのかしら。センチメンスの旅は短め、それとも長めにしようか迷いますね。

和歌山市 古久保和子

オニギリハケツシテ嘘ハツキマセン

(評) 「嘘」以外はみなカタカナ表記。ひと昔前の教科書か、電報文のようでもあります。真摯さは満載されています。

枚方市 海老池 洋

過積載に耐える私も古タイヤ

(評) その内にどこからかグシャッと潰れそうな危うさと思われれます。でも、こんな状況で皆頑張っているのかも。

大阪市 若本 安代

晩学が右脳左脳を持ち上げる

(評) 右脳左脳を活発にしてくれるであ

ろう晩学、それを「持ち上げる」と具体化されたことで、より納得出来ました。

羽曳野市 中川ひろ介

日向ぼこ欠伸うつして去った猫

(評) 最近「猫ブーム」と言われていますが、この猫は由緒正しい(?)ノラ猫のよう。こののんびり感がいいですね。

豊中市 藤井 則彦

振り上げた拳もどこへ下ろそうか

(評) 本当にそうですよね。拳振り上げるより、その下ろし方が問題、あとあと響いてくることもありますもの。

大洲市 花岡 順子

踏ん張ってみるか人生一度だけ

長野県 丸山 健三

ピノキオの気持になつて考える

八王子市 川名 洋子

じゃんけんで貧乏神に負けました

唐津市 仁部 四郎

汗ですかあと一滴は出せますよ

大阪市 宇都満知子

さあお立ち合い大道芸が始まるよ

米子市 八木 千代

ギネスには及ばぬまでも僕なりに

八尾市 前田 紀雄

サミットで音頭とります汗もかく

明石市 梶谷 和郎

普天間を背負い日本はどこへゆく

松江市 石橋 芳山

大阪府 笠嶋 惠美
栄養と休養忘れたらあかん

香芝市

大内 朝子

身の程を知らぬ背伸びはすくばしやる

西予市

黒田 茂代

何くその気力は今も持つている

大阪府

野田 栄呼

全身に切磋琢磨の陽を浴びる

東京都

川本真理子

下ろし方考えてから上げましょう

紀の川市

辻内 次根

血圧が高めで直ぐに燃える質

大阪府

石橋 直子

総活躍この頃妻はジム通い

羽曳野市

徳山みつこ

ご覧あれ汗で稼いだ金塊だ

大阪府

大西 晴雄

夏祭りこれで神輿が担げます

和歌山市

武本 碧

今更に右脳左脳が駄々こねる

三田市

堀 正和

ゆつくりと呑んではおれぬガード下

大阪府

米澤 俣子

バタフライ上手に泳ぐおばあさん

河内長野市

穂口 正子

負荷かけて更なるジャンプ今に見ろ

三原市

鴨田 昭紀

薄給の割りに重すぎる責任

笠岡市

藤井 智史

甘党の期待背負っているおはぎ

倉吉市 山中 康子
何か起きても怖くない肝座る

弘前市

岡本 花匠

昭和の日唄び未来の糧とする

大阪府

原田すみ子

発想を変えよ逆立ちでもしよう

鳥取市

夏目 一粋

小夜更けてヒューヒューと切なさぞ

神戸市

山崎 武彦

一徹で愚直な父よありがたう

弘前市

高瀬 霜石

荒くれ者は純情だから困ります

富田林市

片岡智恵子

遊びから水の深さを知ってゆく

鳥取市

倉益 一瑤

ここ一番その負けん気が邪魔になる

長岡京市

山田 葉子

定年だ軌道はずれて転がるぞ

鳥取市

西川 和子

山陰に新幹線を持って行く

橿原市

居谷真理子

あの苦勞二度と御免で懐かしい

姫路市

古川 奮水

おきつねさん峠の茶屋に車止め

豊中市

水野 黒兎

世界遺産おにぎりだって和食だぞ

香芝市

山下 純子

大仏に頭のカール負けません

鳥取市

春木圭一郎

何事も頭ごなしに決めないで

河内長野市 谷 久美子
粗大ゴミ山に捨てたの僕じゃない

塩竈市

木田比呂朗

デパートへ妻のお供もキツくなる

大阪市

津守 柳伸

張りぼてのパーペル揚げて写メールに

横浜市

川島 良子

修行僧これが最後の砦です

大阪市

平嶋美智子

新しい脳の体操見つけたわ

弘前市

吉川ひとし

税金で穴埋めされた赤字線

大阪府

高木 道子

なりやまぬ拍子に挑む安木節

河内長野市

篠塚 克三

無理難題次から次で脳シヨート

枚方市

丹後屋 肇

可能性とことんたぐり寄せている

和歌山市

楠見 章子

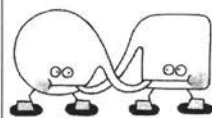
名も知らぬ星から届く果たし状

松山市

神野きつこ

人生を支えています歌謡曲

8月号発表 (6月15日締切)



(平本 勝彦 画)

柳箋に2句

川柳塔鑑賞

同人吟 小沢 淳

— 5月号から

これは面白い、開かないから頼まれる。

力んでもだめ、蓋との呼吸が合わぬのか。

格安はどこかに無理がひそんでる

山室 光弘

人様の句の観賞は任が重い、しかし、三月はまだ雪の中ふるえています。

折角の機会を与えて頂き有難い。

晩学の亡母と同じ咳が出る

江島谷 勝弘

安土 理恵

軽い表現で軽い句が効いた。

出張があるとおかすがひとつ減る

藤田 武人

このところやたら咳き込み、母の歳を越えた事を実感したのでしょうか。

しばらくは病人という身分です

木本 朱夏

亭主がいらないとお説の通り、然し現代は男も格落ちこの時とばかり豪華に。

戦争が風化して来た良い時代

松尾 柳右子

闘病3句、鬼の霍乱か。作者は余人に代え難い身分を持ち、皆が復帰を待つ。

持ち込みは遠慮下さい酒ビール

早川 遡行

戦後七十年、戦後世代が多くなつた。平和ボケも進む、どう安全を守るか。

風紋という無作為の美しさ

升成 好

店の看板通りの文言ではあるが、「ぐち涙」になると面白くなりまっせ。

シャボン玉が生まれる三月になると

牧野 芳光

自然の造形には息をのむ、最近のスカイツリー、ハルカスの人工美も及ばぬ。

お願いと言われて力むジャムの蓋

伏見 雅明

三月の息使い。私は釧路の鳥取村生れ、かの「新興川柳論」の田中五呂八と同郷、

これは面白い、開かないから頼まれる。

力んでもだめ、蓋との呼吸が合わぬのか。

格安はどこかに無理がひそんでる

山室 光弘

「安物買いの銭失い」と諺にありますが、

格安のバスに注意。諺変じて川柳に。

猫だつて大きな顔の時が来た

野下 之男

猫好きが多くなつた。全国で一千万匹。

「ことばの国の猫たち」の猫川柳までも。

この星の汚点に人も含まれる

吉村 久仁雄

この星とは地球でしょうか。地球の病

の元凶は人間。次世代は人の世にあらず。

次の世で出逢えたときの糸じるし

鴨谷 瑠美子

この世では無二の仲だった、糸じるし

つけて待つ人がある。これが川柳ですね。

バラよりも長生きしそふカスミ草

能勢 利子

引き立て役が長命とは、作者の見事な穿ちに恐れ入りました。

汗かくと貧乏神が逃げて行く

福田好文

あれこれ考えても最後は収まるとこに収まる。人間とはこんなものと教わる。

母さんがずっと待ってた汽車の音

山田耕治

貧乏神は汗に弱いのか、私も汗のかき方が足りず、快心の一句はいつの事やら。

サスペンス防犯カメラ主役です

待っていたのは誰でしょうか、想像をかき立てる一句となりました。

潮汁どどんと女笑うとき

浅田隆樹

新しい私のために買うノート

事件事故には完全に主役、スポーツの審判の判定役に欠かせない。

古びた辞書で恋と言う字を引く独り

居谷真理子

ナポリタンでも食べるかと生き返る

津田シルク

居谷真理子

ナポリタンでも食べるかと生き返る

川柳を楽しませてくれる作者におまけ。

川本真理子

想い出にふける一時でしょうか、古びた辞書と独りが哀愁の一句にしました。

捨てたものじゃない私を探す子等

スパゲッティのナポリタンでしょうか、この句のでもが気になりました。

お福分け何ときれない言葉聞く

堀富美子

この句のでもが気になりました。

富山ルイ子

必要とされている内が花。こうは中々行かない、それでこの句が生きる。

一十一を今日も計算しています

おすそ分けの事なのですね。人生の終章に川柳のお福分けをしたいもの。

叩かれる覚悟謙虚な点でいる

岩本笑子

沢山の作品に出合い学ばせて頂いた。

作者は世間を泳ぐ術を覚え、叩く点で畏まってみる強かさ。

一十一を憶け防止と解釈してみました。今日は何日何曜日とは介護施設にある言葉。

格調高く洒脱な句風は、長年の伝統で培われたものと思います。しかし、二番煎じや骨のないものになり易く、特に孫の句の多いのも時流でしょうか。自戒自戒。

小谷小雪

泣いたフリいつもあなたが負けたフリ

川柳の砂漠化が叫ばれて久しくなりました。どこも老人クラブ化している現状に愁いているのも事実です。川柳の定義、ルーツ、文芸志向の骨格もあいまい。

スマホべらべら君には心見えますか

斉尾くにこ

やる事は多く面白い時代です。謝謝。

大事なこと、もうベテランの域。

軽い句ながらあなたが負けたふりに、一本やられました。非凡非凡。

無人販売の野菜拗ねたり笑ったり

松山芳生

無人販売の野菜拗ねたり笑ったり

川柳の砂漠化が叫ばれて久しくなりました。どこも老人クラブ化している現状に愁いているのも事実です。川柳の定義、ルーツ、文芸志向の骨格もあいまい。

稲見則彦

棚には恐らく定形外が並ぶ、曲りきゅうりも燥いでいます。

自問自答やつぱり楽な方をとる

古久保和子

やる事は多く面白い時代です。謝謝。

大事なこと、もうベテランの域。

棚には恐らく定形外が並ぶ、曲りきゅうりも燥いでいます。

やる事は多く面白い時代です。謝謝。

自問自答やつぱり楽な方をとる

棚には恐らく定形外が並ぶ、曲りきゅうりも燥いでいます。

やる事は多く面白い時代です。謝謝。

稲見則彦

うりも燥いでいます。

やる事は多く面白い時代です。謝謝。

水煙抄鑑賞

—5月号から

関本 かつ子

母の手をスルリと抜けるランドセル

中山 春代

新人生でしょうか。始めの頃は顔も緊張。しつかり手を握っていたのが、新しい友達を見つけたら直ぐに駆け出して。ママも一安心ですね。

這いだした孫には這つてあとを追つ

岸田 武

かわいくて仕方ない様子ですね。何しろ3頭身大になるのですから。高度成長の最中、忙しくて自分の子には出来なかったことを孫にはしてやる。

飛び出した星が新天地で光る

鴨田 昭紀

そうですね。この春には転勤や新入社員、さらに転職で心機一転、色々な人がいるはずです。新天地で星のように思い切り光つてはいいですね。

宝石にそっぽ向かれる年となり

神野 千恵子

同感ですね。宝石とまでいかなかったもケースのアクセサリーが色、形、大きさまでどうもしつくり来ない。結婚指輪のダイヤも指に合わなくなってお蔵入り。

消しゴムが引つ張りだこの永田町

藤田 千休

裏金や不倫等、週刊誌にすっぱ抜かれて大慌て。消しても消しても切りがない。本当にこの国の未来を託する人が現れて欲しいものです。

前の晩鍋だと次の日はおじや

高杉 力

我が家も高杉家も同じなんです。栄養満点ですし、主婦も案外お昼のメニューには苦勞しますので大助かりです。ときには貝のカラが入っていたりして。

いい夢を見るため高いパジャマ買う

梅里 南夫

長いこと着たパジャマもくたびれ、ゴムも伸びちゃって。値は値だけあり、肌触りの良いパジャマできつといい夢。考える人のポーズで痛み耐え

中島 栄子

成程そうですね。しばらくの間はこの姿勢。痛いのを我慢している面白い見付に脱帽です。八十路になられたそうで、くれぐれもお気を付けて。

九転び十起きなんか序の口よ

太田 としお

長い年月には色々なことがあります。振り返って数えてみると、九転びどころか次に困難があった。そしてそれを乗り越えて来た自負があるのです。

すみませんとありがとつを持ち歩く

巖田 かず枝

そうですね。席を譲られたり、階段で荷物を持って下さったり、知らず知らずの内に人様のお世話になることが増えて来ました。感謝の気持ちだけは忘れずに。

豆まきはひ孫九人で鬼払い

山口 久子

何とお幸せなことでしょう。卒寿を迎えられた久子さん。どの句にも感謝の言葉が満ち溢れていますね。

寂しいねと聞かえぬ労働歌

小林 碧水

富裕層との格差、そして正社員になれぬ若者の未来。問題は山積みのまま。



「不愉快！」を川柳にぶつける(2)

本欄No.43は「不愉快を川柳にぶつける」でしたが、「代弁して貰ったようでおもしろかった!」というお便りもいただき、好評だったようですので今回はその続きです。

誰しも、気の合う人に囲まれて過ごせたら幸ですが、なかなか理想通りにはゆきません。周囲を見渡しても、極悪人やテロリストなどは存在せず、どの人も善良な市民ですから、ラッキーな環境であるのは間違いないかもしれません。しかし、お互いが善良であつても、「性格が合わない」とか「気が合わない」だけで不愉快な日々になってしまうことがあります。

氣に入らん人は笑顔も氣に入らん
氣にいらぬ話を咳で止めさせる

無視されて負けるもんかと無視をする

苦勞した人だなケチで意地悪い

一目を置き尊敬はしていない

氣が合わない人などには近づかないように注意しておれ

ばこころ穏やかに過ごせるのですが、ご近所や趣味のサークルなど、どうしても避けられない場合は大変です。

笑顔まで氣に入らないのはかなりの重症。合図の「咳」で

止めてくれたらいいのですが「無視」されるとショック。無

視には無視で、これまた重症になってしまいます。

稀に「ケチで意地悪い」と思える人もいます。また、博識

な人や一言居士など一目を置かざるを得ない人もいますが、

尊敬できないのはやはり氣が合わない所為でしょうか。

古稀すぎて負けず嫌いな未熟者

失敗談よくよく聞けば自慢なり

かなりのことおっしゃいますか通ですか

ゆつくりと喋っておくれ日は長い

わがままな人は我儘気づかない

氣の合わない人に修行を積まされる

句会や大会などでも「抜けた」「抜けない」ばかりを声高に話す人が稀にいます。こちらが好成绩のときはあまり氣になりませんが散々なときは耳障りです。このような「負けず嫌い」も、現役のときは前進するパワーになりますが、高齢にもなれば「未熟者」と言われても仕方ありません。

他人の「失敗談」は優越感をくすぐってくれるので、身を乗り出して聞いていたら、オチは自慢だったということもしばしば。「ええかつこしい」「自慢しい」の常套手段?

わがままな人は「氣持ちを汲めない」「氣が回らない」ので、自分の我儘も自覚していません。このような人と喧嘩せずに付き合うのも「人格を磨くための修行」です。

虫好かぬ相手もそれは知っている

打つ手ないほどに壊れた仲となる

どちらかが死ぬまで続くいがみあい

苦手意識というものは「悟られまい」としても自然に伝わって、相手も「虫が好かない」と思っているものです。

その程度ならばお互いに我慢して、「気づかない振り」で遣り過ごせるのですが、「打つ手ないほど壊れた仲」になつてしまふと処置なし。いがみあいが「死ぬまで続く」のは鬱陶しいことですが、ボケ防止だと思つて我慢しましょう。

大和 峯二

村上 玄也

江島谷勝弘

竹山千賀子

門村 幸子

横山きのこ

『麻生路郎読本』余滴 (35)

「矢車」と路郎作品 ①

稗原道夫

明治時代の新川柳運動の影響を受けた川柳誌の一つに「新川柳」という雑誌がある。「新川柳」について、関水華は「川柳総合事典」で、次のようにまとめている。

〈「新川柳」明治四一年一月一日創刊。阪井久良岐、井上剣花坊らによる新川柳運動の影響を受けて発刊。塩川喜代志編集。発行所・横浜市中村町四七〇岩崎半魔方、横浜川柳社（前年一月創立）。*1 同人は一軸、一栄、六橘、葱花、奈良武、村主、幻怪坊、三郎坊、喜代志、半魔で、古句の研究と、流派・傾向を超えた創作を標榜した。六号より今井卯木、三〇号より柴田五万石、安斎一安が参加、*2 四三年一月号から〈短詩壇〉を設けたことから新傾向化、自由律作品が多くなり、また柳俳無差別を唱える安斎一安が中心となった。その後大正四年

一月、八五号から一安、とゞ安らを先鋒に「短詩」と改称、川柳界との交渉を断つたが、横浜の川柳がユニークと評される源流をなす柳誌として注目される。〉

*1 「新川柳」五〇号（明治45年2月）

の「川柳社同人年表」を参考に、同人の入退社を記録しておく。明治40年1月、横浜に川柳社を創立した時の同人は、幻怪坊、半魔、奈良武、六橘、喜代志の五名。41年1月、「新川柳」発刊時の同人は、ここに挙がっている十名でまちがいない。「六号より今井卯木」とあるが、卯木は同人ではなく社友であった。一三号（明治42年1月）に、社友として今井卯木の名が見える。三〇号から「柴田五万石、安斎一安が参加」とあるが、五万石は二五号（43年1月）入社で、一安は一〇号（41年10月）入社。*2 短詩壇は、三五号（明治44年11月号）からで、藤村青明が「場末の秋」の題で〈煙草屋の娘の呉れし西洋マツチ〉（蟲の聲ひとりといふがなほ悲し）〈秋を飾る場末の劇場の繪看板〉（憂れたけ（げ）の誤り）に見上る

瓦斯と君がまみ）（獨り湯にひたり沁沁秋を知り）（電車降る衣裳が妻の眼に止まり）（蟲の音のとぎれとぎれて机の灯）（新開の町の朝寒鶏か（「が」の誤り）行く）を發表。

「新川柳」創刊号の「發刊の辞」を一部抜粋しておく。〈一は以て初代川柳翁の高徳に酬い、一は以て社會の趣味の向上を計らんことを期す、茲を以て吾等の眼中更に新派舊派の別を視ず況して何社何派の異を認めんや、要は唯々眞面目に川柳を鼓吹するにあり豈他あらんや是故に題して「新川柳」と云へども所謂舊派川柳に對する新派川柳の意にあらずして、古川柳の基礎の上に更に新時代の要求に應ずるに足るの川柳を建設せんとの謂なり〉

「新川柳」に掲載された路郎に関する記事や作品を記録しておく。

路郎の書簡が初めて掲載されたのは、四六号（明治44年10月）の「各地通信」欄である。次の書簡は、路郎が東上する際に横浜に寄ったときの札状である。

（昨夜は大變に騒がして誠にお氣の毒で

した、殊に御厄介になりまして厚く御禮申します、東京へおこしのせつはよつて下さい。荷十氏の案内で表記へ落つきました八月十八日夜 東京下谷區坂町十一「高野方」

この書簡について、筆者は、『麻生路郎読本』、そして「余滴」(26)にも、「17日夜に、「新川柳」発行人であった横浜在住の塩川喜代志宅に世話になったことがうかがえる」と記したが、編集兼発行人であった喜代志宅に世話になったとしたのは誤りだったことが判明した。

「新川柳」四六号「各地通信」に、塩川喜代志の次の書簡が掲載されていることを見落としていたのである。

〈明朝群馬縣下へ向ふ突然なれ共パンの爲め是非なき次第今朝御伺ひする心組なりしも朝よりの雨にて見合せたり九月號の編輯は五萬石兄に依頼せり短詩社の麻生氏來社せられし由一寸逢つても見たかりし(第一信)〉

明日と云ふ日の面白く怖ろしく

八月二十日 西戸部六七八

喜代志又の名無菜八

喜代志の書簡中の「短詩社の麻生氏來社せられし由一寸逢つても見たかりし」に對

して、「新川柳」四七号(明治44年11月)「各地通信」で、路郎は次のように嘯みついている。書簡中の「前略」「中略」「下略」は、掲載時のままである。

「……前略……私は商業教育をうけた身で、無御座候哉御伺申上候だの被下度願上候早々頓首だの書くのが大嫌いなのでつい失禮だと思つて何處へも手紙と云ふものを出さない。其の代り出鱈目の手紙なら一日三通より下つた事はない、その一通も細字で二間の長さは大丈夫だ。私の手紙を読む人は誰れでも*1大石内藏之助を氣取る位のものだ。……中略……」

紋付に混じる縞物みじめなり、これは故六厘坊君の句だと思ふが私はさう思はない、負惜しみでも何でもないんだ。同じ通信欄に喜代志又の名無菜八といふ人ありけりだね。この人曰く、大阪の短詩社の麻生氏來社せられし由一寸逢つても見たかりし、と。私は失敬なことをかく人だと思つてゐる。一寸逢つても見たかりし、甚だ面白いでは御座らぬか*2ラツパ節のちぎれでもなさ相だ、喜代志といふ人は昔から句のうまはおはさぬ方だ、其の顔の古いことは横濱隨一かも知れぬが又の名無菜八などと言ふ

てよろこんでゐるやうでは久良岐氏の言葉を無斷でかりては濟まないが未だお若い／＼と叫び申候だ。私も一寸候を使つて見た。最も候の下へだをつけるのは小生の專賣かも知れぬ。私はあんな失敬な言を吐く人には一寸遇つて貰ひ度くない。私は見世物でないことを此處に告白しておく。

……下略

明治四十四年十月五日夕 麻生路郎

*1「仮名手本忠臣蔵」七段目で、大石内藏助(芝居では大星由良之助)が読む塩冶判官の奥方・顔世御前からの手紙のこと。巻物の長い手紙で、読み進めると自然と下に垂れていく。
*2 ラツパ節は、日露戦争後流行した歌。ちぎれは、断片・切れ端。

さて、路郎が八月一七日の夜、厄介になったのは、誰のところか。東上する際に、訪問することを路郎は連絡していたはずなので、9月号の編集を急に任された柴田五万石宅ではない。喜代志の書簡に、「短詩社の麻生氏來社(傍点筆者)せられし」とあるので、発行所であった岩崎半魔宅だと考えられる。(次回に続く)

本社 五月句会

◇五月六日(金) 午後一時
アウイーナ 大阪

五月句会は、雨が降りしきる中、百三十六名(投句者六名)の参加で開催。初出席は、生駒市から笹百合子さん、神戸市から上田和宏さん・細川花門さんの三名。句会に先立ち、熊本地震の救援募金が行われ三万五千円の浄財が集まった。

今月のお話は、江島谷勝弘さん、題は「塔誌ができるまで」。六大家を継ぐ柳誌と関西の川柳塔系の柳誌の動向が紹介され、「塔誌ができるまで」の工程が具体的に述べられた。川柳塔誌は宝物として、毎月五千句と連載物も他柳誌にないものであり、三宅保州さんの「川柳しませんか」、新家完司さんの「川柳の理論と実践」も川柳界のベストセラーであり、川柳界の宝物であると強調され、最後に宝物いっぱい川柳塔誌と同人を増やして欲しいと締め括られた。

月間賞は谷口 義さん(大阪市)
(司会)蕉子・真理子(協理)扶美代・寿之
(受付)久仁雄・志津子(清記)憲彦

席題「帽子」 森松 まつお 選

春帽子被ると高峰三枝子です
毛が減った帽子がいるようになった
帽子好き理由はお祭りの通り
私の帽子の訳は聞かないで
帽子など要らん髪には自信あり
黒髪はらり麦わら帽が汗を拭く
赤茶けた麦藁帽が似合う野良
麦藁帽かぶり医者のはしこする
おにやんま麦藁帽が追いかける
枕元に防災頭巾置いて寝る
震災地ただ黙々とヘルメット
手品師のシルクハットは曲者だ
帽子から鳩が駄々捏ね出て来ない
手品師は帽子にそつと餌をやる
私の帽子にGPSがつけられる
金田一の帽子匂ってくるみたい
お古でも私も似合う夏帽子
黒帽子ひらりと魔女になりました
挨拶に帽子ぬぐのが好ましい
やつと自由手にした父のベレー帽
この帽子かぶると雨になるゴルフ
非正規飛ばされてゆく作業帽
角隠し何と優しい帽子です
つば広の帽子さらった春風
夕焼けを担いで帰る野球帽

保子	宣子	黒兎	五月	直樹	大子	廣子	勝弘	かずお	正和	昌紀	宏造	希久子	弘委智	いさお	正彦	哲夫	完司	一步	朝子	理恵						
ああ父は戦闘帽が形見です	バナナ帽父の白髪によく似合う	チャップリンが山高帽に秘す涙	断捨離が出来ぬハネムーンの帽子	駅長のタマは帽子で決めポーズ	簪の日は帽子目深に人を選び	新聞で折った兜がデカ過ぎる	6Bはキャップをはめて使い切る	装いの帽子が目立つ五頭身	コンビニじゃ脱がねばならぬ目出し帽	巨人の帽子隠れて被るのは誰だ	阪神電車Tの帽子が吠えまくる	遊びごころあふれる連休の帽子	佳	白勝てや赤負けるなど帽子とり	チャップリンの山高帽にみる愁い	古いけど妻と帽子はよう棄てぬ	保母の目は足りぬ帽子に血が走る	としよりは帽子を被れ水を飲め	人	勲章のない制帽で四十年	地	未来図へ無限を包むベビー帽	天	闘病の友に帽子を編んでいる	軸	ベテランの駅員味のある帽子

兼題「胸」 久保 眞澄 選

胸襟を開けばみんな逃げました
独裁者の胸三寸にある命
ふくよかな胸がこぼれるルノワール
その昔山も谷間もあつた胸
引力に逆らい上げて寄せる胸
肩までは入るが胸が邪魔をする
見ての通りわたしの胸は小振りです
君が来て小鳥のように揺れる胸
すうすうと胸をかすめて行く不安
役員になったと妻が胸を張る
胸奥のマグマは若き日の挫折
すこし胸張ろう若葉の遊歩道
反骨の気概胸三寸に持つ
踊る胸ブランコ空を蹴り上げる
胸めがけ直球投げるラブレター
脳にある心と胸にあるところ
任しとけと胸を叩けば骨にヒビ
やさしい手やさしい眼胸さわぐ
監視カメラ目にした途端胸を張る
胸元を広げて恋の風入れる
下校時は胸の名札を裏がえす
胸もとにこれ見よがしな赤い羽根
胸の内明かさず他人の腹探る
胸中を這い廻る恋ごころ

楓 楽 誠 一 則 彦 美津子 蕉 子 瑠 美子 瑠 美子 朱 夏 廣 子 雅 枝 黒 兎 富美子 かずお とーな すみ子 真理子 茂 弘委智 文 代 希久子 満知子 雅 明 玄 也 肇

若者の胸に問いたい選挙戦
胸いっぱいきれいな空気吸える国
言い勝った胸に空しい風が抜け
空っぽの胸に潤いくれた愛
病む犬の胸に確かな鼓動聞く
言つたとして詮無い事を胸に置く
聞き上手に乗せられ明かす胸のうち
クマモンは元氣かと孫胸痛め
食べ溢し胸にばつんと染み汚れ
早朝のベルにもしやの胸騒ぎ
胸中を思うと声は掛けられぬ
聖書抱くその手で銃を持つ刹那
いつだって胸は太平洋である

キヨミ 修 好 舞 夢 ひろ介 美智子 英 旺 直 樹 妙 子 武 臣 満 作 武 彦 完 司 ダン吉 和 夫 すみ子 正 彦 楓 楽 (奥)五 月 敏 治 いさお

不意に来る痛みは又も休診日
金欠はじわじわ腰痛は不意に
あるあるある出会い頭という不運
不意突いてお墓は別と言うワイフ
不意に来た客へは粗茶で出迎える
別れ際不意を装う目が本氣
準備などせずとも迎え来てくれる
不意打ちのテストに弱い一夜漬け
不意の告白あなたの謎がまだ解けぬ
安全な歩道が不意にまさかの場
不意に来た客にはビール柿のタネ
良い話不意に涙が湧いてくる
不意に来た方には驚いてあげる
日曜日不意に出掛けた夫のなぞ
容赦なく医者が宣告する禁酒
一枚のカルテが僕の不意をつく
無口な父不意に平手がとんでくる
年金は不意の出費に知らん顔
不意に手を掴みそのまま五十年
素っぱんぱんチャイムが鳴った風呂上り
ひらめいた一句挨拶して忘れ
酒場から寝ている俺に出て来いや
不意に備え口紅だけは忘れない
連休の初日に不意の歯の痛み

茂 選 キヨミ 富美子 美津子 淳 司 いさお ともこ たもつ 美智代 (柿)和 夫 妙 子 一 歩 かずお 見 清 千枝子 正 和 憲 彦 紀 華 篤 直 樹 寿 之 千 代 狸 月 章 子 黒 兎

兼題「不意に」 足立

三日前一緒に飲んでいた遺影

土筆摘む不意にふるさと近くなる

不意討ちでなければ勝機見出せぬ

不意に来るチャンスときまぎして逃がす

鈍な男で手土産なしで不意に来る

マドンナの不意のメールに胸躍る

絶好調不意にあした怖くなる

不意の雨相合傘で仲直り

宝くじ当たって不意にけちになる

不意に雨お蔭で僕ら結ばれた

弾丸が不意に飛びだす妻の口

突然の告白受けて舞い上がる

病院の待合室で元氣かい

佳

あああ初めてなのに不意のキス

淑女から不意に飛び出す河内弁

ガム食べて不意に気がつく総入歯

ぼっくりと逝って羨む通夜の酒

カレンダーめくる生きるぞと思う

人

妻が不意に敬語で喋り出す恐怖

地

戒名を決めると急に逝きはった

天

不意に来てすぐに飛び去るあぶく銭

軸

飲む時だけ不意に顔出すずる休み

兼題 「枯れる」 岩佐 ダン吉 選

街路樹を枯らして歩く愛大家

年とると枯れるものだと思つてた

よい具合に枯れてきたなあクラス会

被爆地の怒り枯れさすことはない

たえ声枯れても叫ぶ核はダメ

三食がうまい枯れるの止めにする

老人を枯れぬ程度に絞る国

笑わねば心たちまち枯れてゆく

枯れて尚新芽の糧になる気概

彬の碑枯らしてならぬ百日紅

瘦せるし枯れるし面倒かけるわね

枯れてきたと言われるまでの汗を積む

枯れません不戦の思い脈脈と

やがて来る枯れる日のため善意積む

枯れさせてはならぬ九条の誇り

一合の米研ぐ枯れた音がする

幸せが枯れないように水をやる

明日枯れるとDNAに書いてある

仏壇の花を枯らしてルージュ引く

焼跡派枯れても戦ゆるさな

ひまわりの枯れた姿を見ておこう

枯れた芸しじみさせる笑わせる

フクシマの自然を枯らす原発禍

咲き急ぐことはないのだ枯れるまで

キヨミ

狸月

はこべ

隆彦

楓 楽

日の出

昌 紀

楓 楽

(矢)五

満 作

眞 澄

ひろ子

満知子

俣 子

紀 雄

唯 教

洋

昌 紀

誠 一

(楠)和夫

扶美代

和 宏

いさお

哲 子

老いたとて脳と氣力は枯らさない

名人の枯れた芸だと言うてはる

枯れたふりして覗きみる裏のウラ

枯れるのは一億年も核のゴミ

枯れたと思うが酒も恋も好き

立ち枯れてあの日話しているドーム

達筆の読みが解らぬ枯れた文字

枯れぬようネジ巻き直すまだ八十

身体は枯れても氣持騒いでる

脳が錆び知恵が枯れても指を折る

まだ未熟だから枯れてはおられない

老人会枯木の山にさせられる

佳

筋トレも脳トレもして枯れてゆく

枯れ過ぎて足腰ばきつ音がする

枯れぬようキョウイクとこ有りますか

惜しまれて一本松の尊厳死

プライドを捨てると私が枯れる

人

ここという時に枯れ木の咳払い

枯れはった丸なりはったと誓めてる気

地

人情も枯れる格差のある街に

天

まだやれる枯れたなどとは思わない

隆彦

まつお

直 樹

満知子

修

とーな

寿之

日の出

美智子

光 久

好

宏 造

柳 弘

妙 子

篤

保 州

美智代

敏 治

(矢)五

月

朱 夏

夏

兼題「きりり」 笹倉 良一 選

帯きりり締めて女のいくさ立ち
 端整な顔ふにやふにやにしてあげる
 言うべき日ベルトきつめに絞めて行く
 紫の袴も凜凜しツカジエンヌ
 きりりつと締めて緩めて花野まで
 女にも覚悟があつて帯きりり
 させていただくと思えば背筋伸び
 文末はきりりと結ぶラブレター
 きりり鉢巻鮪の競りは日本一
 さあ出番きりりと紅を引き直す
 豆紋り祭囃子が良く似合う
 母になる決意目元に口元に
 鉢巻をきりり明日の風を読む
 眉キリリこは女の正念場
 盛り塩に店の気合いが見てとれる
 詰め襟の彼も戦地に散りました
 横顔きりりまだ納得はしてません
 過保護でした肥料に水をやり過ぎて
 北新地闘う眉の抜き衣紋
 葉桜をきりりと描く空の青
 緞帳が役者の背筋ピンとさす
 遺産分けうちは一歩も引かへんで
 縄文杉のきりりきりりと史を刻む
 解けないほどきたいのに赤い糸

玄也 宏造 真理子 一徳 万紗子 富美子 誠一 希久子 たもつ 扶美代 紀雄 とーな 紀乃 理恵 保州 保州 千代美 シマ子 真理子 久仁雄 博 花門 正彦 とーな

鉢巻で新鮮を売る鯛を売る

帯きりり女のオーラ満ち満ちて

ネクタイを絞めてポーズの七五三

はいチーズに一人きりりの天邪鬼

笑顔よりきりりとなさい女子社員

三面の阿修羅きりりと世を睨む

葉桜もキリリと空に立ち向かう

悔いなきよう男をきりり咲かせます

貧しくともきりりとした昭和っ子

のんびりにキリリ加える結跏趺坐

無になれと石はきりりと教え説く

ポリシーは揺るがぬきりり立つ大地

佳

きりりとは行かず余生の水溜り

正直な鏡に勝負するキリリ

しめやかな声だが葬儀屋のきりり

鉢巻きをきりり睡魔と原稿紙

着流しで高倉健になつてみる

人

ひとりだが上げた手迷うことはない

地

決断の眉大腿に風を切る

天

のびのびと時にきりりと生きよ子よ

軸

スバルタの直線が来る母性愛

茂

堅坊

隆彦

則彦

眞澄

誠一

廣子

富子

英旺

完司

弥生

セツ子

富美子

蕉子

五月

克己

正和

正和

ダン吉

柁子

柁子

敏治

敏治

兼題「言葉」

小島 蘭幸 選

温かい言葉が好きなの耳
 いつだって言葉足りないのは夫
 がんばれの声掛けられて辛くなる
 ありがたのぬくみ被災地を巡る
 その笑顔あれば言葉は不要です
 公園の風と小鳥の合言葉
 カタカナ語ばかりですぬ薬箱
 選挙戦飾る言葉が降ってくる
 名優の芸に無言という言葉
 雨ですぬ女は謎をかけてくる
 英語より大語のほうがよく解る
 国際婚夫婦喧嘩は母国語で
 笑うまで言つてあげるよアイシテル
 い抜きから抜きへ日本語が瘦せる
 ドクターが言葉の薬出してくれ
 美しい五月ことは詩になる
 頑張れは鬱の僕には禁句です
 ビリオドへ優しいことは選んでいる
 聞いている背中ちゃんと聞いている
 美味しかったの一言で腕上げるのに
 OMOTENASHI世界語になる日も近い
 おおきにで明日へ元気の湧く介護
 二言目には誰のおかげやが出る
 やわらかい言葉で増える京土産

キヨミ 扶美代 ダン吉 紀乃 富美子 廣子 正和 隆彦 洋 一步 完司 淳司 真理子 良一 耕治 朱夏 進 柁子 とーな 文代 和宏 セツ子 誠一 ひろ子

もの言えぬ夫と並んで見る夕日
公園にまいる言葉がおいてある
痛いいたいと言わねば誰も来てくれぬ
一言に病み一言に蘇る

理恵
弥生
ゆみ子
良一

兄弟が揃うとみんな里言葉

わたくしを育ててくれた褒め言葉

結婚の誓い録音されていた

またあした最後に聞けた言葉です

紫陽花の花言葉へも雨がふる

言葉ってふんわりもある刺もある

美味しいと言わせるまでの割烹着

フロメシネルだけしか喋らない詩人

いつか飲みましょと日も決めず別れ

佳

百の言葉よりダイヤモンドリング

ありがとうに添える私のハート

言葉言葉言葉青々句座立夏

好きですが言えずに独身がふたり

長い長い言葉をもっているキリン

人

ゆつくりと言葉の中に消えました

地

歌うように奏でるようにありがとう

天

正装しても大阪弁である

軸

師よ父よ魔法になってくる言葉

谷口 義

朱 夏

義

瑠美子

昌 紀

真理子

千代美

すみ子

楓 楽

久仁雄

章 子

満知子

いさお

見 清

希久子

瑠美子

としお

句 会 燦 燦

四月句会を読む

岩 崎 眞里子

冬埋めた種が知ってる春の音
花の下西行を埋めほくを埋め

千恵子
久仁雄

津軽の桜の見頃は、大旨四月下旬。首を伸ばして待っていた
四月十四日と十六日、震度7の大地震が二度も熊本を襲った。
映像を見て一気に五年前の東日本大震災に引き戻されていく。

埋め立てた池に眠っている民話

メル友らしいよくまモンとブーさん

好不況どこ吹く風と父の獄

扶美代
直 樹

あの3・11にストップした感情を解してくれたのは例年通り
に咲いた桜だった。非情な大自然に打ち拉がれ、それでも咲く
花に導かれ立ち上がった心。淡々と生きる父の獄とも思う。

玉音を聴いた西瓜と井戸の水

狸 月

泣くまいと青いリングを丸かじり

メルヘンからぼとりと落ちた毒りんご

唯 教
信 子

玉音の後の世代だが、戦後の貧しさは知っている。皆が耐え
ていた。今では毒りんごの他に、毒消しりんごもあるらしい。

我が輩は猫になりたいブルドッグ

憲 彦

蚊も飛ばし虫も転がる脳回路

メルヘンの世界でしようか黄泉の国

敏 治
英 旺

そうか：我が輩という猫になったかかったのがブルドッグ。そ
んな風に納得しながらメルヘン度を増して黄泉化する脳回路。

移転しましたと天国から便り

保 州

散骨でスターダストになるわたし

タンス預金深い眠りに落ちてゆく

ひろ子
葉 子

叶うなら私もそんな便りを：と花吹雪を思い浮かべたが、ス
ターダストも悪く無い。タンス預金のこと等すっかり忘れて。

景気よく生きよう桜が咲いている

義

せめて被災者の心に、元氣桜が太く根を張りますように！

わが家物語

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。

編集部

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

泣き言と増税いらんおことわり
泣き言を言いつつ心癒される
泣き言で膨らみ風船割れました
泣き言は言えず強がる見栄っ張り
泣き言は封印してた父母の前
風みどりさたり泣きごと連れて行く
天を見て泣きごとなんか吹き飛ばせ
泣き言はいくら言っても得ならず
泣き言は云った事ない肝っ玉
逝ってから泣き言ばかり云う女
心の底見透かしている黄信号
難民のSOSが届かない
いじめや自殺きつとシグナル出てるはず
年金の暮しに灯る黄信号
信号は点滅早く覚めなくちゃ
信号がはつきり見えるダイオード
ポッポ屋は青信号でひと日終え
あべこべに詐欺を脅かす電話口

美世子 郁子 安代 裕之 福貴子 美籠 公平 舞夢 昌紀 一步 満知子 萌 半銭 芳香 哲夫 シマ子

孫の脅しに喜んで買うランドセル
このダイヤ買ってくれなきゃ死んでやる
飛行機は着いただけでもはつとする
一日の締めはキューツと生ビール
老夫も主人みつけてはつと顔
妻の茶が一番うまい旅終わる
はつとする風のように孫帰る
老木が今年も新芽出しました
荒波を乗り越えて来たもやい舟
酒の味そろそろ戻って来た術後
雪どけも春の足音もう間近

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

さっぱりだ記憶回路がストライキ
さっぱりとしたくて飲んだ迎え酒
さっぱりと言われて軍備重い腰
あきまへんさっぱりやねん消費税
雛の日はさっぱり母の木の芽和え
核愛し和を断ち先はさっぱりだ
濁点を取ってさっぱりさしすせそ
老兵はきれいさっぱり無位無官
軽やかに乙女の裾が丸出した
軽やかな人の後にひかれてる
どの顔も春の風うけ軽やかだ
メタボ取れ歩く姿も軽やかに
軽やかにドレミハミングウオーキング
弁舌が軽やかすぎて通り抜け
軽やかに愛する彼とワルツふむ
軽やかにスカーフ風に舞っている

遠野 まつお 蕉子 勝弘 日の出 ゆみ子 重信 志津子 保州 (矢)五月 舞蹴 節子 滋子 妻子 野蒜 美ツ千 恭子 三津子 石花菜 貴恵 久江 幹啓 清 瑞子 美知江 久芽代 たけ代

春ですなレースの羽根に付け替える
ごめんねの「ね」が軽やかに歌ってる
ひらがなのひには翼がついている
君の胸ヨハンシユトラウスの鼓動
春なのにわたしの春は何時でしよう
なごり雪春待つ心に水を差す
啓蟄だそろそろ炬燵抜け出そう
夢背負い果立つ空の陽やわらかい
春という悪魔に狂う人多数
大正が独り住んでる古い家
パンザイをしたボツケには綿ばかり
赤ちゃんの泣き声のせぬ家ばかり
歯ブラシは五本家族と言う形
出迎えは無いけど帰る家がある
泣き笑いみんな知ってる家の壁
留守ですよう三軒施設行き
ギーガタン心も家も軋み出す

和歌山三幸川柳会

武本

二心身ハツ口から零れ出る
叱っても二言目には褒めている
平坦であれと願っている敵
声揃えににんがしから始まった
二番手で生きてはつこりしてしまふ
このままに咲き続けた二輪草
晩学で自分探しの第二章
二番手で非難の的を免れる
柳俳の二足草鞋をうまく履く
うらおもて二面持つて人の幅

宣子 くにこ 完司 芳光 美美子 公恵 玲坊 龍枝 芳山 重忠 照彦 重利 紀の治 陽之助 道子 紀美恵 碧報 幹子 起世子 豊 久 美羽 当代 ひろ子 敏照 義泰 准一

見送つて二度と会えない人と知る
二人前食べて骨皮筋子です

二月二日無病息災願う灸

噂ころろ転んで太る雪だるま

手も足も出ないだるまの独り言

落選のだるまにも目を入れてやる

雪だるまに涙見せない春間近

八起きしてだるまとなつて座禪組む

念願も叶いウインクするダルマ

目も口も付けて欲しいな雪だるま

世渡りに外せぬ義理という鎖

義理ひとつ果たす良き日の熨斗袋

ほどほどに義理を欠くのも処世術

義理欠かさぬようにこつそり立見席

がらくたにお世話になつた義理がある

のし袋義理と虚栄も包み込む

義理という雁字搦めにあうこの世

義理ひとつつかえてたたむ心の荷

義理ゆえに気を使ひすぎ草臥れる

菜の花の味が分かつて大人です

いらっしゃい菜の花えがお無人駅

山菜の春一番はふきのとう

天狗の鼻折れて青菜に塩となる

それにしても気になる季語のない野菜

山菜が芽生えわたしも蘇生する

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦報

ブラザーの編み機は亡母の形見です

雪解けてちちの轍が浮いて出る

破産宣告作戦組んでももうアウト

みつ江 みるね まき 智三 絹子 日出男 あき子 義雄 宏枝 幸子 宏夫 菜摘 昇 和子 章子 倅子 次根 昭枝 富香 千鶴 よしこ 悦子 碧 保州 純子

雪解けの味がしみ込む路のとう
どんどんと先行き妻が見当らぬ

ハマグリの砂吐き出して本音聞く

人の世の運命を編む花筏

少年の夢膨らんで春うらら

津軽つ子ねぶた太鼓をきく胎内

作戦はこの汗粒が知っている

母さんが編んだ昭和の忘れもの

踏んで踏まれて強くなる麦の春

編針で僕を操る妻である

太陽を僕の味方にして生きる

孫台風作戦立てるジジとババ

切れ目ない試練をやつと受け止める

春一番春だ春だと戸を叩き

地に生きて寒波しのいだわら細工

着々と延びても限りある命

作戦も船頭多くきまらない

大切なニュースどんどん後回し

平然と抱き合っている宇宙人

さりげなくカップで飲む昼ワイン

優柔不断わたしは御用済み色

霹靂の話で女子会盛り上げる

税金は封書でドンとやってくる

友が逝くんだんだん俺の蓋が開く

捨て場なく苦肉の策の雪ダルマ

お姑の予期せぬ退院嫁慌て

忙中閑さなりと一句アカサタナ

川柳ふうもん吟社(鳥取) 夏目 一粹報

オキナワの背なに食い込む基地負担

京子 隆樹 一呑 花匠 則彦 美鈴 芳生 黙人 ひとし 龍馬 初枝 柳子 きよし 吞舟 のぶし 小とみ 規子 一花 和香子 氏加子 ふさゑ 霜石 花峯 風来坊 つとむ 洋子 洋々

堀 正和 選

十三歳恋が芽生えた新学期

合格を信じ新札取つておく

トライして射止めた妻の大イヒキ

姑はわざと早朝やってくる

てつちりか蟹かでもめて豚になる

横へ来てこんな話を知ってるか

たたき売り昔はバナナ今電気

うちの鍋小から大へまた小へ

小遣いをもらえば孫の用はすむ

毎日が日曜なのに忙しい

毎日

佳句地十選

(5月号から)

籠 島 恵 子 選

もらつてもあげてもバラはトゲがある義人

痒いとこやつと互いの手が届く

たんぼぼよ君の強さをくれないか

思い切り投げよう所詮プーメラン

道筋を通して軋みだした仲

なごやかな暮しでないか鬼は外

子育て支援妊婦に2票与えよう

てつべんに父さんが居たこわかった

三代代教えられたり教えたり

遅れている時計もあつてほつとする

けいこ

宣之 潤子 敏夫 永久 まつお 耕治 北舟 美津子 桃花 幸子

絶妙のバランス地球回つて
せわあない全てを許す母の海
ずつしりと漬物石の自己主張
嘘をつくたびに仮面がずれてくる

体型のバランスとりは無理でした
ずつしりと重い戦も原発も
せわあないけど少し頼って欲しい親

この身体下取り出すは旅立つ日
ブレーキをなかなか踏めぬものが
核のゴミだれが下取りするものか
何でもすると言いつつ孫だせわあない

長生をすたくはしないが死も怖い
お姫様抱っこしてよと無理を言う
ずつしりと溜めこんだのを忘れてた
神の手に委ねりやオベもせわあない

片足を乗せかけられている悪夢
ずつしりと漬物石はしゃべらない
バランスがとれん嫁にはようやらん
病室で母の足音待っている

下取りに匂い袋の香が残り
ずつしりと溜めて養老院に居る
連鎖断てテロと空爆人が死ぬ
不用品下取りだすか断捨離か

叶うなら下取りしてよ錆びた脳
ずつしりと重い地球も一欠片
ずつしりと胃の腑が重い今日の罪
最低のバランス核で脅すだけ

いい夢を見たら正夢だと思ふ
吊り橋が揺れて傘寿を渡り切る
バランスを崩せば尻に敷かれそう

善平 無節子 一瑤 一子

早牛 美恵子 栄子

みゆき とも湖 回春子

雅女 振枝 美枝

天翔 敏夫 楓花

蟹郎 芳子 節子

妻浩 凱柳 房江

金祥 賢悟 野蒜

ずつしりと重い財布は小銭だけ
家計費のバランス妻にかなわない
下取りへ出したいくらいウチの嫁
下取りの薬一本にすがりつく

富柳 会(大阪) 関 よしみ報

春こぼれ私を見る花すみれ
主婦と言う名刺で秋の野を馳せる
したたかに生きる野草の根の深さ
女ひとり背凭れない止まり木に

夜桜 昔ばなしをしたい人
愛は陽炎あなたの心見えません
漠然と脳裏に描く死生観
日毎夜毎不協和音の世界地図

取留めない会話から得たヒント
油断から鬼が死角で待っている
誇らしい日本風土に四季を待つ
逆境に立ち鋭角に落つ野心

陽が上り陽が沈む待ち惚け
野生まで人間のエゴ踏み込んだ
ほんやりと見てもあきない君の顔
意地っ張りなのにめそ夜しぐれ

漠然としたまま愛は影法師
約束は天気次第の花暦
喝采を待ち続けてるふくらはぎ
起承転結は人間から仏

待ちわびて愛の貨車軋み始める
蕪蓄を語る原野は未だ寒い

昌鼓 孝二 由美子 一梓

文重 登子 田鶴子

正治 伸雄 清

慶子 信子 高鷲

澄子 澄子 朋子

未知 武人 一文

晴美 寿之 富美子

アキ 欣之 森子

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報
通過点だったと思う風道
タンスから着物を出して亡妻想う
退職で名刺配らぬ寂しい手

古書店の棚から昭和溢れだす
花の香も添えて安らぐ春の海
まごころを配布命の深さまで
つい本音言ったが為に白羽の矢

陽だまりを抱いて私の空を翔ぶ
被災者に陽の当たる政治が欲しい
目配りと気配り杖に二人坂
汚れを知らぬ匂いだこれが春の風

たんぼは天気予報の明と暗
傲慢を托鉢にそつと閉じ込める
すかたんをいっばい積んだ人間味

竹原川柳会(広島) 古田 太虚報
臘月少し甘えていいですか
いつからか甘え上手になる夫
甘えられ叱ってくれる母がいる

言い訳は通りますせんぞ負けは負け
言い訳をする度小さくなる男
言い訳の後味苦味空しさ
言い訳は聞く耳持たぬ父だった

言い訳のひと言重く伸しかかる
言い訳が素直に聞ける母の愛
骨のある男だ言い訳はしない
言い訳を胸に納めて呉れた父

欣之報 加央里 一文 常男

高鷲 森子 安男

かこ 紀雄 慶子

耀子 朋子 両文

欣之 太虚報 淑子 幸子

千代美 節生 蘭幸

汎美 規代 栄香

鬼焼 昭紀 慶子

耳寄りな話に裏があるうとは
耳朶の硬さがコツのパンを練る
生きた道耳をダンボに聴く法話
佳い話聞きたくなくて耳掃除
山散策まだまだ木霊聴きとれる
母の耳聴覚凄人でした

聴く耳を持って傘寿の底力
福耳を持つているのにホームレス
二十四時介護の耳は眠らない
小さな嘘お天道様は見てるかな
何も彼もお天道様のメッセージ
春時きの種た少うし希望持つ
両の手を開くと春の蝶ひらり
補助線は一本あればいいのだが
兄ちゃんの背中追いかけて背伸びする

川柳塔なら

大久保眞澄報

荒む夜は遠い記憶と酌み交わす
荒波に採まれ生き抜く覚悟でき
腹立てず筋道ゆつくり論す母
希望の芽時には摘んでいる大人
陽炎に揺れるチューリップのダンス
旅立ちの鞆に詰めるアンビシャス
予備校に希望を託す門出あり
心得て荒い気性も丸くする
荒天について逢わねばならぬ人
希望なら古い日記で仮眠中
荒廃の棚田開いた人唄ぶ
飲む打つ買うと筋金入りの妻である

笹舟 輝恵 弘子 栄恵 一徳 半徳 寛 宣之 敬子 歩美 厚子 貞子 比呂子 史子 理恵 ふりこ 日の出 萌子 完次 辰雄 薫 妙 優 枉子 博一 盛隆

酒場の隅でひとり静かに荒れている
希望など以下の外と核廃墟
お釈迦様花いちもんめ花まつり
筋骨隆々ボバイを知らぬもやしつ子
花祭り異国の宮司注ぐ甘茶
荒地地のへ帰宅を止めるシーベルト
終章は筋書通り締め括る
御見舞は現ナマが良い花よりも
花一輪させばたちまち春の部屋
大筋は同意なかなかな判押さず
荒っぽい口調にじむ思いやり
花吹雪心の不安とともに落ち
わたくしの希望に添うと鬼が来る
若者の汗に日本の希望みる
最後の食事はカレーと決めている
出口ない闇にも希望はきつとある
筋金入りの哲学持つてひとりきり

城北川柳会(大坂)

近藤

ハンカチに小さな欲を包みこむ
目が合つてビクッと踊る恋心
コップの中で楽しんでます生きる事
子供の絵まさかの夢がでんこもり
生きていること仕事と決めてどっこいしょ
愛妻が酸っぱいものを食べ出した
面影がくるくる廻る風車
そのまさかの朝かも知れぬ弥陀の声
百均にまさかまさかが並んでる
ネクタイに少し甘えも新社員

喜太郎 甚之市 柳弘 恭昌 崇明 倫 弘子 奈津子 和夫 文聡 義男 史郎 眞澄 弥生 富子 正報 志華子 堅坊 千恵子 弘委智 たもつ 一歩 高志 郁夫 公子

左遷地に大志を埋めてからの修羅
風説めず空気も説めず運も去り
ばら色に風も眩しい恋ころ
リーダーの包容力に皆が寄る
薫風を食んで真鯉の平泳ぎ
したたかに計算されていた涙
何も望まずそのまの君包みこむ
足し算も引き算もしない母の愛
風向きが変わって宙に浮く主張
青春とはまさにジーパン青い風
包み込む母の愛には背けない
邪馬台国謎に包まれロマン呼ぶ
正念場まさか本音がポロリ落ち
春日和転た寝に見るファンタジー
濃く淡く風が奏でている生命
歳月を両手で包み行く余生
文春から取材の電話四月馬鹿
孫が来て春風そつと置いて行く
鍋底はアホノミクスのおかげです
つがなく追いたくられる喜寿の坂

酔う程に包み隠さず出る本音
自慢げに喜び走るランドセル
本心を言うのは春が過ぎ去るから
寄り添うて一つの影にする夕日
川柳塔おっぱい吟社(香川)川崎ひかり報

直樹 縣笹 朝子 克己 満作 洋志 賢子 集一 美智子 義昭 杵香 榮子 野鶴 あさ子 星雨 麗 北舟 節弘 正 五月 博 正 五月 求芽 初恵

惜しかった逃げた魚にある未練
ホーム降り忘れた主婦の座に戻り
仲間みなおいでおいでをしてくれる
ひかり

川柳大阪 山崎 珠生報

命名は元気に育て願ひ込め
母強し命引き継ぐ底力
延命はしない約束自然体
煽てたらみんな教えてくれはった
情報に疎い男の勇み足
折り込みチラシ丁寧に見る情報紙
携帯から地震情報鳴り出した
情報は元に戻って倍になる
ネット社会ママの書き込み国動く
人間の鏡にしたいムヒカさん
うら声も映しています三面鏡
佳き日なり鏡にポーズする晴着
正真で真面目な鏡キライです
姿見に映る我身に一目惚れ
良し悪しに親を鏡に子は育つ
鏡には傷口見せぬ意地がある
憎まれ口無言よりまし反抗期
満開のさくら散らした憎い雨
貴男だけ頼りだなんて憎い口
出してもた憎さあまりに嫌みごと
後始末できない原発なぞ稼働
空虚ゆえ狭まる核の抑止論
地下開け店の奥行猫あくび
同総会元気でずと欠席し

弘 放任
珠生 五月
かよこ 温子
柳弘 万紗子
芳香 よし子
美世子 紀雄
一歩 美龍
勝弘 和
満知子 弥生
福貴子 美濃
まつお 鈍甲
司 照月

わかあゆ川柳会(島根) 松本はるみ報

過疎の村歌いつがれた歌悲し
歌えない言いつきとってマイクとる
今まさに校歌も終りの我が母校
歌う児の眸は無垢富士の山
八十路越えみんな笑顔の同窓会
おはようの笑顔に会うたうれしい日
片言で歌って笑う孫二歳
新しい出会い笑顔から生まれ

南大阪川柳会 津守 柳伸報

妖怪ウォッチ胸に輝くエンブレム
誠実とワッペンはられウソつけぬ
越前生まれワッペン付けて威張るカニ
早や金婚今更悔やむ事もない
悔しいからも一度勝負したい敵
深爪に似た悔しさが何時までも
悔しいがたった一人の誕生日
悔しいが口では妻に適わない
前途ある命を奪う自爆テロ
メチャ高い美白クリームなのにシミ
悔しいが敵は東大歯が立たぬ
悔しさを笑いかえる春の酒
悔しさを踏み台にして今がある
誘い合い元氣確認する笑顔
いつ来ても安堵を誘う母の風
迂闊には乗れない誘い裏がある
孫達に本物聴けと棧敷席

惠美子 ハル子
安子 是み
英子 かつ子
好栄 昌
敏治 憲彦
恭昌 シマ子
弘泰 郁夫
いさお 祥昭
純子 栄子
あや子 楓楽
柳右子 弘子
忠昭 博

新緑に誘われはすむ万歩計
二枚舌雀の舌は邪魔になる
イエスノーはつきりしない軽い舌
信頼を裏切る羽目の二枚舌
本音でも言葉不足と言うておく
春なれば母に逢いたくなる団子
学歴もお辞儀の稽古する四月
さくら咲く病の友をふと思う
大阪の市長静かで物足りぬ
したたかに家族おもいのバイキング
公園も空も昔は広がった
入社したからには脛はかじらせぬ
身のほどの歩幅大事にして生きる
生きのびて今年も行ける通り抜け
桜の開花早まってゆく恐さ

高知川柳社 小川てるみ報

寒々と男のピアス孤立して
あれもこれももお寒い国の政
初雪に寒を奏でる北の風
春ですよつぼみが動く寒椿
言い訳を聞けば心が寒くなる
寒くても僕の心は燃えている

京都塔の会 山田 葉子報

家中で一番タフな洗濯機
志折ることはなく生きてきた
犬さえも震災前によるめいて
薔薇の魔がよろめく男手の平に
ふりこ

更紗 国和
なぎさ 和雄
勝弘 あさ子
歌留多 一歩
東風 柳伸
昌紀 篤
ばっは 克己
たもつ 哲史
陸宏 昭夫
千恵子 和広
てるみ

よろめいた先に過酷な記者会見
砂まみれの球児まぶしい甲子園
玉砂利を踏むと足裏かしこまる
砂浜の裸足くすぐる春の海

人災を詫び鳴り砂の音を待つ
もう歳や言うてよう食べよう動く
砂を噛むおもしろいへ闘志発芽する
腐るなよ骨折り損が後で効く

千羽鶴折って奇跡を信じよう
思い切り砂を吐き出す縄のれん
砂時計倒してしばし刻止める
タフネスの頃の万博キャンデイズ

ほんばりの灯によろめいたのは花の精
お腹空いても財布空でも笑ってる
坂道でタフな人との差が開く
よろめいて払う代償高くつき

よろめいても行きたい母のいる浄土
折り合いを付けては過ごす歳になる
指折って百まで数え今日も丸
戦わぬ兜を折っている五月

折り合いを続け夫婦の顔が似る
満開の桜の中にタフな梅
人は花よろめいて春楽しまん
砂遊びみんな未来が光ってた

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

苦を積んだ人は負の時動じない
年度末今年もやはり掘り返し
出来ごころまぶしい過去を持ちながら

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

苦を積んだ人は負の時動じない
年度末今年もやはり掘り返し
出来ごころまぶしい過去を持ちながら

苦を積んだ人は負の時動じない
年度末今年もやはり掘り返し
出来ごころまぶしい過去を持ちながら

苦を積んだ人は負の時動じない
年度末今年もやはり掘り返し
出来ごころまぶしい過去を持ちながら

苦を積んだ人は負の時動じない
年度末今年もやはり掘り返し
出来ごころまぶしい過去を持ちながら

苦を積んだ人は負の時動じない
年度末今年もやはり掘り返し
出来ごころまぶしい過去を持ちながら

福子 忠子 千賀子 欣之 牛延 かずお 朝子 光久 万紗子 堅坊 英旺 求芽 公子 弘之 葉子 元一 則彦 文代 満子 義昭 保子 弘子 宏子 洋志

ルビ振らねばまともに読んでもらえぬ名
胃カメラの話で終るクラス会

川柳塔まつえ吟社(島根)相見 柳歩報

毎朝のラジオ体操今日もまる

運動会気合い一番先生だ

運動に犬と歩くと犬になる

戦時には運動場もいも畑

故郷に英語無縁の山河あり

ボランティア頭かかえる英会話

一夜漬けだった英語は身に付かず

ATMくらいは解る英語力

呑み込んだ一番という重いの

二番ではなぜ駄目なのとやさしい目

舌が欲しくて失りだすオトコ

舌が言う一番旨い妻の味

変化して結びの一番が終わり

一番風呂最高死なぬようにする

一番の花は桜よ春うらら

欠片になってしまった私の心

反論の言葉の欠片喉にある

捨てられた欠片を今も懐かしむ

ニースタイム不安のかけら世界飛ぶ

貴重品欠片になれば見捨てられ

純情の欠片財布の中にある

欠片でも瑪瑙となれば眼が眩る

跡取りの嫁の話は欠片もない

欠片から反響類つべまつかつか

はずんでる電話の向こう若い声

美千代 かつ子

昌枝

紗季

雪代

幸代

草庵

たけし

千里

久絵

美智子

孝子

博子

あきら

柳歩

弘充

知恵子

文子

桂子

邦代

幸子

ひふみ

堂太

左余

俊子

とも子

ゆき

未来図へ若い心を遊ばせる
若き日のとんがり削れいがぐりに
ドラえもん若くなるもの出してくれ
若い時ルパンにダイヤ頼んだけど
グラデーション重なり合っていて若い

長 柳 会(大阪) 辻村 ヒ口報

桜並木似合う笑顔が溢れ出る
振り上げたこぶしが今日もおろせない
愛深く老老介護どちら先
喘息になって分った生き地獄
君が去り石の欠片になるダイヤ
ゼロひとつ見落し買ったプレゼント
背広着て良く似合ってた好きな人
料亭の花見弁当買ってみる
唐揚げには何といつてもビールでしょ
釣柄が似合うおばちゃんめくれる
奮発の服を着たさにダイエット
ブランドのおしゃれな服で春の旅
お似合いの夫婦無口とお喋りと
Sサイズ似合った頃のおどけなさ
身の丈に似合う暮しで軽い肩
その椅子に似合った顔になっている
年やのに女子を見ればすぐ奢る

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

兵馬備始皇帝にて連れられて
十までが紅葉の両手守備範囲
タレントが降りて無人の島のバス

蜂 四郎

蜂 四郎

蜂 四郎

蜂 四郎

蜂 四郎

蜂 四郎

蜂 四郎

蜂 四郎

蜂 四郎

蜂 四郎

蜂 四郎

蜂 四郎

孫多忙子育てスマホ頼つてる
同盟は建前だけの追従国

ブラザ川柳(大阪)

坂上

淳司報

回り寿司ぐらいいいか年金日
親子して羽織袴の七五三

ノーサイドコンチクショーとすべる口

こうてもたお似合いですは常套句

孫の顔妻に似ていて安堵する

試着してやはり似合ったLサイズ

張り込んだ上より並に馴染む舌

上等の靴が泣いてる旅の雨

野麦峠故郷に向かいすすり泣く

桜詣で膝をなだめて登り坂

奮発をしたがあくる日半値以下

のほほんとコロリいくまで好き気儘

ノスタルディア小鮒せせらぎ澄んだ空

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

ここですよ山の白蓮主張する

眩きが届いたらしい子のメール

もう少し背筋伸ばして知らぬ土地

伸び伸びの子育て是非を問いながら

ほろ苦い時を噛み締め聴く校歌

春の日に希望の光し覗いてる

一年生服も希望もデッカイゾ

是非行つて天国を見て帰りたい

是非という言葉わたしを動かせる

希望なら下り列車にだってある

節子
高明

淳司

政夫

弘光

一彌

悦夫

修乃

清乃

和代

五月

正子

篤篤

克三

久美子

茶子

弘子

和子

咲和

茶子

すみれ

ゆり子

綾子

照彦

美ツ千

盛桜

新鮮な魚野菜でいい暮らし
是が非でも君と一緒に暮したい

古希過ぎて船舶一級に挑む

一筋の希望を持つて船出する

鮮やかなままで覚えておく桜

ふる里が寄ると必ず出る校歌

総領が慕終いする罰当り

カラオケで校歌ないかと不粹者

憲法の是非曲直を正さねば

鮮やかな勝ちつぶりA I の囲碁

魔校の校歌を歌う同窓会

鮮やかなバラに心を盗まれた

鮮やかに花をいとめた恋ころ

是非も無い呆けた女房俺が見る

めぐり逢い希望抱かせてくれたひと

鮮やかに効き過ぎました副作用

川柳塔さかい(大阪)

村上

玄也報

勝ち負けがつかぬ夫婦の乱つづく

罵った数だけ愚かささらけ出す

罵られても時の人ぶる愉快犯

罵られ叩かれ今の僕がある

右足の次の左が出て来ない

三食ついて雲が友だち楽隠居

爆睡の足裏ビクリ生きている

ああ言えばこう言う妻と日々元氣

さりげない苦労話がライト浴び

野仏の花に恋した蝶の舞

丹精に込めてくれた花菖蒲

鈴螢

孔美子

八重

完司

実満

蟹郎

恒

妻子

拓庵

小鹿

富久江

重忠

みさ子

満

ヨシ枝

俣子

八千代

舞夢

敏治

憲彦

半錢

ゆみ子

さくら

シルク

扶美代

葉桜の途端毛虫と戦する

罵倒にも言つていいこと悪いこと

爽やかに苦情処理した辣腕家

道端にも春を告げる小さな花

遺言へ罵り合うと書いておこ

勝手生えの花から学ぶ自然体

よく怒る爺ちゃん惚けたことにする

反応にこたえる妻は調律師

お互いに罵り合いの選挙戦

菜の花の色に染まった車椅子

バカヤロー言えず眩く小さい胸

罵れど声にならない夢の喉

花便りお酒持参で来いと言う

お互いに罵り合つて夫婦です

隣国の会話が罵りに聞こえ

魚市場罵りあつて捌き終え

隙間から生きますよとスミレ草

花より団子いや桜より乾杯だ

罵倒されびつくり箱を蹴つとばす

あの罵声馬が歯をむきいなく様

知らんぶりしてるが耳は動いてる

罵られても付いてゆきますお母ちゃん

反応はあったあれからソツポ向く

人間に散り際見せているさくら

ほたる川柳同好会(大阪)水野

丸暗記応用できぬ英会話

ライバルのやさしさこころ丸くなる

丸一日母を預けてシヨッピン

健吾

妙子

世紀子

かりん

五月

佳子

若芽

唯教

清

ひろ子

誠一

好

玄也

日の出

憲

雅明

澄空

玲子

ばっは

永久

月子

としお

みつこ

天笑

黒兎報

正子

美智代

順子

一日の幸せ丸い皿に盛る
力まずに生きて世間を丸くする

アルバムに丸刈り少年セピア色
丸刈りに反省の意志男たち

夫婦仲丸く付き合う妻が喜寿
ストレスに備えて常に正露丸

小さい庭季節を学ぶ色がある
生き方を学ぶ手本としての親

学ぶのに無知の自覚が第一歩
手際よい友の断捨離お手本に

英会話全く出来ぬ外国人
鍋奉行周りを手を出さぬ

靴音がだんだん迫る夜の道
八十年スリルなしなど有り得ない

はびきの市民川柳会(大阪)永田

二番手を走って風がやわらかい
偽善者とわからぬように背を正す

一番は夫に譲り控えめに
二番目はいちばん損な役まわり

偽善者のまじめな顔に騙される
雑念は払拭射貫くど真ん中

二番目と言っているけど後ろから
一番より二番の歌詞が面白い

偽善者のトップはやはり安倍総理
二番手のくやしさをバネに狙う金

うしろから数えて二番ホツとする
里帰りスマホと風邪の土産置き

悲しみの思いピアノの音で知る

美佐子

堅坊

勝

守啓

長一

信男

桂子

久子

黒兎

郁子

柳童

奈津子

春代

輝

章司報

美代子

フジ

千鶴子

かつ美

いさお

高鷺

光男

喜久子

敏

ひろ介

さくら

美喜

雄太

二番手の場所にいる方が良い

二番目の足は四輪車椅子

二の足を踏む間に運が逃げて行く

二番では駄目なんですか懐かし

政治家の顔に出ている嘘つばち

二番目は女の児だと決めている

懷疑心有って非難の矢を浴びる

脳枯れて二番煎じの句をひねる

矢印はないが私の生きる道

年寄りを騙す詐欺師のテクニク

川柳同友会みらい(鳥取)吉田

物分り良い年寄りになりません

一月は雨雨雪でなにもせず

あの空を飛べぬものかと籠の鳥

過疎の古いオアシスとなる販売車

良い種を蒔けばきれいな花が咲く

マネキンによく似合う服買ってくる

大臣より失言競う場合かい

三狼になって生き抜くコツつかむ

アイドルは笑って一つ支援でき

カラオケでアイドル気分少し出す

二十代大人のふりをしています

ほとほどの自由こそこの幸せ

乗りませんサブリが皺を消すなんて

通信簿オールAでも出世せず

感動の安売りこれも丸ボスト

島国で肌の色には鈍感だ

エプロンが似合う女にまだなれぬ

真一

ヨシ枝

泰子

洋一

ちづる

アヤ子

壽峰

みつこ

シルク

章司

陽子報

百合子

和之

和郎

美恵子

信子

みどり

章子

和代

千恵子

紫音

海希

真帆

寿々子

惠美代

陽子

一眸

華蓮

独り旅五感頼って突き進む

このまんま死ぬかもしれない高瀬舟

川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報

仲よしに愛と勇気をかりたまま

仲の良い夫婦の干支はサルとイヌ

甘く見た山にお灸据えられる

城のある町で昔とすれ違う

世の中がぱっと明るくなる笑顔

いい目覚め小さな光今朝もさす

口角を上げて描いて笑みの顔

遠まわり昔に出合う恋の道

盆地から見渡す山並水彩画

未来の子仲好し小好し皆笑顔

人生の険しい山も七合目

川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

ジャズよりも演歌の似合う歳となり

徘徊の妻ふると歌ういいお顔

金庫買う入れるものなし置場なし

忘れ物頼みたいで思いだす

びかびかに鏡磨いて老いと会う

びかびかに磨いた車に花吹雪

ミスコンも頭の良さで選ばれる

自己過信頑固頭の自惚れ屋

雨の日に気が重くなる白い杖

大ばかをやって急いで脳ドック

頭から否定しないで調子者

童謡聞けば遠いあの日の母の声

遊子

公弘

かほる

哲男

稠民

真由

多美子

開子

可住

幸子

照代

美智子

紀恵

紀華

修平

雪菜

初音

幸香

歌留多

柳明

よしひさ

健二

里江

比ろ志

全身の重み支えている踵

肩の荷が重い十八の選挙権

目も服もビカビカ光る一年生

IQはすこいらしいが超かるい

遠い空想い浮かべて童歌

先頭に立つと厳しい向い風

紀香ちゃんダイヤの指輪二度目です

菜の花と弾むお喋りきのう今日

いつからか僕の主治医は妻である

ライバルは頭脳明晰お金持ち

全力で君の未来を守りたい

遅ればせ花も咲いたし実も成った

欲張った重い荷物を持て余す

掃除機を押して朝から八代亜紀

中身より形を誉められる頭

駅弁は買ったが土産忘れてた

小走りで今は夫がついてくる

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

たんぽぽも孫も私も大地の子

総中流が総活躍へ衣替

オキナワの大地踏みしめ反戦歌

ながらえてなお含羞の顔に逢う

梅桃桜大地賑わう花盛り

お釈迦様今日は貴方の誕生日

輕輕と抱く父の手は節くれて

軽妙な話術が運を引き寄せる

取りあえず探りを入れた軽いジャブ

大地から芽生えた命食してる

靖 鬼

芳 香

楓 花

洋 子

純

美 籠

花 門

ヨシエ

祐 康

まつお

ひとみ

りこ

和 子

耕 治

かずお

正 造

宏 造

生 枝

篤

利 秋

鈍 甲

義 泰

忠 昭

美智子

栄 子

高 鷲

康 信

大地から芽吹く新芽の下根性

自転車でギーコギーコと大地春

妻が逝きやつと引き継ぐ金庫番

未知数の地雷を埋めてある大地

核のボタン開かぬ金庫に入れておけ

境の無い大地に線を引くヒト科

朝ドラを見終えて主婦の顔となる

ガラス越しどつち似だろと交友に

この顔を出せば何とかなる話

花の下みんな素直な顔ばかり

すぐ顔に出してこの人いい人だ

頼もしくなった震災孤児の顔

厄介な罪撒き散らす軽い口

バンドラの金庫こじ開け安売法

千年の桜大地と仲がよい

Uターンしようかな寝転んでみる大地

バブル期の残夢金庫の奥に寝る

世界地図一点だけである我が家

負する介護の軽い軽い老母

喜怒哀楽演技じつたねデスマスク

日本の顔が安倍ではやりきれぬ

足つけてしっかり大地踏み仁王

日は千両鼻は天井向いている

綿菓子に降る花びらのトッピング

雪解けの水が大地へ春告げる

川柳塔わかやま吟社

川上

訪ねると待ってましたと喋りだす

幸福を訪ねてひとり風に乗る

壽 峰

紅 絵

一 文

廣 子

堅 坊

英 夫

隆 昭

福貴子

ひろ子

浩 子

たもつ

加 代

寿 之

一 志

穩 夫

千代美

克 己

信 二

欣 之

清

敏 照

朋 子

久美子

哲 男

いさお

大輪報

悦 子

京 子

大の字になる草原があるふるとよ

春風に鬼の手になる草むしり

日本の美心に染みる草木染

人並みの幸せでいいिकास草

道草にねばならないを置いてきた

雑草の声は確かな渦となる

雑草は岩を砕いて生き延びる

やれやれと桃源郷へ辿り着く

血管の流れもさざり春になる

やれやれと次の希望へリフレッシュ

手を焼いたやんちゃ坊主も独り立ち

肩の荷を下ろすと五体軋みだす

九条も無事守られている平和

ときどき過去をつなぐわたしのコンセント

オーイみんな集まれ俺はコンセント

命のリレー父母は子孫のコンセント

時どきは君が充電してくれる

停電で居眠りしてるコンセント

もどかしいちょっと足りないコンセント

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

私利私欲捨てて頑張る人選ぶ

選びすぎカスをつかんで悔いばかり

さあ選挙日本の行方沈まぬよう

安易な道選んだ付けはやつてくる

瑠璃の海潜ると稚魚の天国だ

都会では電車も人も潜る地下

もう一度潜ってみたい母の胸

潜ってたガンと闘う朝が来た

寿 子

弘 子

紀久子

則 子

和 香

精 子

ほのか

知 香

小 雪

秀 子

日出男

富美子

英 子

あきこ

克 子

めぐみ

徑 子

まさみ

よしこ

智恵子

玲 子

恭 子

けいこ

重 忠

風 露

祐 子

美知江

潜り込む布団をひつべ返される
竹藪に潜り出られぬ老いの道

フクシマの恨みを晴らす全廃炉

気晴らしに一千万の壺を買う

晩酌で晴らす一日分のトゲ

四面楚歌核実験で憂え晴らし

硫黄島の恨みを尖閣で晴らす

もやもやの悩み晴らして明日を待つ

カラオケで歌いまくって気を晴らす

ゆったりと出来るあなたの側がよい

ゆったりと充電中の昼下り

ゴム伸びて始終持ち上げ此のパンツ

風呂上りゆったりとしてビール飲む

ゆったりと午後のコヒー淹れてる

ゆったりはさせぬ大家族のくらし

ゆったりと生きて死ぬのも金がある

岩美川柳会(鳥取)

山下

節子報

家計簿と老いを困らす入院費

つぎはぎの知識にいつも恥を掻く

ピンチでも家計支える妻がいる

大変だ家計簿今に火をふくぞ

スリサイズ聞かれて見栄を張りました

結ぶのも解くにも苦労縁の糸

指サイズ誤かれたままに五十年

人生路いつも晴れとはかぎらない

もみじの手やがて親父を越すサイズ

宴会後サイズの違う靴残り

失職し鳴かぬ日はない腹の虫

萩江

紀美恵

鬼一

石花菜

完司

次男

野蒜

瑞子

醉美蓉

由紀子

雄大

日出子

泰輔

茂夫

妻

照彦

五つの輪結ぶ日迄は承らえる

ニホンの美オールサイズの和服好き

風呂敷を結ぶ芸術日本の美

ミクロンの菌に命を奪われる

子供には家計どうあれ腹満たす

さくら咲くいつもの春と同じ色

大山滝句座(鳥取)

新家

完司報

お互いが杖お手本は両陛下

庭の落炊いて一番ほとけさる

地球儀をゆつくり廻し旅をする

少しでも乱れています昼の月

人生は代打代走ないゲーム

家系です腰も心も曲がらない

新しく覚えるための物忘れ

その時が来てから決める曲り角

五月病恋も黄砂も巻き込んで

曲線が目には焼きついて離れない

欄外に走り書きしてあるサラバ!

へそ曲り花が散っても花見酒

休みの日自分の色の服を着る

乱よりも変よりも恐ろしい地震

曲り角誰かの後ろ指がある

整頓が下手で押し入れ開けられぬ

ホームドラマ玄関出たら曲り角

踏まれても明日のためだ笑い顔

幸運がこころ急カーブ

乱れてる私の部屋の心地よさ

休肝日刺身に勝てず先送り

雅女

茶子

弘子

公子

たぬ

節子

宏章

孝子

寛

寿代

規雄

章子

紀の治

雄大

楓花

芳光

くにこ

照彦

麦青

石花菜

美ッ千

風露

けいこ

幹啓

幸子

昭子

道唱

乱暴な北朝鮮のアナウンス

乱れてるその日暮らしのカップ麺

ひきだしも頭の中もぐちゃぐちゃ

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井

則彦報

自分という敵を破って飛躍する

広告に長所ばかりを書くサブリ

バナマ文書大金持ちが青楓める

色男長所は無いが金がある

青春は一度ではない老いの春

被災地に祈るほかない無力感

葉ざくらになって暮らしを取り戻す

旅する度訛り言葉に癒される

朝刊が兎になつて威張り出す

桜散りまた来年と手を合わす

罪犯すと女性女に変化する

破れ破れ繕い続く遠い道

花散つて雑草やはり饒舌に

上司への怒りむくむく縄のれん

度のゆるい眼鏡で夜に決めた嫁

積乱雲がむくむくむくと自己主張

慣例を破る若さにある驕り

湯煙がむくむく上がる旅の朝

遠慮ない噂が風を引きつれて

火の国の平和を破る地の揺らぎ

なんの気なしに道を選べるのが若さ

約束を故意に破った後の悔い

スポンサーのご厚意を待つアヒトリ

重忠

久子

完司

英旺

求芽

歌留多

真理子

健二

(水)玲子

比ろ志

美佐子

健三

美津子

武彦

ヨシエ

堅坊

満子

則彦

宏子

武臣

美龍

正彦

葉子

久子

耕治

破りたい堪忍袋を持つている
無理しないそれが私の処方箋
ひこばえに力をもらう老いた森
無念さがむくむく夜を長くする
古稀迎えアンテナの向き変えてみる
(若)玲子

岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報

この花の色はヒトには描けない
自然界の掟破ったのはヒト科
包近は桃の売上げ大もうけ
魚屋の演歌が村へ週一度
残された桃の花には使命感
花よりも早く食べたい桃の実を
花の命実のため摘花桃けなげ
何事も備えあればと知る地震
自然淘汰の末にわたしもここに居る
はるかな道タクダックス欠けていく
アップテンポの歌で散歩がしなくなる
遅咲きの色もあざやか桃の花
これでもか自然ときどき惨いこと
思い出の場所に自然と足が向く
迷いから覚めて見渡す自然の美
定年後やつと気付いた雪月花
カラオケの上手な部下は嫌がられ
音痴でも声大にして反戦歌
歌がある喜びがある草萌える
大自然の前にひれ伏すばかりなり
嫁と住む自然に絆太くなる
結果良鼻歌も出る帰り道

千鶴子 美智代 黒兎 見清 子 昭 益祥 和子 香代 和美 一子 かつ美 五月 蕉子 章子 幸子 ダン吉 珠子 大輔 隆昭 忠太 保州 ふさゑ 英夫 ひろ子 彦弘

念佛に聞こえる今の若い歌
母さんの行李の底に子守歌
桃の郷温泉あれば天国だ
改憲の総理に聞かそメーデー歌
久 みつ江 康信 義泰

川柳藤井寺(大阪) 鴨谷瑠美子報

生駒からみどりの風が吹く四月
老春の四月木の芽とわたくしと
予備校はバsfundシ締め直す
私にも若い四月があつたはず
片棒を担いで楽し四月馬鹿
薔薇園の開花ゆつくり歩く妻
もどき寒くすぐる花だより
虞美人草妖しい恋の色で咲く
ばあちゃんも最後の開花したらしい
ゆつくりと夢の形をして開花
北国が吹雪いてピasから凍る
似合う人似合わない人いるピas
びつくりボン孫がピasを着けて来る
反抗の傷あとに残るピas穴
補聴器の耳にピasは似合わない
耳たぶのピasに父は悲しそう
自分史にピasないのが我が誇り
ピasよりきれいな耳が光ってる
耳の穴あけるあけない大事件
息洩れがしないだらうか鼻ピas
川柳さんだ(兵庫) 田中 章子報
人間もカラスも同じ子が可愛い
歳子

久 みつ江 康信 義泰 いさお みつこ 六點 婦美枝 フジ子 瑠美子 育代 一歩 一シ枝 扶美代 弥生 勝弘 紀雄 キー 雅枝 光男 一文 絹子 喜代子 美代子

へますればあほ阿保カラス見て笑う
この脳に欲しいカラスの記憶力
過疎進みついにカラスも村を出る
熊本城の時は無事カラスの子
飽食のすきまで飢える都市砂漠
方言に太刀打ち出来ぬ都会つ子
地方切り東京だけを見る政治
地下街はきつと埃が舞っている
大震災ページはみ出す大見出し
新しいページを開く呱呱の声
桜から千年藤へページ繰る
ページ繰る日記帳から過去を知る
約束の日が書いてあるページ
四、五ページ読めば充分ぬむくなる
亡き妻の闘病日記かすれ文字
景色よりトイレの都合通路側
育休の復帰に僕の席は無く
座布団が立派過ぎてか落ち着かず
バラ五輪夢を見させる独り部屋
針仕事した婆ちゃんの座りタコ
窓際の席はリストラ待機組
のろろとだけと真つ直ぐ生きてきた
ゆつくりと行くよ最後は一人旅
あさつもあるぞと告げるカタツムリ
単線の枕木に聞くわらべ唄
渋滞がつづく帰省のハイウエイ
お役所がのらりくらりとする仕事
豆蒔いて爺が好きだとつきまとう
俊昭 キヨミ 修平 哲夫 淑子 加代子 耕治 徹 光久 宣子 幸香 千津子 野薫 雄太郎 ちあき 正和 雅尚 恭子 美龍 哲男 花門 健彦 勝正 見 武彦 真由 祐康 順子

柱の傷とどんなに越えて声変わり
頂いた筈今宵フルコース
青空を天井にして凜と生き
平凡は幸せ欲をみんな捨て
ともかくも最優先は君のこと

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

美智子
一子
迪
ヨシエ
ひとみ

役目終えボス猿そつと群れを去る
去りし日をやり直せたら何とする
会社去り個人の力思い知る
君が去つても回つています爾爾と
長かった痛みが去つてゐるんと
友見舞う間合いを計る帰り際
やがて去るこの世じっくり見ておこう
ポスト去る男の美学貰いて
エピソード入れる人気のある講師
恥かいた昔の事はエピソード
ひらがなの形でさくら風に舞う
許したらいい風向きになつていた
目も心も開いてみよう青い空
会うごとに好きになる君目で追つて
走つた時は見えない路地の花
つばめ来るどつさり話すことがある
しなやかにけれどあなたの彩であれ
春ですな住民票も動きます
働かぬ蟻もいるらしはつとする
家中の動きを止める兄の午睡
動いても動かなくても腹が減る

盛夫
一徳
浩司
勝弘
じろう
美津子
てる
秋果
宏造
弘子
みよし
キヨミ
千賀子
茂
利子
文香
わこ
ひとみ
正和
章子
光子
武彦

初仕事花の宴の陣地取り
定年を無事に迎えた作業服
暗い夜も地球は動く朝が来る
世評にも金にも動かんムヒカ様
尻軽く動けば妻の指示が増す
決勝戦女神は迷い雲がくれ
去る人のきらりと光る名語録
わが社から御社になつた定年後
退社後は趣味一筋にまつしぐら
場所とりは桜マークの初仕事
会社にも入口出口ありました
愛着を感じるほどの良い会社
エリートに一直線の椅子が見え
六甲川柳会(兵庫) 市坪 武臣報

宣彦
輝彦
健彦
靖夫
邦男
伯備
忠彦
里子
武臣
紀華
比る志
順子
千代

目が回る頭が回る口まわる
青空を回る鳶に春霞
歳月は流れて遂に爺と婆
父の遺影僕の近影瓜二つ
昭和を乗せ回転をする蓄音器
小説に成る一生は持つてます
歲月より少しゆつくり歩いてよ
古稀を過ぎ歲月速度違反気味
喜怒哀楽その都度変わる眉の位置
ゆつくりと回る人生恙なし
叱るのは止そうと思う子の寝顔
何かある顔見ただけで分る母
熟年の顔は自分がこしらえる
翠洋会(大阪) 佐々木満作報

邦子
洋一
武臣
和宏
洋次郎
夏子
じろう
浩司
和郎
美恵子
武彦
能子
光久

楓染
眞澄
富子
けんえい
良子
公平
紀子
和夫
桃花
昭
善之
舞夢
日の出
義

運動不足プラス思考のスニーカー
 デイサービス脳の運動グーチョキパー
 気兼ねなく笑いあいたいエピソード
 エピソードばかりで主題雲がくれ
 再会に話題はつきぬ俺お前
 エピソード混せて和尚が法を説く
 自分史の余白に秘めたエピソード
 楽しみを採しに行こう春帽子
 百花繚乱おのずと心弾む春
 花散ってまた約束が反古になる
 似て欲しく無いとばかり子に見えて
 記念切手思い出貼って出す便り
 天命をつくづく思う命の灯
 子の寝顔つくづく見とれ幸せを
 平凡がいかに大事か思う日
 きやらぼく川柳会(鳥取)成田

弘子 千歩 敬子 蕉子 恭昌 捷也 集一 希久子 浩二 理恵 すみ子 照子 志華子 みつ子 満作

雨奇報

普通車は妻が使って旦那軽
 転んだと春の野草に笑われた
 痛いところみんな忘れて春の野良
 桜の下ぐつた学徒の日もあった
 穏やかを望む寝不足昨日今日
 二人三脚いつしか相手義母となる
 椿咲く白赤ピンクリンと咲く
 我が道は我が決めたり紅椿
 川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

宏之 美草 美佐子 瑞枝 美智子 美穂 ゆめ子 忠央 弘一 茜 喜八郎 高志 秀雄 壽峰 弘委智 ルイ子 美智子 博泉 亜成 鈍甲 寿子 祥昭 麗 かつみ

第63回 八尾市民川柳大会

とき 平成28年8月28日(日)正午開場
 (昼食は済ませてお越し下さい。)

ところ 八尾文化会館・プリズムホール
 5F レセプションホール

会費 2千円(作品集・鉢植え花)
 (近鉄八尾駅下車 徒歩5分 西武デパート東隣)
 宿題と選者 各題2句提出・席題なし

「真」井澤 壽峰 選
 「齒」阪本 高士 選
 「無」天根 夢草 選
 「手」新家 完司 選
 「左」村上 水筆 選
 「火」森中 恵美子 選
 「愛」土谷 耀一 選
 出句締切 午後1時
 懇親宴 4千円(希望者のみ当日受付)
 お問合せ 土田欣之(電話072-99274934)
 主催 八尾市民川柳会

黄金の膚偏に惚れて妻
 もう刺激ないわとあつさり置き手紙
 採用にこだわりのある実力派
 あつさりと負けて小骨がすべてとれ
 引退は新たな道の始発駅
 溢れるほど花抱く夫の背に憂い
 外地より大切アルバム持ち帰る
 寒い絵にしてはならぬと虹を足す
 振り向きは出来ぬ四月のまっしぐら
 高 鶯 蕉 弘 朝子 賢子 美江 洋子 恵子

句会名	日時と題	会場と投句先
ほたる川柳同好会	14日(火) 13時30分締切 半分・乗る・じっくり	豊中市立笠池公民館 阪急・モノレール 笠池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳たちばな	15日(水) 14時締切 外(互選)	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸和田川柳会	18日(土) 12時30分開場 機嫌・選ぶ・ちゃっかり・コラム	岸和田市立福祉総合センター 南海電車岸和田駅より徒歩5分 〒596-0067 岸和田市南町9-17-818 藤井康信
和歌山三幸柳会	18日(土) 12時30分開場 軽い・バケツ・きっちり	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸柳会」宛
川柳塔みちのく	18日(土) 17時締切 壊す・かさかさ・灯台	弘前市松森町73「レストラン・セーブル」1m0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 1m0172-36-8605
川柳ねやがわ	19日(日) 12時締切 生き甲斐・過信・散歩・自由吟	産業会館 3F 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川柳藤井寺	19日(日) 14時締切 曖昧・頭	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺さくら町2-2-201 高田美代子
豊中もくせい川柳会	20日(月) 13時45分締切 重荷・替える・しっかり・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
京都塔の会	21日(火) 14時締切 ハプニング・おっとり・休	京都ハートピア 地下鉄九条駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子
川柳さんだ	21日(火) 13時30分締切 指・マーク・貼る・ぼっさり 自由吟	キッピーモール 6階(JR三田駅前) 「まちづくり協働センター」内のホール 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳塔すみよし	25日(土) 14時15分締切 満足・風・ナイフ	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
はびきの市川柳会	26日(日) 14時締切 洋・ちょっと・アンコール	陵南の森公民館 近鉄「高鷲」駅北東 徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳ふうもん社	26日(日) 13時30分開場 誘い水・カリスマ・すっきり	開発ビル 2F ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪川柳会	27日(月) 18時開場 先頭・がらん・ペンネーム・押す	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

6 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	2 日(木) 14時締切 降る・中毒・水	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
城 北 川 柳 会	4 日(土) 14時締切 結ぶ・イメージ・おかしい 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線 千林大宮駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
富 柳 会	4 日(土) 14時締切 潤・抜ける・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
倉 吉 川 柳 会	4 日(土) 14時締切 ストレッチ・辛い・笑う	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ え 吟 社	4 日(土) 13時30分締切 根気・参加・地震・少し	松江市雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
あかつき 川 柳 会	10日(金) 14時締切 忘れる・親・瞬間・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川 柳 塔 さ か い	10日(金) 13時開場 楽しむ・山・あずさ(折句)	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳大阪	11日(土) 14時締切 試験・グルメ・冷える	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
川 柳 塔 打 吹	11日(土) 14時締切 苦・チェック・ポトポト	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川 柳 会	12日(日) 14時締切 億劫・はんなり・呼ぶ・雑詠	八尾市浜川町 安中町集会所 1F JR八尾駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川 柳 塔 わかやま 吟 社	12日(日) 14時10分締切 兼 題=互角・照れる・晴れ晴れ 課題吟=格闘技	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町2-208-5 楽原道夫
西宮北口 川 柳 会	13日(月) 14時締切 時間・仕切る・ちょぼちょぼ 自由吟	西宮市立中央公民館 6F 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
川 柳 あまがさき	14日(火) 14時締切 黙る・魚・うっかり・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 阪急「武庫之荘」駅南へ200m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5-20-14 加川靖鬼

柳界展望

新同人紹介

上田ひとみ

—哲男・正和推薦

杉野羅天

—霜石・朱夏・楓楽推薦

秀句 田中 一眸

神の糸いただき命紡いでる

秀句 石橋 芳山

アンジェリーナジョリ

1の唇は毒だ

★2016年ふあうすと

川柳大会。同人成績。

兵庫県知事賞 川上 大輪

煩惱で埋め尽くされて
いる隙間

▽出 版△

○川柳句集『ふたり傘』
岸本宏章・孝子著。A5

判224頁。私家版。

○川柳句集『ネオンきら
きら』井丸昌紀著。A6
判128頁。1200円＋税。
新葉館。

○『川柳一句集』百花繚
乱。松山芳生編。A5判
20頁。私家版。

▽柳界動向△

☆小島蘭幸主幹は「尾道
文化」No34に、「川柳塔」
と題して、麻生路郎はじ
め歴代主幹の作品を紹介
した。

▽新誌友紹介△

倉吉市 若松由紀子

紹介者 新家 完司

鳥取市 浅井ゆり子

紹介者 森山 盛雄

鈴鹿市 小河 柳女

沼津市 鳥沢 浩之

常任理事会 4月7日(木)

①第4回春の誌上大会ま

つりの反省②ホームベ

ジについて③塔定例確認

事項⑤各部報告事項。

次回 6月7日(火)AM10時

★全日本川柳協会「平成
柳多留第19集」。同人成
績。
秀句 三宅 保州
この指に止まれと言っ
てくれた人
★川柳「湖」第2回「ふ
るさと川柳」。同人成績。
秀句 牧野 芳光
雪国の桜は歌うように
咲く
★時の川柳社第36回「と
きせん賞」。同人成績。
三才 太田扶美代
観覧車男に降りる駅が
ない
三才 太田扶美代
煙草を吸いに行くボク
だけの銀河
三才 古久保和子
柔らかな耳持つ人と午
後のお茶

★第29回NHK学園全国
川柳大会。同人成績。
大会大賞 藤井 智史
曇天を割る一撃を溜め
ておく
特選 堀 正和
たつぷりと生きては来
たがまだ飽きぬ
★第20回川柳展望全国大
会。同人成績。
秀句 小谷 小雪
背骨にもかげがえのな
い鍵がある
秀句 北村 賢子
和解への鍵を握ってい
る笑顔

第31回国民文化祭・あいち2016 川柳作品募集要項（概要）

～ 犬山の城下に響け川柳の祭典 ～

1. 応募受付期間 平成28年4月20日(水)～7月20日(水)(当日消印有効)

2. 応募規定

(1) 作品

(2) 応募料

(3) 応募方法

(4) 応募先

3. 宿題・選者

《事前投句》小学生・中学生の部

《事前投句》高校生・一般の部

《当日投句》

「甘 い」	「自由 に作る」	「朝 発」	「急 ぐ」	「味 噌」	「フ リ」	「ド ム」
駒木 一枝 (福島)	大楠 紀子 (奈良)	岩田 明美 (静岡)	渡辺 楓 (秋田)	西出 楓 (大阪)	安藤 波瑠 (東京)	重徳 光州 (愛知)
矢沢 和女 (兵庫)	江畑 哲男 (大阪)	大西 泰世 (大阪)	西畑 哲男 (大阪)	大西 泰世 (大阪)	江畑 哲男 (大阪)	矢沢 和女 (兵庫)

一人各題二句詠（未発表作品に限る）
一人につき1,000円（但し、海外投稿者、身体障害者手帳の写しを添付された方、及び小・中・高校生は無料とします。）
所定の応募用紙及び応募票に必要事項を記入し、郵便振替払込金受領証又はその写しを添えて応募してください。
第31回国民文化祭愛知大会事務局
（一般社団法人全日本川柳協会内）
〒530-0041
大阪市北区天神橋2丁目北1-11-905

第二次選者

4. 賞（予定）

5. 発表会場

6. 問い合わせ先と募集要項の依頼先

7. 主催者

大野 風柳（新潟） 岡崎 守（北海道）
佐藤 岳俊（岩手） 天根 夢草（大阪）
田中 新一（大阪）

文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞・
愛知県知事賞・第31回国民文化祭愛知県実行委員会
会長賞・愛知県教育委員会教育長賞・犬山市長賞・
犬山市教育委員会教育長賞・全日本川柳協会賞・
愛知川柳作家協会会長賞

川柳大会（当日投句受付、入選発表、選評、表彰式）
平成28年11月20日（日） 9時00分～16時30分

「犬山市民文化会館」

入選作品は、「作品集」として刊行し、応募された方
（小・中・高校生は入選者）に無料で配布。

〒530-0041
大阪市北区天神橋2丁目北1-11-905

（一般社団法人全日本川柳協会内）
第31回国民文化祭愛知大会事務局 宛

TEL (06) 6352-2210
FAX (06) 6352-2433

文化庁・愛知県・第31回国民文化祭愛知県実行委員会
一般社団法人全日本川柳協会・愛知川柳作家協会
第31回国民文化祭「川柳の祭典」愛知実行委員会

編集後記

あじさいのふくらさん
とてんと虫 薫風

★熊本・大分地方を襲った地震の被害に茫然としている。一番の被害を蒙った熊本県益城郡にお住まいの同人の方は、自宅の損壊は免れたものの一時、車で寝泊まりされたとか。熊本・大分で5月14日現在、震度1の余震は一四〇〇回以上、想像を絶する。被災者の皆さまでのご健康と一日も早い復興をお祈りしています。

★「何かおもしろい本はありませんか」と訊かれた。「おもしろい」の解釈も色々だが、折に触れて紐解いているのは『レトリカー比喩表現事典』（一九八八年 白水社）だ。古今東西の詩的表現の数々をアイウエオ順に掲載。たとえば「雲」を引いてみる。三好達治は「青

い世界地図のような雲」三木卓は「ねずみいろに輝く砲弾のような雲」、安倍公房は「白いひげをたらしめた古代の遺跡のような雲」と表現する。作家の、詩人の感性がきらりと光って、脳に刺激を与えてくれる一冊。

★川柳塔おきな準備室のウェブ句会の選者を仰せつかった。森山文切さんからメールで作品が届いたのが4月21日。その晩に選の結果を文切さんにメールで送信。翌日の22日にはホームページに天地人佳作平抜きが発表されている。聞きにま

さるスピードである。文切さんのご尽力には感謝あるのみ。皆さん一度覗いてみてください。

★最近二〇二五年問題という言葉を耳にする。いわゆる団塊の世代が二〇二五年までに後期高齢者となることで、介護

ひとこと

愛媛大会の思い出

母が住んでいた愛媛県北宇和郡広見町の公民館で、広見川柳会があり、母に付き添って行っていたが、一九八三年十一月初めて句会に参加しました。

一九九三年六月、第17回全日本川柳愛媛大会が松山で開催されました。私は大阪に転居していましたが、汐風川柳会の月原宵明先生や、黒川紫香先生のご推挙ですでに柳籍は川柳塔にありました。

大会には、大阪から西尾葉主幹や橋高薫風先生ら十二名の皆さんとご一緒させて頂き、参加致しました。大会参加者は八〇四名で大盛会でした。

川柳大賞に川島諷云児先生が「軋む日もあった線路を振り返る」トロフィを貰われました。私は一句入りました。大会委員長は磯野いさむ先生でした。二十三年も前の事ですが、昨日の事に楽しく嬉しかった事を思い出しています。（富山ルイ子）

医療費などの社会保障費の急増が懸念されるといこと。未知との遭遇。老い。私の一番の関心事である。第22回川柳塔まつりは10月1日（土）。「老いを詠む」と題して私がお話を担当。皆さまの参加をお待ちしています。

（朱夏）
□5月6日、口下手な私

が本社句会で「川柳塔誌ができるまで」を、お話として喋った。お話ではより交換してはどうかあると思う。

とも考える。
□川柳塔は、入選句に天地人の三才と、佳句5句

の方からよく聞かれるのが佳句5句の順位。前が一番なのか五番なのか教えて欲しいと。一般的には天の句に近づくのだから五番から一番の順位にするべきだという考えが多くある。川柳塔としてきつちりしておきたい課題であると思う。

（勝弘）

個人用

残暑見舞広告 原稿台紙

きりとらせん

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

1/9頁 1/6頁 1/3頁 2/3頁 1/2頁 1頁

(ご希望の大きさを○で囲んでください。)

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

6月20日締切

電 話	住 所	姓・雅号
()	〒	
()		

川柳など掲載希望事項

送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201

川柳塔社



作品募集

8月号発表(6月15日締切)

川柳塔(8句) 小島蘭幸選
水煙抄(8句) 川上大輪選
愛染帖(2句) 新家完司選
檸檬抄「ゴール」(2句) 三浦強一選
長浜美籠共選
インスピレーション・ナビ(2句) 大西泰世選
酒井真由選
一路集(2句) 「備える」 初代正彦選
「数」 山口光久担当
初歩教室 「チャンス」(3句) 山口光久担当

9月号
檸檬抄「前触れ」
一路集「受ける」「トライ」
初歩教室「色」

第35年度 夜市川柳募集

第1回「シグナル」 新家完司選
ハガキに3句 6月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円(送料86円)
半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)
二〇一六年(平成二十八年)六月一日発行

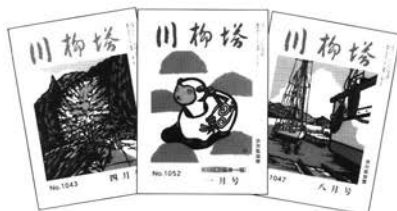
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話(〇六)六七九―三三九〇番
振替 〇〇九八〇―四―一五八四七九番

本社6月句会

とき 6月7日(火) 13時開場・13時40分締切
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。―
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ヶ辻町19―12 電06・6772・1441
おはなし「豆秋に恋して」
兼題「どっち」
席題「脈」
「曲がる」
「ヒット」
「堂々」
会費 1000円
投句料 500円(切手可)
鈴木いさお選
川端一歩選
原田すみ子選
堀本宏子選
堀正和子選
古今堂蕉子選
小島蘭幸選
(各題2句以内)

路郎忌7月句会
6日(水) 午後1時から
兼題「迫る」「愚か」「スイッチ」
「いよいよ」「空」

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



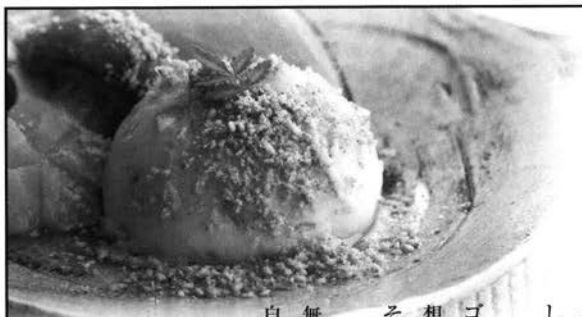
美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
TEL (06) 6372-1178
FAX (06) 6372-1196
E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しっかりと残る、深いコク。
料理をより美味しくする
ゴマを作りたい、真つすぐな
想いから生まれた逸品。
それが「プレミアムロースト」。
素材本来の良さを余すこと
無く引き出した、オニザキの
自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーション
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア(ホスピス)
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>